

本当に秘密結社ですか！？

なゆなん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

秘密結社hooXの面々がわいわいやるお話です。たまに戦闘回やら暗い回があると思いますが、hooXメンバーの仲はいつでも良好ですのでご安心ください。p
ixivでも投稿されているのでそっちの方がよろしければそちらで！

目次

沙花又クロエ		風真と沙花又	85
沙花又クロエ	2	風真と沙花又?	96
沙花又クロエ?	10	風真と沙花又③	102
沙花又クロエ③	17	風真と沙花又④	108
沙花又クロエ④	25	【番外編】わしらの晩酌	119
沙花又クロエ?	35	秘密結社はバイトする	
総帥の大冒険	47	バイトしようぜ!!	124
総帥の大冒険?	57	バイトしようぜ!!②	134
総帥の大冒険③	67	バイトしようぜ!!③	144
総帥の大冒険④	79	バイトしようぜ!④	152
風真と沙花又		いつか君と空を飛べたら	161
		いつか君と空を飛べたら②	172
		いつか君と空を飛べたら③	182

いつか君と空を飛べたら④ | 193

いつか君と空を飛べたら⑤ | 203

いつか君と空を飛べたら⑥ | 215

【本当に秘密結社ですか!?】設定集

226

【番外編】吾輩は戦艦が欲しいのだ!

239

風真の里へレッツゴー!

風真の里へレッツゴー! | 254

風真の里へレッツゴー!② | 263

風真の里へレッツゴー!③ | 272

風真の里へレッツゴー!④ | 281

風真の里へレッツゴー!?! | 289

風真の里へレッツゴー⑥ルートB

301

風真の里へレッツゴー!⑥ | 313

【断章】温泉を楽しむh o l o X

322

こよりハザード!

こよりハザード | 329

こよりハザード② | 337

こよりハザード③ | 345

こよりハザード④ | 354

こよりハザード⑤ (エピローグ)

364

【二話完結】吾輩とゲーセンの猛者

エピソード

ホロックスとホロライブ

本当に秘密結社ですか？

|

|

384 377

沙花叉クロエ

沙花叉クロエ

初めて人を殺した時のことはよく覚えている。

お父さんの資金を目当てに拉致されて、軟禁された部屋。自分の部屋とは全く違う粗暴な雰囲気、涙が止まらなくなった。

逃げたい。

逃げなきや。

そんな気持ちで暴走した。ただのチンピラ集団なんだからちよつとのお金で引き下がってくれるはずだったのに、あの時の私はそんなこと考えられなかった。

食事を与えようと入ってきた輩の背後をとって、躊躇なく尖ったガラスの破片を食い込ませた。

ぐぶ、

想像とはかけ離れた感触に私は咄嗟に手を離しそうになる。だけど痛みに唸る食事係ははつきりとした殺意をもって私を睨んだ。

このまま殺さなきや殺される。

荒くなる息と、漏れる声と、響く絶叫が私の耳から頭を掻き回す。絶対の禁忌を犯した心は痛みを伴ってぐじゅぐじゅと黒く染まっていく。

それでも身体は物凄くクリアに動いて、食事系の抵抗を躲し続けながら私は幾度となくその身体を貫く。

気づけば、電流を浴びた鼠のようにピクピクと痙攣し、大量に血を流す食事係が目の前で倒れていた。

「捜せっ!!」

「クソがつーどこいったんだ?」

「出てこいやあ!!」

軟禁部屋を後にする。殺人によるショックで極限まで活性化された五感が働いて、ギリギリのところまで追手から隠れて知らない部屋の中に転がり込んだ。そこはどうやら倉庫のようだった。窓には鉄格子。ここからは逃げられない。

誰もいない暗闇に安堵しながらも、逃げる手段を考えなければいけない緊張感に膝を震わせる。立ち上がろうとも力が入らない。

「しにたくない……しにたくないよお……」

怒号に怯え、膝を抱え、泣きじやくりながら私は弱音を吐き出す。

「たすけて……」

来るはずがない者を呼ぶその声はか細い。

「たすけてえ……っ!」

「ただど——」

「おいお前」

「……っ!?!」

「おわっ、驚くなよ。こつちがびつくりするだろが」

「ラブ、怖がつてる子にいきなり声かけちやダメだよ」

「ああん? 吾輩に怖がる要素ないだろ?」

「それ自分で言つてていいの?」

——人だ。

片方は子供っぽい無邪気さと底知れない力の片鱗を感じさせる声の持ち主。闇に同化して顔が判別できない。

もう片方は大人の女性特有の余裕を残したしっとりとした声の持ち主。暗い中でも目立つ赤い髪と獲物を逃さないとはかりに鈍く光る瞳にたじろがされる。

誰? 追手?

殺される……?」

「ほれ、手え出せ」

「ひっ……！」

子供っぽい方からぶつきらぼうに差し出された手のひらにさえ、私は警戒しビクツと震える。恐怖の対象が理由そのままチンピラからこの人達に変更される。

「あれ、これ怖がつてね？」

「ほらー、だから言ったじゃん」

「んーむ、逃げなきゃいけないんだけどなあ」

「え、へ……」

二人の会話の意味を図りきれずに戸惑う私。だけど子供っぽい人は出した手を引かない。

「いいから、ほれ」

「え……？」

「だからそれじゃあ分からないでしょ。ねえ君、逃げられないんでしょ？」

大人っぽい人が呆れたように子供っぽい人を私から遠ざけ、私に向かつて問いかけた。逃げる。というワードに敏感に反応して、私は無意識にふるふると頭を振る。

「今から私達と逃げるよ。だから安心して。おいで」

そう言って再度差し出されたさつきとは違う大きな手のひらに、私は吸い込まれるよ

うに近付いていた。その手のひらを掴もうとする直前、大人っぽい人の後ろで子供っぽい人が何かを呟く。

「——飛べ」

そう言いきつた瞬間、今までの暗がりや嘘のように明るく輝いた。その光源となるのは床に描かれた幾何学的な模様。

「っ!!」

「ちゃんと掴まってね」

「さあ、いくぞ?」

鷹のように凛々しい顔立ちをした女のひと、頭の角が目立つ、いたずらっ子のようにニヤリと笑う少女。輝く世界の中で一際美しく見えるその二つの存在は、私に笑いかけながら、私と共に光の向こうへ消えていった。

気がつくと、私は自分の部屋で寝かされていた。

目が覚めた私に泣きながらお父さんとお母さんと妹が抱きついてきて、私は事の顛末を聞かされた。

私が行方不明になったこと。

脅迫状が送られてきたこと。

身代金を用意し、交渉しようとしていた矢先に何故か玄関で倒れていた私を見つけたこと。

チンピラ集団をお父さんが手を回して潰したこと。

「よく逃げてきたね!」

「頑張ったな!ごめん!すぐ助けられずに!」

「お姉ちゃん……!」

多すぎる情報とくつついてくる家族に私の頭はクラクラして、だけど久し振りに家族に会えた気がしてとても嬉しかった。

それでも、

「おかあさ……」

『私ね、人を殺したんだよ?』

「……っ!!」

「どうしたクロエ」

「あ……いや、なんでもない」

幸せを感じた瞬間蘇った。

あの生温かい感覚。

人殺しの感覚を。

「ちよつと、休む、ね……?」

目を閉じるたびに鮮明になっていく。

殺した。

刺して、また刺して。

人殺し。

人殺し、人殺し、人殺し。

「でも……」

その時に、一緒になって蘇る。

あの子供っぽい声で紡がれた言葉が。

『お前がその感触に慣れるときが来たら吾輩を呼ぶといい』

『ほんとは、慣れないほうがいいんだけどね』

『おい幹部、うちは人手不足だ。水を差すな』

『ラブ……それ言っちゃダメでしょ』

『とにかくだ……お前の本能が覚醒する時、吾輩は心から歓迎してやるぞ?』

『私も待ってるね』

『さすればだな……来る時に備えよ!』

心臓が激しく存在を主張する。心が新しい私を祝福している気がする。あの人達に惹かれていた私がいる。

運命だろうか。

そうかもしれない。

幼い私はそう決めつけて、意識が遠のくまでの長い時間、生温かい手を胸に添えて鼓動を感じていた。

そして今日。

私は再会する。

沙花又クロエ?

「おうインターン生」

「こ、こんにちは……」

「じゃ幹部よろしく」

え？

それだけ？

再会の挨拶は？

「えつと……なんかごめんね、うちの総帥が」

「あ、いえ……」

私の仕事場に向かおうと、大きい結社本部の中の長い廊下を歩きながら、大人っぽい人、幹部の鷹嶺ルイさんが苦笑いしながら頭を下げた。私がこのインターンシップが行われていることを知ったのはこの人の働きがある。

秘密結社 h o r o x。地球侵略を密かな目的として日夜蠢く小規模な組織。総帥であるラプラス・ダークネス（さん？）曰く「少しダークな雰囲気醸し出す謎の組織つ

ていうのがカッコいいだろ？」らしい。

私が出ると殺人に躊躇がなくなってきた頃、ルイさんがどこからか飛んでやってきた。優雅な翼を翻し、鷹のように凄まじい速度で近づいてくる人を見たのは初めてだったから軽く気絶しかけた。

鋭く黄金に輝く瞳に高い鼻。シュツとした輪郭。翼の形をした特徴的な赤髪も目を引いて仕方がなかった。

『秘密結社だからね。インターンは私が募ってるんだよ』

よかったら、とチラシを配った刹那消えたので再会の挨拶もなにもできなかったけれど、お陰でこうやって話すことができている。

「えつと、ルイ、さんはなんで結社に？」

「え、私？」

「はい」

「ラブのためかな」

ルイさんは、んーと口をもによもによさせてから見たことのない笑顔で答える。頬が少し紅に染まっていた。

「え、ラブ……。ラブラス、総帥ですか？」

「うん。あの子が地球侵略したいみたいで」

「あ、そう、なんですね……」

「軽いと思った？」

「へ？あ！いやっ！……ごめんなさい」

「いいのいいの。その通りだし」

「じ、じゃあ……ラプラス総帥はなんで……」

あんなちっこ——いや、あんなに総帥と言えない総帥は見たことがない。ふかふかソファに座ってFPSをしながら缶コーラを飲んでる彼女が何故地球侵略を企んでいるのだろうか。

「あ、ははは……まあ、ラプの第一印象が悪すぎたのは謝るけどね」

こころごとと笑みの種類が変わる。今度は照れから自信の滾るものへと。

「あなたと初めて会った時、ラブもいたでしょ？」

「あ、はい」

『来る時に備えよ！』

「あなたがそれで来たこともそうだけど、結構あの子は人たらしなんだよ」

「ひと、たらし……」

「うん。それに——」

それに、という二の句に続く言葉はとても意外だった。それと同時に広く長い廊下と

は不都合な普通の大きさの扉が見えてくる。

「……お話はこれくらいにしとこうか。さあ、ここがあなたのインターン場所だよ」



「あなたが新人ちゃんでごさるな？」

簡易デスクに書類が積まれたただのオフィスかと思いきや奥には何故かグラウンド。

そのグラウンドの荒れ様から見てもここが何かの訓練施設であることは明白だった。

いや、それよりも――

そこにいた存在の方が私の心を惹いた。

天使がいた。

「~~~~~!!!」

「?」

淡い黄色の長髪をポニーテールで纏めた一輪の華。エメラルド色の瞳をキラキラ輝かせた女の子は羽織りと背中を揺らしながら満面の笑みを見せた。

端的に言えば、タイプだ。あまりの可愛さに私は自身の口を抑えて言葉にならない歓

喜の悲鳴を上げる。ルイさんはそんな私に気づかず華を私に近づけた。

「こちらは風真いろは。遠い辺境の侍の村からうちの結社に入ってくれた有能な用心棒だよ」

「風真いろはでござる。よろしくでござる——」

「——好きです！」

「へ？」

咄嗟に出た言葉。それは愛。

「と、とととと友達になるためにま、ままままずお付き合いからお願いますっ!!!」

人は心から美しいと思える存在が目の前に現れたらどのような行動を取るだろうか。ひれ伏す。泣く。

求婚する。

「ど、どうしたでござるか？」

「お友達になるためにお付き合い……なの？」

「あ——」

そしてやらかす。

「じ、冗談です！忘れてください！す、すす末永くよろしくお願います!!」

そしてまたやらかす。

「面白い新人でござるなく。こちらこそ同じ結社のメンバーとして末永くよろしくでござる」

さる！」

だが幸いにも後者は懐疑なしに好意的に受け取られたようでいろはさんのご尊顔をほわほわとした笑顔が戻っていた。

「いろは……その言い方は無慈悲だよ……」

ルイさんが察したように、望んだ形ではなかったけれど。

いいんだ。無自覚でもいいんだ。それも可愛い。

私の好みに改変されたモナ・リゾを見ているように心に静寂が宿る。

「モナ・リザな。レオナルド馬鹿にすんなよ新人」

「ひゃあつ!!!」

瞬間、背後からかけられた、柑橘系の果実が甘く弾けたような声に臓器か飛び出そうになるほど驚く。首がもげそうなほどの速さで振り向くと、そこには大きい角に乗った鴉がいた。

「ここ、ここど——ラブラス総帥!?!」

「おつ、いい呼び方じゃーん。ま、総帥だけでいいぞ?」

正確に言うくと、鴉を頭に乗つけた総帥がいた。

とうかナチュラルに心を読まれた。

「あれラブ、どうしたの?」

「お得意のおサボりは終わったでござるか？」

「おお、おで韻踏んでんじゃん。……ってかサボってねえわ何がお得意だ」

「え、大得意でござるよな？」

「はーん！得意って言う方が得意なんだしー！」

総帥、幹部、用心棒が揃った会話はまさに三姉妹のそれだ。なんのインターンか分からずに「いつてらっしやい」してくれた二人の妹が頭に浮かぶ。

って、いやいやそうじゃなくて。

「え、ええつと、総帥、どうしたんですか？」

「ん……？あ、そーじゃん。よく言ってくれた新人！」

ラプラス総帥はどどんと胸を張ると宣言した。

「侍！新人！お仕事の時間だぞー！」

沙花叉クロエ③

『幹部の報告によると結社の場所を知る組織があつてだな、まとりあえずやばくねーかつてことよ。それにあいつら世界の名画を分析して贋作を作つて話じゃん？許せねーよなあ？』

『贋作は表向きの理由だからともかく、居場所知られたのはラブが調子乗つてしょっちゅう移動魔法使うからでしょ』

『うっ、んー』

『目を逸らさないの』

『んーつてことだ新人！いつてこい！』

『ごめんね。元々相当悪いことしてたから掃討しようと思つてた組織だし、今ラブが言った通り、雑だけど大義名分は作つたからいろはと一緒に頑張つてきて』

「本当に秘密結社なんですかね……」

「あはは。申し訳ないでござる……」

誰かの口調を真似たように仕事内容を話しだした総帥を思い出して思わずため息をつくと、いろはさんが苦笑しながらフォローしてくれた。

宵闇に隠れて私達は歩く。出しゃばろうとする総帥を抑えて、ルイさんが翼を使って目標の近くに飛んでくれたからもうちよつとすれば着くはずだ。

予想はしていたけれど、やっぱり戦闘に関することを任せられるんだ。昔掛けられた慣れろっていう言葉通り。

『お前はさー、そーだなあ……そうじ……掃除屋だな！ん、いい響きだ！』

役職名も即決だった。あの総帥は本当に大丈夫なんだろうか。全部が適当な気がする。ルイさんは何ですつと総帥についているんだろうか。

それは、この人もだけど……

「〜♪」

さつきから空気が緩くない？

これって、戦闘しに行くんだよね？

「いろはさん……怖くないんですか？」

「まあ風真はあのおこちやまの尻ぬぐい慣れてるでござるからなあ」

新人ちゃんはどうでござるか？という中性的な柔らかい声が鼓膜を揺らす。歩幅を合わせていることすらドキドキして俯いてしまうのに、いろはさんは何の恥ずかしげも

なく覗き込んでくる。

照れる……！

「わ、私はその、大丈夫だと思います……こんな得物も貰っちゃったし」
必死に返ししながら、私は手に装着したアイアンクローを見つめた。

『ほーい、これ新人のだぞ』

『これって……』

『鉤爪とか良い趣味だよなー！博士も張り切って造ってた』

『博士？』

『ほれ、そこにメモあるだろ？』

『えつと……』

【こんこよー♡これが新人ちゃんの初仕事の相棒になるって聞いてつい張り切っちゃった！アイアンクローなんて可愛い武器使うんだね！結構良い素材を使ってるから血がついても切れ味とかの問題は気にしなくて良いと思うよー！あと付属のシヤチマスクも可愛いから絶対着けてね？♡初仕事終わったらこよのところに遊びに来てねー♡／（）

○（）／♡

「こより」

『い、いより…さん…?』

想像していた人物像とメモがあまりにも乖離しすぎていてあの時は微妙な反応をしてみました。ここまでしつくりくる得物を造ってくれるなんて優しい人だ。

「こよ子さん、どんな人なんだろう。」

「新人ちゃんも帰ったら会えるでござるよ。可愛くて優しい子でござる」

「よかったです…そういうえば、holoXってあとどれくらい構成員がいるんですか？」

「えっと、……あ、こよちゃんですら最後でござるな」

「え……?」

本当に秘密結社なんだろうか。

「そ、そういうえばアイアンクローなんて珍しい武器使うんでござるなあ!」

いろはさんが私を見て強引に話を変えてくれた。

「えっと、家にそれくらいしなくて、殺陣も全部それでやってて」

「我流でござるか! 凄いでござる」

「えへへ……」

あの人らにもう一度会いたいと思ってからは、殺人術を必死に身体に叩き込んだが、

シャチの特性である速さと特殊音波を駆使して隙のないものを編み出すには結構な時間がかかった。

でもその分自信はある。それに隣にはいろはさんがいる。油断はしないけど、負けるとは全然思わない。

「そういえば、いろはさんの刀は恰好良いですね!」

「そうでござるか!」

「銘とかあるんですか?」

ふっふーんと自慢げになりながら、いろはさんは総帥のように胸を張って答えた。

「この刀はチャキ丸でござる!」

え——

あ、しまった。

一瞬で表情を戻すがもう遅い。いろはさんは見慣れているであろうその反応にくつと頬を膨らませて抗議した。

「今絶対センスを疑ったでござるな〜!」

「ごめんなさいごめんなさい!!」

平謝り。「え、微妙だな」という気持ちのまま顔に出してしまった私をいろはさんがポコポコ叩く。全く痛くないむしろ気持ちいい。

「も、もうすぐでござるよー」

そんなコントを繰り広げていると、目標はその姿を見せ始めた。

「マスク、着けといた方が良いでござるよ」

「わかりました」



ボタン。

いきなり開いた扉に組織員達はしばらく呆然とした。当たり前のように電子ロックをかけ、組織に関連する者にしか操作できない扉はそこには無く、夜特有の静けさが忍び寄ってくる。

パチン。

「こんばんはでござる。扉斬ってしまって申し訳ないでござるな」

そんな静けさに紛れるように納刀し侵入する侍に、一体どれだけの人が度肝を抜かれただろうか。恐らく全員だ。ここまで来たということは嚴重な警備の玄関ロビーを通り抜け各地に配置されている護衛を無力化してきたということ。

恐怖以外のなものでもない。

扉はいつの間にか斬り刻まれていて、鋭い太刀筋をその身に宿しながら機能を完全に停止させた。

「な、なっ!?!」

一人が発した声に含まれた動揺は瞬きの内に伝播する。

「敵襲——!!!」

「奴らだ! 奴らが来たあ——!!!」

「撃てえ——!」

自身の命を守ろうと逃げ惑う組織員。発砲を試みる輩が現れるがそのことごとくを風真が鞘で軌道変化させる。火薬が爆ぜた音がパチパチと粒となって弾ける。

「ば、化け物が……!」

「失敬な。どつちのことでごぎるか」

ここにこしなながら視認できるギリギリのスピードで腕を閃かせるいろはさんには弾幕も通じない。というか怖い。

「というか早まらないで欲しいでごぎる。拙者は話し合いに来たんでごぎるよ」

本当ですかねいろはさん。

でも確かに護衛達は峰打ちで気絶させてるだけだから、いろはさんは本気で話し合いに来たのかもしれない。総帥からは殲滅という命令が出ているけれど、あまり戦いたく

ない人なんだろうか。

「う、嘘を言うなっ!!」

「本当でござる。まあ一番上からは殲滅しろって言われてるでござるが。拙者は狩らなくて良いなら狩らないでござるよ」

「……!?!」

困惑から恐怖へ、そして疑惑と変容していった感情。発砲しその全てをいなされながらも思考を重ねる組織員代表。現状と理想を測ってついに自身が生き延びる最善の選択肢に手を出す。

「発砲、……やめい……!」

「し、しかし研究長!」

「やめい……っ!!」

「っ!……分かりました」

「良かったでござる。それじゃあ責任者とお話させてもらいたいので、案内して欲しいでござる」

「分かった。ついて来てくれ」

隙を突かれないよう適度な剣気を発しつつ、研究長についていくろはさんを見て、組織は数より質なんだなと思いきり始めてきた私だった。

沙花叉クロエ④

「ねえラプ」

「んー?」

映画を観ているというのにどこか上の空。バランスボールに座った状態でポヨンポヨン跳ねているラプラスを珍しく思いながら、ルイは一つの気掛かりを問うた。

「新人ちゃん、今日初めてでいきなり大丈夫かな?」

「んー……」

書類仕事を片付けながらもこちらに話を投げてきたルイを珍しく思いながら、ラプラスは身体を捻ってそれなりに考えながらぼーつと返す。

「大丈夫だろ。侍がいるし」

「だといいんだけど……」

ため息とも分からない吐息を漏らすルイ。これでは信頼しているのかしてないのかわからない。少なくとも吾輩はそっこの面では全く信頼されてないな、とラプラスは笑った。

「だーいじょーぶだつてー」

「そう?」

そのラプラスの笑みが、いたずらっ子のそれになる。

「新人は新人で、化け物だしな」

「ん…………?」

ボソツと小さく紡がれた言葉はルイに届くことなく霧散する。代わりに映画の名シーンであるヒロインの決死の叫びが空気を揺らした。

「おお…………やっぱいいわこのシーン…………!」

「…………」

「ん?どうした幹部」

「…………はあ。ほんと素直じゃないなあ…………」

総帥としての役目のほとんどを果たしていないのに、ここぞというところでそういう顔を見せるのがラプラス・ダークネスというおこちゃまなんだな、とルイは笑った。

「へ?なんだって?」

「ほら、そこも良いところでしょ」

「!?…………見逃したじゃないか!なんで話かけたんだよ!」

「はあ…………ほんとこの総帥は…………」



「とにかく俺らはあんたらの情報を売る気はねえんだ。頼むから潰すのはやめてくれや」

組織を束ねる男は乗り込んできたいろはさんと私を丁重に扱って更に頭まで下げた。常時崩壊の危機に晒されているとはいえ、大したものだ。

「うーん。難しいでござるな。絶対は無いでござるからなあ」

その男に「売らない証拠がどこにある？」と優しく突き付けるいろはさんも大概だ。もはや風格は必殺仕事人。憧れる。

「どうすればいい」

汗が男の額から滝のように出ている。

その様子を知ってか知らずか。

「じゃあ、調査をするでござるよ」

いろはさんは提案する。

「調査……だど？」

「この組織でどんなことをしているか、その全てを拙者達に見せてもらおうでござる」

「それで、どうするんだ……」

「拙者のモットーは、『悪い人は斬る』でござるよ」

「……なるほど。信用するに足るか見せろと……」

もしかして試してる？

ルイさんの言う通り、潰すに足る悪行を働いているのか自分の目で確かめるつもりなのかもしれない。

あれ。でもこれもし潰さなかったらどういふ報告するんだろう。私はお仕事も禄にこなせないダメダメインターン生にならないだろうか。

「いろはさん……？」

「拙者を信じて欲しいでござるよ」

こっそりと不安を囁くと、いろはさんはそれだけ言った後少し微笑んで、男の方に視線を戻した。

「さあ、紹介お願いするでござる」

組織の研究は脳に関するものだった。

脳の働きを活性化させた生物クローンを量産し、調教することでハイスペックな人形へと育て上げる。総帥が目をキラキラさせそうな話題だ。

震える声で説明を続ける研究員に続き、廊下を進む。

「……………」

ふとその時、私は違和感を覚えて後ろを振り返った。これは、と意識を集中させる――

「……………行くでござるよ」

「っ！」

とその前にいろはさんに呼ばれて、気になる気持ちを抑えながらしようがなく走り寄った。

「と、これで終わりだよ」

全ての説明が終了し、私達はいつの間にかロビーに連れてこられていた。まるで早く帰ってくれと願っているように。

いろはさんが斬った玄関扉が見える。

「どうだったかな…？」

男はソファに深く座り込み、俯きながらそれだけ言った。研究員の小さな嗚咽が聞こえる中、いろはさんは黙っている。

「いろはさん……」

説明された部分だけで考えればそれほど非道な研究には思えなかった。クローンの使い方にもよるけれど、悪い計画は立ててないみたいだし。

どうしていいか分からない。その心がいろはさんに声をかける原動力になった。そしてちょうど、その時だった。

「ふう……」

いろはさんが、小さく息を吐いた。そして男を見て聖母のような優しい笑顔でこう告げる。

「さて、弁明はあるでござるか？」

「——え」

その言葉を聞いた瞬間、疑問の音をロビーに響かせたのは研究員でも、男でもなかった。私だ。でもそれは、本当に殺すのかという疑問じゃない。

いろはさんの声音が、風真いろはという優しい人間がその温度を体現できるのかと驚愕させられるほどに、冷たく、突き刺さるようなものだったから。

「っ!!……ま、待てっ!」

「いや、待たないでござる」

静止の呼びかけを、いろはさんは途轍もない怒気をもって切り捨てる。私はその時

ろはさんの顔を見れなかったけれど、それで良かったと思つた。

向き合えば、失神する。

「何故だ！ 私達は生物の進化の為にここまでやつてきた！それが何故殺されなければならぬ！」

「御託を並べるのもいい加減にするでござる」

「ご、御託ではない！……理由を教えてください！」

「拙者は全て見せるよう言つたはずでござる」

「だ、だから見せた！これで全てだ！」

縋り付くように問いかける男に、いろはさんは呆れたような侮蔑の視線を浴びせながら言つた。

「子供は、果たしてどこにいるんでござろうな」

「子供……？」

子供つて？

「子供だと……!!?ど、どういうことだ！」

私と同じ疑問を、今にも泣き出しそうな顔で男が叫びぶつけた。それでもいろはさんの声音は一切変わらない。

「脳の研究。それに使われる小さい子供の脳でござるよ」

あ——

私はそこまで聞いて、やっと気づいた。私というはさんが施設内を回っている時に覚えたあの違和感。シャチの鋭敏な神経が受信した何か。

何も無いはずの壁の向こうから微かに聴こえた音。あれはそうだ。

—— 悲鳴。

「確かに小さい子供達の声なら、微かに感知できました」

「補足ありがたいでござる」

「な、なにを言つて……」

「小さい子供を拉致させ高値で買い、取り出した新鮮な脳を丹念に研究する。これのどこが悪くないのでござるか、拙者は分からないでござる」

「ち、違うー！」

「それも、隠し部屋で」

「ちが……ちがうんだ……」

「実は分かつてたでござるよ」

「!?……な、なにが……」

「ここに来る前から、お主らが何をしているかなんて拙者は分かつてたんでござる」

「なら、……ならどうして……!」

「素直に自白するようならば、殺さずともこちらで捕虜として罪を受け入れるように上に働きかけるつもりだったんでござるよ……」

「……!!」

「悪いことをしても、これでは駄目だと思つて素直に怒られようとする心があるなら、風真だつて命は取りたくなかつたんでござる」

「あ……ああ……!」

「でも、最後の最後まで悪事を隠し通そうとする輩は……風真、大嫌いなんでござるよ」

いろはさんはそれだけ言い切つて、後は静かに抜刀した。いろはさんが悪いわけじゃないのに、怒りを超えて苦しそうで、声音も濁っているのがなんとなく分かつた。

やつと顔が見えて、それで確信した。

こいつらは、怒らせると一番怖い人の逆鱗に触れたんだ。

脂汗を滲ませながら背中に仕込んだ散弾銃を構えようとする男から視線を外し、私もつと奥を見据えた。

「施設の奥は任せたでござる」

「は」

任せた。その言葉に高揚し、私は心の中でスイッチを入れる。

一度腰に装備し直していたアイアンクローを素早く手に装着し、ギリリと音を立てて抜く。前傾姿勢でぐつと脚に力を溜めて、全力で踏み切った。

辺りの景色が雑に見える。これから私は最深部であろう隠し部屋に赴いて子供たちを保護する。そしてそこに着くまでに会った奴らは殺す。

「や、やめてくれっ!!」

「ひいひい助けてえっつ、ー!」

男と研究員達の断末魔がギリギリ耳に届いて咄嗟に振り向く。すると、視界に入るはずのいろはさんはいない。

「……全然……謝らないんでござるな」

——それは神速としか謳うことのできない剣舞。

いろはさんの姿が霞と消えて、そこにはただ風が吹き込んだ。

沙花叉クロエ？

身体が軽い。

「ああああっ！ やっ、やめっつ！！」

「迷惑」

私を見て逃げようとする組織員の肩をクロエで抉り引き寄せ、すれ違いざまに回転して腹部を斬り裂く。その回転の鋭さはそのまま、足で地面を殴りつけ高く飛び、落下と多角的な回転により何倍も増幅された速度を遠心力でクロエの刃先まで伝わせ振り抜く。

一閃。鋼の輝きが一筋の軌跡を描いた。

組織員の首から上が飛ぶ。

「逃げないでさっさと殺されてよ」

血滴るも鋭さを保つクロエを軽く振って血を飛ばし、私は殺人を経てなお大人しい鼓動を刻み続ける私自身の胸に手を添える。

「……やっぱり全然辛くないや」

あの時以来の、殺人。

昔の私との乖離。それよりも圧倒的に強い達成感が身体に響いて、そこから私の掃除は「仕事」から「趣味」へと形を変えた。

そんな趣味よりも、今は仕事だ。

『施設の奥は任せただござる』

任されたものをきちんとなす。いろはさんに、私の憧れに言われたこの初仕事、全うしてみせる。

私は再び駆け出した。



「助けて……助けてえ……!!」

脳が取り除かれた友達の内臓が止まるその瞬間を目の当たりにしながら、僕は必死に助けを呼んだ。

だけどその叫びはただ響くだけ。

誰も助けに来てはくれない。

誰かが来たのか、医者の人が慌てて部屋から出ていったから、僕はまだ生きていて、美波里ちゃんは少しずつどこかへ行ってしまう。

だから本当ならすぐ捨てられるはずの美波里ちゃんの身体はまだここにある。でも、何を言ってももう返事はない。その分だけ、消える美波里ちゃんを見てしまう。

『翔太くん！おはよ！』

『えへへー、今日は一緒に帰ろー！』

僕は笑った美波里ちゃんも、泣いた美波里ちゃんも、怒った美波里ちゃんも知っていない。

だから、むごい。

実験ベッドに拘束され寝かされながら、僕は必死に助けを呼ぶ。みつともない顔で泣き叫ぶ。同じ言葉を何回も、何回も。

助けなんて来ないんだ。

来なければ、次は僕が。

頭によぎるけど、その度に僕は泣きそうになりながら声を張る。

助けて。

助けてよ。

誰かいるなら、ここにいますなら、

助けて——
!!!

その時だった。

大きい音と同時に扉にヒビが入って、壊れる。ビュン、と大きな影が中に飛び込んできて、叫ぶ僕を見つけた。

それで、駆け寄ってきて

「ねえ、君」

「っ!？」

声をかけた。

届いた……？

助けが、来たの……？

「だ、だ、れ……？」

「大丈夫。大丈夫だよ」

「え、え……？」

怖いマスクを被った銀色の髪のお姉ちゃんは、優しい顔で、優しい声で言って――

「助けに来たよ」

「あ――」

――僕は気を失った。



「おつー」

結社に帰ると総帥が軽いノリで迎えてくれた。というか軽いノリすぎてついさつきまでの仕事の緊張感を忘れそうになる。

「本当にお疲れ様〜」

「ルイ姉、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

ルイさんに心からの慰労をもらって、私はやっと初任務を終えることができた。

「うっわー、まじかよ侍。任務中泣きそうになっちゃったわけ?」

打ち上げ、と称してありったけ買い込んだフライドチキン以下ジャンクフードを意外にも行儀良く食べながら総帥がいるはさんをイジる。そもそも食べているときに話すことは行儀良くないんだけど。

「そ、そんな訳ないでござるよ!!」

いろはさんは野菜スティックを兔のようにぼりぼり齧りながらポコポコと総帥を叩いた。

「ごめんね辛い仕事させて」

「いやいやルイ姉のせいじゃないでござるよ」

「そうだよラブ」

「げっ……ふんふん♪」

「鼻歌してもダメ」でござるよ！」

皆と話すいろはさんはやっぱりいつもの優しく綺麗ないろはさんだ。あの時に感じた憤怒の感情は影も形もない。

凄いな、と素直に思った。

『お疲れ様でござるよ』

『お疲れ様です』

『初日なのに凄い働きっぷりでござったなあ』

『いろはさんがそれ言いますか……?』

生きていた子供は総帥の知り合いのところに預けた。これからカウンセリングとか

リハビリティとか、なにより休ませてあげてほしい。

子供を保護した後は、組織員を殺すだけの作業。

掃除完了の直後、結果で言えば私の倍近い人数を担当したいろはさんに褒められて嬉しかった。けどツツコミたい。釈然としない。私というはさんの間には力の差がまだある。

これから縮めていけるだろうか。

「新人は？おめーはどうだったんよ」

「……へ？あー……えつと……」

記憶に現を抜かしていると、総帥が話を振ってくる。ぼけーとした顔で何を求めているか分からないのが鼻につく。

「うーん……」

「だけど迷っていると。」

「掃除、普通にできたか？」

「少しだけ、噛み砕いてくれた。」

「多分それは、総帥なりの優しさだ。」

『とにかくだ……お前の本能が覚醒する時、吾輩は心から歓迎してやるぞ』

そう言った時と同じ顔で。にんまりと先を見るような変な顔で。私を案じてくれて

いた。

「できてなきや来てないですよ？」

でも大丈夫だと思う。それはもうとつくに忘れた。身体は命令した通りに動くし、刃が肉を断つ感覚にはもう慣れっこ。

だから、息をするようにそう答えた。

「そーかそーか。ま、気にしてなかったけどなー！」

ガハハ、と総帥はわざとらしく声を上げて笑いながら満足気にチキンを食べる。

『それに——』

ルイさんの言葉が蘇る。

『それに、ラブは地球が好きだから侵略したいだけだからね……。吾輩が地球を手にしたら映画館増やしてやるわー！』とか言ってたし』

『やつぱりそういう自由で面白くて抜けてて、そんな奴と一緒にいたくなるもんだよ』

「なー幹部、だから言つたる？」

「はいはい」

ルイさんに絡む総帥を見て、無意識に口角が上がった。フツ、と身体から余計な力が

抜けた気がする。

「ん、どした新人？」

殻を破って捨ててる気持ちで、首を傾げるそうす——素直じゃないおこちやまに、私は思いつきりの煽り顔で言ってやった。

「中二病かよこのおこちやまがあー！」

びくつと肩を跳ねさせるラプラス

「なっ、おいお前えー総帥呼びはどこいった総帥呼びは——！」

「やーいチビ総帥——！」

「チビじゃねえわ！」

「やーいチビ総帥——！」

「は、おい幹部と侍流れにノるなあ！」

「「チビ総帥——！」」

楽しい。

「お前え侍！素が出ると拙者じゃなくて風真つて言っちゃうのバラすぞ！」

「なっ！ふざけんなよ止めるでござる！」

「それもうバラしてるよラブ」

「幹部も保護者してるけど本当は寒いギャグ連発するPON幹部だってことバラしてえ

えんかー!」

「だからもうバラしてるって……え、本当に寒い?」

「おい新人!」

「なんだよラプラスー」

「お前キャラ変わりすぎやろ!」

「ぼえぼえぼえ?」

「うっわ腹立つわー!」

楽しい。

「そんなことよりいろはちゃん!私とデートしようよー!」

「そんなことか言うな!吾輩泣くぞ!」

「えっ、ちゃん?……デートでござるか!?!」

「いろはちゃん可愛いからずっと一緒にいたいな〜」

「か、可愛い!?!……て、照れるでござるよ……」

「あーもー可愛いー!あ、もちろんルイ姉もね!」

「ルイ姉……いろはとお揃いの呼び方でいいね。もちろん行くよ〜」

「吾輩はどこいった!」

「え、ちびっ子はお留守番」

ラプラスを羽交い締めにしなから。

総帥の大冒険

総帥の大冒険

「んー……」

あさだく……。

わがはいのあさは……ふあー、あー、ねみー、………んー………ZZZ

「ラプー、そろそろ起きなー」

「んー？……んあーい」

吾輩の朝は早くてだな……え、昼………？

ス——

吾輩の昼は幹部の一声で始まつてる気がする。布団蹴り飛ばして思い切り伸びして、なんか喋りながらごろごろして身体起こして、布団元に戻したり戻さなかつたり。

一切無駄のない寝起きだぞ。

総帥ルームから出て、幹部室行ったらソファに寝転がってテレビターミナルの電源を

入れる。インターネットに繋がったテレビから動画アプリを起動。迷うことなくマールの特集ページ開いて、そこからまだ理解が甘いまま終わってしまったるマーベ○作品を再生する。

これも吾輩にとって大事なことなのだ。

「ふっは、……ふああ……」

今年公開されるア○ンジャーズの完結編は、吾輩の予想では○ーベル作品全てを履修してればより楽しくなる作品のはずだ。絶対だ。

吾輩そこらへんは抜かりないぞ。

「あ……また私の部屋で観てる」

「おー幹部」

「ご飯食べたの？」

「んー、食べた食べた」

「絶対嘘じゃん。食べなよ」

「やだ」

「食べろって」

「やだ」

「千葉ロツテ？」

「何年前のネタだそれ。もう死語じゃん」

「っ！……いいから——」

「おっ!？」

幹部は寝転がる吾輩の首根っこ掴んでぶん投げた。

「——食べてこーい！」

「うああー！ああアあんまりだアアアア」

吾輩は最近何回目かのイツキ見で頭に残っていた単語をポロツと零しながらいくつか壁を突き破つてく。速度が減退してついに止まった時には吾輩は食堂で倒れてた。

「っわー、びっくりした……」

侍の声が聞こえる。

こいついつつも生茄子食ってんな。

「んあー、さむらい、起こして……」

「はあ……まーたルイ姉に怒られたんでござるな?」

「あいつが勝手にキレたんだわ……!」

「はいはい。言い訳はもういいでござるよつ、と」

侍がポロポロの我輩を起こしてくれた。

「さむらいコーラとつて」

「ラブ殿、さすがに飲み過ぎでござる」

「いいだろおー!?」

「沙花又みたいになるでござるよ?」

「……………なんか作って」

新人は結社に慣れると同時に出不精、部屋汚い、風呂入らない、スロット廃人の四拍子揃った問題児になった。最初は総帥って呼んでたのに、今ではチビってつけるわタメ口使うわでやりたい放題だ。

社内恋愛禁止だつづうのに侍にくつついて離れないし。

あいつと同じ世界には行きたくないぞ吾輩。

「はい、かけうどんでござるよ」

「まあ許容」

「はあ、素直じゃないでござるな」

ズルズルと柔らかめのうどんを啜る。鰹出汁の効いた温けえつゆを纏って滑らかでもちもちのうどんが口の中に雪崩れ込む。うどん作ったやつ天才。

「食べ方は綺麗なのに勿体ないでござる」

「んぐんぐ……………うわっ、汚く食べてやるわ」

「そんな反抗することないでござるよ!」

「ご飯終わった。」

「幹部。終わった。」

「はいはい」

「ご飯食べたらほくほくだが、準備するのが面倒くさい。吾輩自炊できんし。」

「そういうえば、なんで吾輩自ら食いにかなきやならないんだ。」

「……あ、もしもし博士？いきなりで悪いが食事作ってくれるロボット作ってくれ……」

「え、金？」

「幹部の方をチラリ。PCカチャカチャやとるわ。仕事に夢中だな、よし。」

「秘匿口座から必要な分だけ引き落としていーぞー……うん、……ああ、そう。……んじや

よろしく〜」

「これで明日からは部屋から出ずにご飯食べるぞ。」

「ラブ」

「あひやつ!!」

我輩はその時、バレたと思った。幹部は目だけじゃなくて耳もいい。普通に聞かれていると思ったんだ。

そしてバレるとマズイ。幹部はキレ散らかすと超怖い。ホラゲーとか超得意な我輩

でも超怖い。結社を立ち上げた時から今まで吾輩達は赤字経営だが、幹部はそのことを結構重く見ているのだ。

お金勝手に使って、バレたら大変なことになる。

「ん？」

「な、な、に……？？」

「え、なにその反応……悪いんだけど、コーヒーマーカーの中に入ってるの、コップに入れて持ってきてくれない？」

しかしバレない！

「ああそうか！コーヒーカー！そうだな！コーヒーカーだ！」

「ん？……ラプ？」

大丈夫だ平常心だ。吾輩子供の頃のお遊戯会では大絶賛の演技をしたんだ。平然とすれば気づかれないはずだ多分。

「な、なんでらっしやるでござんすか幹部？」

「え、ラプ？どうしたの？」

「ぎゃははは……どうもしませんことよ……我輩はコップをコーヒーカーに入れて持ってきますわ、ほら、ほらほら」

ガチガチガチガチガチ

「……あ、もしもし博士？あのさ……」



「説明してもらおうかな」

「……」

博士ええええええええええ!!!

おいお前幹部に言うのは反則だろがい！

しかもお前完成後に言っちゃうんかい！

「えつとな……？」

「うん」

「あのな……？」

「うん」

「その——」

——二の句を継ごうとした瞬間、幹部の全力が発揮された台パンの轟音が吾輩の精神を襲う！

「なんでロボットなんか作らせたの？」

「……はあい」

「なんで？」

「そ、そのお……」

「はあ……」

「ひっ!!」

か、幹部はため息をつきながら吾輩を睨む。こういう時どうするか知ってる？

に、逃げるんだよオ……

「じゃあさ、なんで隠してたわけ？」

「……!?!」

「ほら、言ってみ？」

「……か、幹部にバレたら怒られるなあ……って」

「バレた。怒ってる。はい、じゃあもう言えるよね。なんでそれでもやったの？」

「え、つと……」

「……逆に、バレないとも思った？」

まんま飢えた猛禽類の眼光。ドスの利いた声で刺すみたいに突き付ける幹部はもう

あれだ。吾輩を食べちゃう気だ。

「ご飯、用意するの、あれだろ……？」

「実際に用意、したことがある？」

「……ないです」

【にげられない！】

「……じゃあラプ、しなきゃいけないことがあるよね」

おい突然だが貴様ら、人間は瞬間移動ができないらしいな。ここだから言つとくが瞬間移動っていうのは便利なもんだ。魔法だから詠唱しなきゃならんが我輩レベルになれば少し時間を貰つて魔力を練れば詠唱しなくても使えるんだぞ。

そう。吾輩が今すべきこととは――

「――さらばだ幹部！」

【ラプラス は にげだした！】

「あ、逃げた」

総帥の大冒険？

「ルイルイ、ラブちゃんの説教終わった？」

「逃げちゃった」

「あーあ」

「ま、すぐ戻ってくるでしょ。というかこよりもだからね。ラブの言うことなんだから本気にしちやダメだよ」

「ごめんルイルイ！分かってはいるんだけど、今回はちよつとだけ面白かったからつい！」

「まったく…」

「えへへ。それにね、場合によってはルイルイも同罪だよ？」

「え、なにそれ」

「実は——」



「なにも言わずに家を出て、こんなところまで来ちまったぞ……」

というかここ何処だ。森か？

辺り一面草木に囲まれてる。

「とりあえず確認してみるか」

吾輩は認識障害の魔法をかけて、それからふわりと身体を浮かせる。見事な身体捌きで木の葉を躲しながら森を抜けた。そのままぐんぐん上昇して、満足いく高さまで辿り着く。

すると偶然か一枚の木の葉がおでこに乗っかっていた。

「おつ、チャクラ練り上げられちゃうじゃん」

そこでカサツと手に取った木の葉の先を見て、吾輩は口を開いたまま閉じられなくなった。

「お、お……！」

飛び込んできた景色に吾輩は感嘆したのだ。

どでかいタワー。あれはスカイツリー。

金色のう〇こ。あれはアサヒビール。

そこで立ち並ぶ剛健な建物共。

東京だ。

「とーきよーじゃんか……」

吾輩は期せずして、憧れの大都会に転移してきたのである。

「さてと、なにすつかなあ〜」

丁寧な着地をかましてから、吾輩はウツキウキでスキップする。とりあえず森（と思つたら公園だったわ）を抜ければ目の前には大都会だ。まだ日は落ちてないし、存分に遊べるぞ。

といつても「ラプラスの魔」と呼ばれる吾輩の恐ろしきで人間君を震え上がらせるわけにはいかんから、認識阻害のレベルを下げてと。

「よし……」

まずは、ロイヤルミルクティーだ。

『あざした〜！またお越しくださいやせ〜！』

よし買ったぞ。本場のローソンミルクティー。ミルクとの相性が抜群で大好きなのだ。それで喉を潤しながら吾輩はプランを練る。

美術館に博物館、秋葉原に渋谷。行くところなんてザラにある。一日で回るんじやな

く、きっちり限定してじっくり楽しむのだ。

とはいってもスマホは置いてきちやったからないし、お金もあんまない。そんな時はこいつだな。

「カラス」

吾輩がどこかに隠れているカラスを呼ぶと、ピヨコンと服から飛び出てきた豆粒がヒヨンつと元の大きさになって頭に乗った。

吾輩とは少し違う緑がかった瞳とその色が目立つ全身真っ黒。お腹の輝きマークがチャームポイント。

このカラスは吾輩が小さい頃に会って、そこからなんだかんだ一緒にいる奴だ。いつもは吾輩の頭にちょこんといるが、吾輩が寝る時はちっこくなくて服のどこかに隠れる。

「今日は博物館行くわ。案内してくれ」

カラスは吾輩のアバウトな要求には何も言わずに、ゆっくりと翼をパタパタはためかせたかと思うと、吾輩の頭を離れて服の襟を鉤爪でしっかりと捉える。

吾輩がやることと言えば、もう一度認識阻害を最大にして、自分の体重を限りなくゼロにするだけだ。

そうすれば吾輩の身体はカラスのお陰で何もせずとも浮いて、後は寝てればどつかの

博物館の前に連れてつてくれる。

「よし。頼んだぞカラス」

ふよーんと吾輩とカラスは博物館に向けて出発した。

「ついたぞ〜」

行き先をカラスに任せたら東京国立博物館に着いた。時刻は18時。

「ん?」

【本日は閉館いたしました】

「お、おいカラス……」

「……ア」

「アじゃねーよおいカラス!」

なんか暗くなってるなと思ったら既に夜じゃないか!東京に飛んできた時にはそんな時間いつてなかったのに。

吾輩が掴んで説教してやろうと思ったらカラスはまたちっこくなって服の中に隠れちまった。こうなったらもうどれだけ探しても見つけれん。

「あ、そーいや……」

カラス、飛行速度ダメダメなんだった。

「どうしょ」

暗くなってしまうてはすること限られるなあ。買い物するかご飯食べるくらいか。そういうえばちよつとお腹空いてきたなあ。

「しょうがない。飯食お」

カラスは拗ねていなくなつたし、結社に帰つてご飯食べるのもここまで来た意味なし、自分でてくてく歩くことにする。ここ上野らしいし、マックくらいあるだろ、多分。

——と安易に歩き始めた我輩は、いつの間にか上野を大きく外れて知らん住宅街に到着したのだった。

もう語り手やつてる場合じゃねえわ。

こいこい。

「お腹減つた……もうコンビニ飯にしよっかな」

そうは言うが後でもしマックを見つけてしまったら絶対に後悔する。吾輩はその可能性を見逃さない。よしフラグ立ったしここでフェイクでコンビニ入つてマック見つけてやるわ。

『ありがとうやした〜』

——買った。

いやー無理だったわー。お惣菜争奪戦のお時間に用意された揚げ物無視するとかで
きなかったわー。買った。んで多分これ食べてお腹いっぱいだ吾輩。

しかも所持金がゼロになった。ネカフェにも入れなくてこれ。

「公園かな」

公園くらいは見つかるだろと我輩は再びと安易に歩き始めた。

——見つかった。

「なんでやー！」

意味不なんですけどー。少子化とかで公園少なくなってるじゃねーんか。なんで楽
勝で見つかんだよ。

「くっそ〜……」

この時間だしこの暗さ。ベンチが空いてるどころか公園には誰もいない。吾輩はド
スつと座ってビニール袋をガサガサ漁った。

んで、気づいた。

誰もいなくないわ。

「そこいるやつ出てこい。吾輩見えてるぞ」

ベンチ近くの植え込みの陰に人の気配がする。吾輩の目はそういうの感知するの得意なのだ。しかも相手は人間。気配を消せるわけがない。

「こんな時間に誰だ全く……」

出てくる気配がないので吾輩自ら赴いてやる。ガサガサと並ぶ植え込みを越えて、唯一違和感のある植え込みの前で一旦止まった。

「おーい。バレてるぞ。出てこーい」

出てこない。

「ふふん。いい度胸だ……」

吾輩は格の違いを見せようと、認識障害のレベルを最大まで上げる。人間の目には我輩は捉えられない。そこはそいつ以外誰もいない空間だ。

「……う……つ、しよつと……、あ、れ？……誰もいない……おぼけ？」

そんな感じでひたすら待っていると、様子を伺うように一人の女の子が出てきた。小学生高学年くらいか。吾輩がすぐ傍にいるとは気づかずに辺りを見回している。ついでに言うとお化けを怖がってちよつと震えている。

よし。今だ。

「おーい」

「家出だあ?」

「う、……うん」

「帰らないのか?」

「うん……」

なんてこつたい。

公園が見つかったかと思ったら、家出女子も見つかった。

総帥の大冒険③

「なんで家出なんかしたんだよ」

「……………」

吾輩の親切な対応。にも関わらずこのガキは応じる様子がない。この野郎。

……………ん、ガキはまずい？……………この「子供」は答える様子がない！……………よし。

ま、いいけどね。吾輩公園にはご飯食いに来ただけだし。誘惑に抗えずに買っちゃまったチキンとフランクと中華おこわは冷めちまいそうだったからこっさり魔法で温める。

「喧嘩でもしたんか」

「……………」

居心地悪いー☒？

さつさと食って結社戻るか。

吾輩は今度こそガサゴソやって、まずはチキンを目の前にやる。包装紙の中から漂うある意味殺人的な香りが吾輩のお腹の中をさらにぐいっとこじ開けた。

「ちつきんー、ちつきんー♪」

「あ、チキン……………」

「おえ?」

ぐーきゆるる。

ついでにこの子供のお腹もこじ開けた。

吾輩がここでこいつを無視して食べたとする。そうすればこいつはもう一切口を開かないだろ。

だがチキンだけあげてしまつてお喋りに付き合わせればこの居心地の悪さもなんとかなるか。

いよし。いくぞ。

「んー?もしかしてほしーのかなー?」

「っー……いらぬい」

「そーゆーなよー!ほしーんだろー?あげてやつてもいいけどー?」

「っつ……欲しくない!いらぬい!」

「あーあ、じゃあしようがないなあー。いっただつきまーす!」

「あつ」

「ん?なんだよおめー。いらぬいんだろー?」

「い、いら、いらな……」

「はあー!このチキン買ったとき揚げたてだつて店員が言つてたなあー!今買つてきた

ばっかりだしなあー！」

「くくく!!!」

「きつと新鮮な油使つて肉汁がぎゅつと凄いんだろなあああー！」

「……………!!!」

「それじゃあいっただけ——」

「……………あ、ちよつ」

「んー？なんだよー。吾輩今いっただけまーすしてんだけど？」

「……………く、ださい」

「んー？聞こえないなあー？」

「そ、そのチキン！……………ください！」

「ん、ほいよ」

なんのコントだ全く。遠慮大好き人間か子供なのに。

つてか吾輩は自分で言うのもなんだが結構子供みたいなナリだろうが。もうちよつと碎ければいいのに。

……………無理か。無理だな。それは吾輩でも無理だわ。

吾輩、こいつから見れば絶対ナル不審者だもんな。

「ん、ぐ……………はぐ……………」

遠慮してた割には良い食いつぶりじゃん。吾輩もお腹減るわ。中華おこわ食おう。

「よいしょと……んぐ……」

うめー!!

おこわ特有のもっちり米に加えて小さなひじきやら筍やらの食感が飽きられず口の中で暴れるぞ。食感だけじゃなく、具材の旨味が味の練度を押し上げてる感じ。これに調味料混ぜたらそりゃ旨くもなるわ。

「……」

「……んつく……ん?なんだ?よりによつて食べてから遠慮すんなつて」

「ー……もぐ……」

「うんうん。子供は空気読まないくらいがちょうどいいんだ」

「んつ……あなただつて、子供じゃん」

「吾輩はこう見えてちゃんと大人だからな?」

「……見えない……ふふ……」

やつといっぱしの人間らしい顔するようになった。そろそろいいか。

「家出、なんでしちゃったんだよ」

「っ!」

「……」

「……………」

おつと、まだ早かったか？

「……………お母さんと、お父さんが」

「が、どうした？」

お、どーやら上手くいきそうだ。



私の居場所は家だけだった。私はあんまり運動が得意じゃないし、本を読むのが好きだったから、休み時間も授業もずっと教室にいた。

でも授業をそれなりにやって、それ以外は読書してるだけの私を受け入れられる友達なんていなかった。

自分に素直で、見た目より色々考えている小学生は、好きなことに付き合ってくれる人と一緒にいたいのが当たり前だ。

私はその当たり前には合わせられなかった。

話しかけてくれる子も、誘ってくれる子もいたのに。私は私だけを見てたから、ついに私だけになった。

だから、私の居場所は家だけ。優しいお父さんとお母さん。三人ですつと一緒にいるんだ。

そう思っていた。

『ああ、また泣いちゃってる……ごめん恵那、後でな』

『よーしよし。恵那ごめん、ガラガラとつてくれない?』

四人目ができた。

お父さんとお母さんの優しさは注がれるべき存在に注がれるようになった。一定以上育った私より、まだ不十分な存在を注視しなきゃならないのは当たり前で。

その当たり前前からも、私は合わせられなかった。

当たり前前は当たり前で、外れたら外れた並の苦しみがある。私は勝手に合わせずに、勝手に苦しんで、何も言わずに勝手に逃げた。

私を見てほしいとか、恥ずかしいことを思つて。

私はダメな子だ。私はダメな子だ。

私は――



「お前本当に小学生か？」

「……………え？」

こいつ賢すぎんか。吾輩こいつの同じくらいの歳の頃何してたか覚えてないが、こいつよりしつかりしてなかったぞ。

『ラブちゃん、何してるのー？』

『ちきゅーとマブダチになった！ギヤはは！』

多分こんな感じだった気がする。多分だけ。いやマブダチになったのはマジな話だかん。普通に。

まあそんな感じで言いたいことは色々あるが、こんなに考えられるならもう大丈夫な気もするんだけどな。

そうやって放っておくのが一番悪いしな。

「お前、さっきのチキンもそうだけど、欲しいなら欲しいって言えばいいと思うぞ？」

「え……………でも……………」

子供の話を遮って吾輩は続ける。

「吾輩はなあ、4歳のころハーバード大学に入ったんだぞ」

「え？」

「んで速攻辞めたわ」

「え、え?」

「他にもな、三年間違う親に育てられたりその親がいる組織を潰したり、生まれた星が消滅して地球に来たり、地球とマブダチになったり、秘密結社を作ったりな」

『ラブ』

『ラブちゃん』

『ラブ殿ー!』

『ちびっ子!』

「変な奴らと色々やってるんだぞ」

「……?……??」

「吾輩のやりたいことをやってる」

「……う、うん」

うーん分かってないな。まあ分かる方がおかしいからな。これ理解できるやつがいたら吾輩まじで恐怖するぞ。

吾輩は言葉をまとめるのに四苦八苦する。だが、言いたいことは苦勞する最中にもポロツと出てきた。

「……もつとやりたいようにやっていいと思う」

「……」

「いや分かるわ。やりたいようにやるって結構面倒くさい。吾輩も直近で面倒くさく
なったことあった」

「……うん」

「特に知り合い以下の奴に、自分のやりたいことをさせるのはムズい」

「どうすればいいの……?」

「知らん」

「えっ、」

「そんなことは吾輩知らんが、家族にくらいチキンをおねだりしてもいいんじゃないか
?」

「え、あ……」

「何も言わずに家族から盗んだって、美味しくないだろ」

「……う、ん」

「自分が悪い子とか、なんで生きてるんだとかなんて答えは一生でないからな。適度に
やりたいことやって生きるのが一番楽しいぞ」

うむ。ぜんっぜんまとめられてないな。ギヤはは。

でも、賢いんだからなんか伝わってんだろ。

我輩はズルい奴だ。それっぼいこと言ってるだけ。

「それと、弟か妹か知らんが、他人扱いはご法度だぞ」

「ご、はつと？」

「ダメって意味だ」

「わ、わかった」

「そんなに構ってほしいなら、お前がそいつを構うといい。何年か経ったら何も言わなくてもお前に構ってくれるようになる」

「……そんな、もん？」

「おう。兄弟つてのは結構面倒くさいんだ」

「…そうなんだ」

「だから頑張れ、お姉ちゃん」

「……………わかった」

「ならさっさと帰って謝れ。どうせお父さんかお母さんかのどっちかが家にいて、おろおろしてっから」

「わかった」

「吾輩はここに残るからな」

「うん」

「んじゃ」

「——ねえ」

手を振って走り出したと思ったら、子供は止まって吾輩の方へと振り返った。

「ん？」

「さっきの、本当？」

「なにがだ」

「地球とまぶだちとか、そういうの」

「当たり前だろ」

「ふふ……私、そういうこと言う人、なんていうか知ってる」

「ん？……な、なんだよ」

「ちゆうにびよう」

「つ!!……おめー吾輩が中二なわけあるか！」

「へへ、うそつき」

「ふんつ、嘘なんかついてません」

「そつか。ふふ……じゃあね」

「んー」

クソ生意気な子供は消えていった。あいつ吾輩が本気出したらここら一帯砂漠になるんだからな全く。

「さて、と——
幹部、いるだろ？」

総帥の大冒険④

「気づいてたんだ」

吾輩が後ろを見ずにそう言うと、光学迷彩みたいにジジジツと音を立てながら幹部が姿を現した。

「ラブには難しい問題だね」

「そーだな。別に正解言えてないし」

呆れるように笑った幹部からの言葉に、吾輩は子供が消えていった方向を見ながらぶつきらぼうに返す。

子供は結構色んなことを考えていて、色んなことを見てる。吾輩は親になったことがないから知らんが、すれ違うことなんてこれから多分いくらでもある。

親とも、他のやつとも。

そういう時にどうするべきか。

吾輩は知らない。

逃げることしか吾輩はできない。

ま、そんな感じだから、子供はそんなこと知る必要ないんだ。

「秘密結社なのに秘密結社作ったって言っちゃダメじゃん」

「別にいいだろ？どーせ信じてないわ」

「ラブは中二病だからね」

「中二じゃねーわ」

その会話を最後に、吾輩と幹部の間に沈黙が割り込む。言わなきやいけないことを言いたくなくて逃げる吾輩と、聞くだけ聞こうと待つ幹部。

「……今日は吾輩疲れた。結社まで飛んでつてくれ」

「……はいはい」

「……スマン」

「はーい」

こんなんでもいいんだ。大人になったらおねだりやごめんなさいするのは恥ずいからな。

幹部は吾輩をしつかりと抱きかかえて翼を広げる。ぶわつと吾輩の身体が宙に浮き、浮遊感が渦巻く。

「ありがとね、ラブ」

「ん？」

バツサバツサと煩いせいで、吾輩は幹部の言ったことを全く聞き取ることができな

かった。



『実はさ、ラブちゃんが追加オーダーしてきてね』

『うん？』

『熱々の珈琲も淹れられるロボットにしろだつて』

『……………ふーん』

『だからこよ、ラブちゃんに黙って珈琲淹れるだけのロボット作ったんだ』

『え、そうなの？』

『うん！だからお金はそんなかかってないし、実質ルイルイだけ得しちゃってるんだよ

ね〜』

『……………』

『お迎え、行ってあげれば？』



「おい博士！このロボット珈琲しか作らないぞ！」

「当たり前じゃくん。だってそういう風に作ったんだもん」

「とういかそんなことしてたでござるか」

「チビ総帥せこ〜」

博士に嵌められていた。圧倒的珈琲。吾輩総帥なのに誰も言う通りにしてくれない。

「わかったぞ〜！そんなことするならお給料減らしてやるかな〜！」

「え〜、そんなこと、い、わ、な、い、で？♡」

「どうわっ！……み、耳は反則だろが！」

「とういか風真のお給料5円チヨコなのなんとかならないでござるか？」

「吾輩都合の悪いこと聞こえんから」

「ラプラスう、沙花叉も給料上げてよ〜」

「お前まあったく仕事しね〜じゃね〜か！つてか風呂入れ」

「え〜面倒くさいい」

「沙花叉、ばっち〜でござる」

「え、もつと言つて！」

「え……気持ちわる……」

「あは〜♡」

「新人、お前ほんとなんとかしろ」

吾輩が稼げないのはどう考えてもお前らが悪い！

と吾輩はずっと思ってる。

「ラプー、ちよつとおいでー」

「ん？なんだ幹部」

「転移魔法使ったせいで、また場所が割れたんだよね〜」

「——あ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「さ、侍と新人！行ってこ——」

「今回はすつごく危ない組織なんだって。だから総帥直々に行くべきだよね〜？」

「か、幹部……？」

「行ってらっしゃい？」

「かんぶ……？……かんぶう……？」

「いって、らっしゃい？」

「…………ごめんなさい」

逝ってらっしゃいとは、こういうことか？

やりたいことをやるのはいいけど、それだと吾輩の地球侵略の夢はどんどん遠くなっ

ていきそうだ。幹部と博士と侍と新人。これだけ揃ってちつとも前進しないのは。それだけは。

——もしかしたらちよつとだけ吾輩のせいなのかもしれん。

風真と沙花叉

風真と沙花叉

「いろはちやーん♡」

桜色の鮮やかな髪からびよこんと生えた獣耳。モフモフのそれと髪質感のアンバランスささえも、愛らしい顔立ちを目に入れればむしろ長所。

虹色に似た輝きを纏う瞳は眉に隠されて、羽織に身ごと寄せていた。

「こよちゃんどうしたでござるか」

「えへへ。ぎゅー♡」

「わあ!……そ、そんなにくつつつかれると照れるでござるよ」

羨ましい。コヨーテくつつきすぎ。

その光景は他の人から見れば尊死寸前だけど、私にとっては泥棒猫とそれに騙される純朴な子供にしか見えない。

しかし同時に、可能性も見た。

そう、つまり。

私もやろくと!

「いろはちゃん♡」

「ん？どうしたでござるか沙花叉」

「ぎゅー!!!」

「——え、ばつちーでござる」

「あ……」

え？

ばつちーはご褒美だけど、今はそれよりぎゅーが欲しいんだよね。

え、ぎゅーは？



「そりやお前、風呂も入らず散らかった部屋に籠もってるやつに近づかれたくないだろ」
「うぐ……」

ラプラスのくせに正論っぽい。

「ばつちー」の時のいろはちゃんの顔にドキドキさせられた上にハグを拒否された悲しみが上乗せされて泣きそうになりながら部屋に押し入ると、ラプラスは明らかに面倒くさいという顔をしながらズバツと言いつつ切った。

呆れたようにこちらを見るラプラスは、普段おこちゃまな様子とは少し離れて大人びた目つきになる。

私は髪をくるくるしながら誤魔化した。

「結構顔もプロポーションも良い方なんだから……何日かお風呂入らなくてもよくない？」

「よくないからこうして吾輩の部屋に突撃隣の秘密結社してんだろが」

「えー、あれはいろはちゃんかブルーなのがいけないと思うー！それもいいんだけどね！」

「お前筋金入りだな……一生侍とお近づきになれないぞそれだと」

ラプラスは手に持ったゲーム端末でヘッドショットを決めながら嘆息した。

「お前、初頭効果と親近効果って知ってるか？」

「え、なにそれ、ガトーシヨコラ？」

「初頭効果な」

「なにそれ？」

「簡単に言うと、『第一印象大事だよな』って話だ」

「へえー。あでも！沙花叉さ、第一印象は悪くなかったと思うんだけどー！」

「そりゃーそうだな。最初は吾輩にも生意気じゃなかったし」

「一番生意気なのラプラスじゃん」

「うっせーわ」

そこでだ、とラプラスは蛇足を切った。

「親近効果つてのが出てくるわけなんだなこれが」

「なにそれ。心筋梗塞？」

「ツツコミ入れたくなるボケかますなよ」

はあ、とラプラスは何回かため息を入れて、少し考える様に天井に顔を向けてから、最後にこちらを見る。その間に何回かキルされている。

「お前、吾輩のこと、最初は どう思った？」

「え、初めて会ったとき？」

「そうだ」

「……………子供に見えるのに大人っぽくて、ぶっきらぼう」

「そんな風に思ってたのか。じゃあ今は？」

「……………ガキ」

「んだところ」

「中二病。トラブルメーカー。ルイ姉の子供」

「だれが幹部の子供だよ……………つてのは置いといてだな……………なら、吾輩の今の印象はどつ

ちが近い？」

「え、そりゃあ後でしょ」

「よし、ならこの部屋を見てみる」

映画やら絵画やら、特にアイドルのポスターが貼られているラプラスの部屋は言うな
らオタク部屋だ。というか絵とか好きなんだ。聞いてなかった。

「——意外とか、思ったりしたか？」

「え、え!？」

「したんかよw」

「した、けどさ……」

「よし。これで新人の吾輩への印象は、生意気の他に大きいものとして、絵画とか好きっ
ていう意外な存在。ちよつとギャップ萌えくっつていうのが出てきたわけだな」

「うわ気持ちわる。何が言いたい。全然わかんない」

「なんでだよ……要するにだな」

初頭効果が第一印象の大部分が人の認識に影響することを指すのであれば、親近効果
はその逆。つまり、最後に与えられた情報がその人の認識に影響することだと。

終わりよければ全てよしだ。

ラプラスは胸を張って説明した。

「え、なにそれ、矛盾してない？」

「確かにそうだな。でもちよつと違いがあつたりする」

「どこが」

「対象との関係の違い、だな」

初頭効果の影響力の大きさは関係の浅さに比例する。逆に親近効果の影響力の大きさは深さに比例する。

「つまりだな。親密になつていけばなるほど、吾輩達は最後にした行動や仕事で印象を書き換えられるつてことなんだよ」

「つ、つまり……？」

「お風呂にも入らない。部屋汚い。仕事だけできるつてだけのお前じや、侍の心は「仲間（汚い）」で終わるつてことだ」

「え、……」

「しかも侍は良いやつだからな。自分の認識を正しいとは思わない。……後々の行動から「この子はこういう子なんでござるな」と接し方を考えていくタイプ」

「ま、まさか……」

「そう。詰みつてやつだな」

激震走る。お仕事のときもずつとお話して、そうじゃない時も話しかけて、「ずつと

ずっと一緒にいようね!♡」「そうでござるな」とか言ってたのに。
詰みって――

「――ま、なら直せばいい」

「!?……ラプラス方法知ってるの!?!」

「まー知ってるけど? 風呂に入らん新人には教えてやらん」

「入る! 入るから!」

「なら今すぐ入ってこい。そしたら教えてやる」

「わかった!!!」

行ってくる! と立ち上がる私に、ラプラスは妙に温かい笑顔で見送った。

「ふー、やっと風呂入るのかあいつ。適当言って言いくるめるのもメンドイな」
なんて声は全く聞こえていなかった。



「おっふるーいっろはーおっふるーいっろはー♪です」

スキップで廊下を進む。お風呂入りたくないけど、そうすればいろはちゃんと私はラブラブなのだから。

「おろ、沙花叉？そんなにウキウキでどうしたでござるか？」

すると、とつとつと、と小動物のような足取りで近づく一輪の薔薇が私の目を盗んだ。いろはちゃんだ。

「あ、いろはちゃん！あのねあの——」

——はっ!!

雷のような衝撃。その時私は天啓にうたれる。

もしかして、これはチャンスなのではないか。今いろはちゃんにお風呂に入る云々を話せば多少喜んでくれるかもしれないけど、インパクトに欠ける。

それならいつそ計画を隠して、最強の沙花叉になってからいろはちゃんを虜にすればいいのでは!?

それならば——

「う、ううんなんでもないよー!？」

「あれ、そうでござるか？」

「うん！あ、沙花叉用事があるからもう行くねじゃーね!!」

「え、あ、わかったでござる……?」

言うなり浴場に向かって全速力で走り出す。

これでいいんだよね、ラプラス!?

実際にはいない師匠に向かってサムズアップしながら、急いで大浴場に向かう。何回か道を間違いつながらぬも、やつとのことで更衣室の前に辿り着いた。

holoXが持つ大浴場は豪華絢爛だ。(多分ルイ姉が)自作した源泉掛け流しのお風呂は美容にいいらしい。私は全然入らないから実感したことないけど。

「お風呂ー!」

「わっ、……あれ、沙花又?」

「あ、ルイ姉!」

(これも多分ルイ姉が)無駄に凝って作ってある更衣室。その引き戸をガラツと元氣よく開けると、まさに本人がいた。相変わらず個性的な赤髪に、それが微かにかかる肩。健康的な肌、綺麗な鎖骨のラインが見える。

「うっわー、珍しいね沙花又が自分から風呂なんて」

風邪でも引いたの?とおでこに手を添えられる。

「しつれーだなもおー!」

「いや、ほんと、なんで?」

その時私はおでこに触れていた手がいつの間にか肩の方に降りていて、がっちり固定されていることに気づいた。

「え、」

「変なこと考えてないよね？」

ルイ姉の失礼な言動が私の心に突き刺さる。うわあこれはガチな顔だ。自分からお風呂に入らなすぎて、なにか余計なことをやらかすんじゃないかと本気で心配&警戒してる。

「考えてないって！」

「ほ、ほんと……?」

うーん。いや、下心はあるんだけど……

「い、いや、考えてはいるけど」

「え、考えてるの!?!」

いやそういうわけじゃなく……!!

「ああいや、そうじゃなくて！」

「え、どっち!?!」

「ああもおおっつ!!」

——結局ルイ姉に話しました。

「はあ……なんだそういうことね」

「心配しすぎだよルイ姉」

「いつもは「え、入る必要がある？」なんて抜かしてるのに、ニコニコしながら自分でお風呂に入るなんて言うんだもん」

「ぐっ、……」

時々、優しいはずのルイ姉の言葉が痛い。

「よし。そういうことならこの際、ちゃんと身体の洗い方とか覚えよっか」

「え、沙花又いつも通りで——」

「——覚えよっか」

「はい……」

時々、圧も凄い。



親近効果の使い方ちよつと違くない？と私は沙花又を見る。多分風呂に入らせるためにラプが唆したんだと思うけど、それでも強引だなと苦笑い。

「はい……」

頬を引き攀らせる沙花又に、骨の髄までお風呂の入り方を叩き込んでおこうと、私は軽く、あくまで軽く微笑んだ。

風真と沙花叉?

「はい。まずはブラシ使って素洗いね」

シャワーを使って丁寧に髪を濡らしていくルイ姉に、私も見様見真似で合わせる。だけれど長年のお風呂嫌いの影響か、明らかに作業の流れがルイ姉より雑で、早かった。

「こうやってゆっくり……あ、ダメだよ沙花叉」

「う……」

「ブラシちゃんと使って」

「い、いや、でもいいよ、これで大丈夫——」

「——使ってね？」

「……はい」

こんな感じで圧をかけられながら、結構な時間を使ってようやく素洗いを終わらせる。するとルイ姉はシャンプー液を手のひらに落として、私の後ろにまわった。

「シャンプーはよく泡立ててからじゃないとダメだからね」

くち、くち、くち、とシャンプーが馴染んだ指が絡まる音がする。と思っただらいきな指が髪に滑り込んできた。

しゃしゃしゃしゃ。

「あうあうあう……」

ルイ姉の綺麗な指が髪の毛の合間を縫って、的確に汚れを追い出していく。優しく、柔らかいものを揉むような手つきだけど、かけられる指圧で頭が前へ後ろへ右へ左へ。

「あ、泡立ち悪い……お風呂入ってないからだぞ」

「あうあうあう……」

たつぷり三分ほど髪をくしゃくしゃと揉まれて、手が離れたと思ったら、お湯が勢いよく浮いた汚れとシャンプーを流していく。

全て流れたのを確認したルイ姉は次はトリートメントを――

「――え、あれ、またシャンプー？」

「うん」

「な、なんで？」

「え、汚れが全然落ちてないから」

「あえ……」

がしよがしよがしよがしよ

またルイ姉の手に全てを掌握される。少しでも揺れに抵抗しようものならペシッと後頭部を優しくはたかれる。

「んーもういいー、もういいからー」

「わかったわかった。じゃあすすぐね」

私の決死の拒絶にルイ姉は仕方なくシャワーヘッドを手にとって、お湯をかけながら髪をとかしていった。

——— だけど

「な、流すの長くない……?」

「シャンプー後のすすぎはできれば五、六分しとかないとダメなの」

「ええ〜!もういいよ〜!」

「ダメだよ、それでなくても普段入らないんだから」

シャー、

汚れだけじゃなく、私の口数も流されていく。やだやだが効かないルイ姉に言えることは私にはなくて、髪にお湯があたらなくなる頃には私は真顔になっていた。

「はい、じゃあこれからトリートメントするからね」

「もうやだ……」

ルイ姉のお風呂講習はまだまだ続いた。



「あれ、侍どした？」

幹部に書類を頼まれて侍と新人のオフィス兼修練場に行ったら侍が珍しく考える顔しながら、どでかい人形相手に刀を振りまくってた。

「……………つ、……………!!」

「あれ、聞こえてねーんか」

吾輩は眉をひそめると無遠慮に近づいて背後にまわり、刀の間合いの少し外であることを確認してから叫ぶ。

「わっ!!!」

「きゃーっつっ!!!」

するとどうだ。気づいたら、悲鳴をあげながらカウンターをぶち当てようと神速で急旋回した侍のデラックス日〇刀が、吾輩の首元ぎりぎりに位置してた。

吾輩、今死にそう。

「ひよっ……………」

「え、ああ！ラブ殿！ごめんなさいでござる!!」

状況を認識した侍は即座にステップで後退する。

「はあ……まじびつくりしたわ……」

「ごめんなさい……ごめんなさいでござるよう……」

修練場の硬い床に膝をつき、深く土下座する侍。百パーセント吾輩のせいだけど黙つとしい。

「どうかしたんか?」

「え、えつと……」

「ん?」

侍は吾輩の質問に苦々しい顔で返す。本当に珍しいな。これは答えにくい質問をされた時の顔だ。

「えつと、気になることがあるんでござるが……」

「なんだよ」

「沙花叉は、今日なにかあったでござるか?」

へ?新人?

「なんでだ?」

「様子が変だったんでござるよ……。ウツキウキなのに風真を見た途端慌ててどこか行っちゃったし……」

「え、つと……別に特にないと思うが」

沙花叉に突撃隣の秘密結社されたことは言わないようにしとく。聞く限り侍に言つ

たつていったら後で怒りそうなムーブしてっしな。

「そうでござるか……？……いっつもくつついて色々話してくるから、風真変だなくって思っただんでござるが……」

「まーだいじよぶだろー！新人が変なのはいつものことだし！」

「そうでござるかな〜」

「そーそー、心配しすぎだわ」

「わ、分かったでござる……ごめんなラブ殿！気にしないことにするでござる！」

「あいあい〜。んじやあ吾輩書類置きに來ただけだからじゃさらばd」

言い切る前に爆速で部屋を出て、幹部室に戻りながらこれから起きそうなイベントに当たりをつける。

「めんどそうだな」

「……………ア」

カラスだけが吾輩の考えを察して小さく鳴いた。

風真と沙花叉③

「ルイルイから話は聞いたよ？クロたん、いろはちゃんに全力アピールするんだって？」

昨日の今日。話が伝わるのは早い。

「うん！」

「いいねいいねえ〜」

元々はピンク色が目を惹く可愛いコヨーテのせいなんだけど、裏表のない言葉で応援されるとそう無下にもできない。

「よし！だったらこよがとっておきのメイク教えてあげる!!」

「メイク？」

「そうそう！クロたん可愛いんだからお化粧すればもつと凄くなるよ！折角お風呂入ったんだし、こよのレクチャー、受けてみない……？♡♡」

「え、ほんと〜？」

「もっちらーんっ！」

お風呂に入ったら、後はいろはちゃんにくつつけなかつた分取り返しに行こうと思つてたけど、もつと綺麗になれるならそうしておきたい。

私はこちゃんへの嫉妬なんて忘れてうつきうきで、化粧道具やらを取り出すこちゃんに近寄つていったのだった。

「よーし！じゃあまずはスキンケアからねっ♡」

「え、これ長いやつ？」



一体沙花又はどうしたのだろうか。

こちゃんがかくつついているのに沙花又までそういう気配がしたから、「ぼっちい」といつも通りに言つたはずなのに、沙花又は歓喜の顔一つ浮かべずに子犬のような、ただ悲しい顔をしていた。

突き放しすぎたのかもしれないなあ。悪かつたなあ。

そう思つて話しかけてみたらさつきまでステップを踏むように廊下を闊歩していたのに、風真に会つた途端目の色を変えて瞬く間に走つていつてしまった。

『ほーら、逃げない』

『あうあうあう』

と思っただらなんとお風呂に入っていて、ルイ姉に頭を洗ってもらっていた。不満を垂れながらちゃんと髪のお手入れをして、身体も綺麗にしていた。

そして、今はこれだ。

「スキンケアに五分はかけるからね〜」

「えー長いいー」

ドアの向こうから聞こえてくる女子特有の黄色い会話。そこに入れないことに悲しい気持ちになってしまふ。

風真は沙花叉を怒らせてしまったのだろうか。

そうならちゃんと謝りたいけれど。

「今は、謝れるはずなのに………」

——少し心に霧がかかる。

「さ、沙花叉?」

「っ!!……い、いろはちゃん!?!」

「ちよつとお話させて欲しいでござ——」

「あ、えつと、さ、沙花叉用事あるからまた今度でも!?!」

「あ、えっと、どうかしたでござるか……?」

「な、ななんなんでもないよ!」

「よ、よかつたら、聞きたいでござるな……!」

「だ、ダメなの!」

「なんででござるか?」

「い、いろいろはちゃんには話せないのー!!」

——ああ、これは本当に嫌われたのかもかもしれない。

泡を食ったようにスタコラサッサと逃げていく沙花叉を見つめながら、風真はそう思った。

沙花叉はお風呂入らないし部屋汚いけど、女の子なんだ。避けられれば傷つくし、「気持ちいい」なんて言うけど本当はばっちいって言われるのも嫌なのかもしれない。

「申し訳ないこと、しちやっただでござるな……」



「ラブ殿」

「あく……なんだ侍か…なんだよ〜吾輩今忙しい」

「ヴァロラ〇トやつてる暇があるなら助けて欲しいでござるよ」

「お?今〇アロラント馬鹿にしたな?」

「ラブ殿を馬鹿にしたんでござる」

「このやろ〜」

ラブ殿はそう言いながら渋々ゲーム機から視線を外し、風真の方に向けた。黄金色に光る瞳は今日は疲れ気味。遅くまで起きてたのかもしれない。

「んで、なに?」

「実は……本当に沙花叉に嫌われちゃったみたいでござる」

「へー」

「ええ、軽いでござるな……」

「どーせ誤解だろー?」

「誤解じゃないでござるよ〜」

「んじやなんで嫌われたと思うんだよ」

「ほら、突き放しちやっただでござるし……」

「日常茶飯事だろそんなん〜」

「そうでござるけど〜!」

ラブ殿は大きく息を吐いて、面倒くさいポーズをとった。付き合ってもらえんと言いたげな目で風真を見つめる。

「なら直接聞けばいいじゃんか」

「え……」

「さすがに考えすぎだろ」

「うーん……」

「まー頑張れ。吾輩ヴァロラン〇してっから」

「わ、わかったでござる……」

風真と沙花叉④

「沙花叉……?」

「へっ…!?!」

元々高めのいろはちゃんの声が、どこか子犬のような甘さを帯びて私の鼓膜をくすぐる。満たされる保護欲に私の呼吸は荒くなった。

明らかにいつもと違ういろはちゃんの様子に、私はなぜこうなったんだろうと考えていた。



「……三日、お風呂も毎日入ってこちゃんにお化粧教えてもらって、その上掃除までしちゃって!……可愛い仕草も練習したもんね!」

ラジオ体操が終わった子供のように、私は両腕を上げて達成感呼び込む。奥深くに染み込む新鮮な空気に疲労感が抜ける感覚が合わさって、なんとも心地いい。

この後、いろはちゃんにサプライズで可愛い私を見せつけて、今までくつつけなかつ

た分を取り戻すんだ!!

「いろいろいろはちやーん♪」

あの綺麗な色の髪をフサフサして、たまにぶくつとなるほっぺをすりすりして、スベスベの肌とか鎖骨をナデナデするのが待ち遠しい。

うつきうきで変な調子の歌を口ずさんで、お部屋の扉をばつと開いた瞬間だった。

——っ!?

音もなく、空気が揺れた様子がなかったのに、大きな気配だけが背後に突如として現れる。

忍者のような動きで心臓を跳ねさせたその存在は、か細くも綺麗な声で私の名前を呼んだ。

「沙花叉……?」

「へっ……!」

可愛い指でぎゅつと掴まれた服の袖は、耐久性を誇るようにしつかりと伸びてみせる。

「はっ、はっ、はっ、はっ、……」

後ろから花菖蒲のようなしめやかで清い香りがする。鼻孔を刺激するその香りが私

の体内の熱を高めていくのが分かる。

「沙花叉……待つてほしいでござるよ……」

近い。いつものなら少し照れて自分から離れるくらいの距離に、いろはちゃん自ら歩み寄る。

ふっ、と吐息が首にかかった気がした。その事実には身体が蕩けそうになる。

「い、いろはちゃっ、…!?!」

慌てて言葉を紡ごうとした私を落ち着かせるように、袖から手を離して、私の右手に重ねる。確かに伝わる体温に、思考回路がおかしくなる。

普段のいろはちゃんなら考えられないほどスキンシップをしてくるいろはちゃん。部屋から出た途端いきなり近づいてきたことから考えても。

——私の可愛さにいろはちゃんが虜になった！

計画の成功を告げる行動であることは明白だった。

「い、いろはちゃん!」

「沙花叉……」

よし。よしよしよし!!

意表はつかれたけれどこれは望んだ通りの展開だ。このままいろはちゃんのあるところやこんなところをさわさわして……

「いろはちゃん……」

「沙花叉……」

私は振り返る。申し訳なさそうに、怒られたお猿さんみたいに不安を顔に出しているいろはちゃんを見て、繋がれた手の上に左手を重ねて名前を囁く。

交換する言葉がムードを高める。私の声にいるいろはちゃんが反応して、いろはちゃんの声に私が反応する。確実なキャッチボールで余計な感情はいなくなる。

「いろはちゃん……」

「さ、沙花叉……」

そしてついにお互いの覚悟が決まって……

「だいす——」

「——ごめんなさいでござるっ!!!」

と、またまた突如近くで響いた大きくも優しく美しい声に私はびくつと肩を跳ねさせた。

「え……?」

「ばつちいって言つてごめんなさいでござる……嫌にならないで欲しいでござる……」

「!」

「へ……?」

私とは別の覚悟が秘められた瞳が炎のように揺らめく。そんないろはちゃんを見て、私は訳が分からずぼえぼえ言う事しかできなかった。

「沙花叉、本当はそういうこと言われるの嫌なんでござるよな?……なのに風真はきつく言っちゃってたでござるよ……」

「あ、え、うん…?」

「だから、…だから謝りたいんでござる……」

「うーん……?」

え、どうということ?

どういふ状況?

「えっと、……どういふこと?」

「え……?」

疑問がぐるぐる回って、終いには言葉になった。

そして私はその瞬間、「あ、やらかした」と悟った。

いろはちゃんは言った。私がいろはちゃんのことを嫌っている。そして、今にも涙が零れ落ちてしまいそうな顔をしながら謝罪の言葉を口にした。

つまり誤解をさせちゃったってことだ。

それで、多分誤解させた原因は……

「……もしかして」

「ひよっ……」

頭の中に營業されてところ変わる私の表情をじっと見ていたのか、いろはちゃんの方もところどころ変わる。

最初はきよとんとしたもののから。

段々と勘違いであることに気づき始めたものになって。

そして羞恥と少しの安堵が混じった真っ赤なものになって。

「……嫌いじゃないでござるか……?」

「え、あうん……」

「風真の勘違いでござるか……?」

「う、うん……」

次に顔を見たときにはもう涙が頬を伝っていた。

「うわあくんよかったでござる……!!!」

「っ!?!」

抱きつかれて、動けない。

近い。

「沙花叉に嫌われたと思ってビックリしたでござるよお……!!!」

子供のようにはびりびり泣きだしたいろはちゃんを見ながら、私は純白のキャンパスに絵の具をぶちまけたような気分になった。

簡単にすると、ごめんねって言いたくなかった。

「いろはちゃんごめん！」

「ひゃっ」

がしつと背中に腕を回す。鍛えている身体の感触が伝わる。

私はその興奮のままに謝ろうと口を開いたけれど、テンパっていたせいか頭に浮かんだ言葉がそのまま口からごーすとれーと。

「私はいろはちゃんに「ぼっちい」って言われたり叩かれるとキュンキュンしちゃうから！絶対に嫌いにならないから！オールデイお尻ぺんぺんしてくれないかなって思ってるから！」

「ふえ……」

「……………」

「……………」

——その時はさつきみたいに「やらかした」とは思わなかった。自覚が追いついていなくて、触れ合った肌の温かさに浮かされて、渦巻く想いが伝わってほしくて。

「……………あれ？」

だから少し腕の力を緩くして、いろはちゃんの顔を見るまでは激しい心臓の鼓動に満ち足りた気分になっていた。

いろはちゃんの顔は、さつきまでの比じゃないほどの涙がぼろぼろ零れ落としながら、恐怖と奥底で生まれた侮蔑の感情に染まっていた。

「うええええ〜ん変態がいるでござる〜!!!」

泣き声が結社内に響き渡った。



「あのね、それでね——」

「ん……………グス」

落ちて着いてきたいろはちゃんに、私はなんとしてでも真相を明かさないといけない気分になって、全て説明した。

でも意外だ。いろはちゃんはh o o r o o Xの皆から好かれているんだから私と話さなくてもぶつちやけ気にしないのかなと思っていた。

可愛いな。そんな感情が溢れてくる。

んの裸いろはちゃんの裸いろはちゃんの裸いろはちゃんの裸

「あ……えと、……やつぱりやめておくでござ——」

「いや、入ろう?」

「身の危険を感じるでござる……」

「いやいや、入ろう?」

「か、風真もう行くでござるから!」

「え、逃さないよ?」

「あ、離す……は、離すでござるよ!」

「離さないよ?」

結社内には、二つの大きな声が響く。

一つは涙ながらに逃げ回っていて、一つはそれを嬉々として追いかける。いつも通りの風景。

ここ数日響かなかった二種の声が幹部室にも、総帥部屋にも、研究室にも微かに届いていた。

そしてその部屋の住人は、ああまたか、と呆れたように笑う。何も知らない子供のような美しさをもつ女の子と、それを誑かそうとする一途な女の子。そのやり取りは、多分これからもずっと続く。

【番外編】わしらの晩酌

ルイほどではないが立派な翼が空気を羽織り身体を浮かせる。昼にはルイの仕事をしつかりとフオローし、朝、夕方と睡眠をとったわしには深夜の楽しみが待っているのだ。

「酒だ。さあ飲むぞー！」

幹部室内を旋回して喜びを身体全体で表現すると、ルイは呆れた笑顔でわしを見る。だがルイも酒好きなのでわしを止めることはできません。

勢いよく幹部室を飛び出ると、今日の晩酌相手を迎えに総帥部屋へと急ぐ。今日はルイが明日に備えて早めに寝るため酒を注がせることはできません。

他愛のない話もいい肴になるものなのだ。

「時間だー！」

不用心にも少し開いている扉から入り込んで先程と同じように旋回しながら呼びかけると、誰もいないはずの部屋からちよこんと黒い豆粒が出てくる。

その豆粒はカラスの形状が分かるまでに大きくなつて鋭い瞳を見開くと、わしを見ながら小さく鳴いた。

「……ア」

「そうだ。さあ行くぞ」

「……ア」

カラスは自前の黒い翼を鈍く閃かせて、ぱた、ぱた、ぱた、ぱた、とゆつくり身体を浮かせ始めた。



「ぽこべえはどうしたんだ」

「……ア」

調理室の簡易デスクにて、わしとカラスはワイングラスとオレンジジュースの入ったガラスコップをこちんとぶつける。

「寝ているのか……ならしょうがない」

「……ア」

リースリングのほんのりと甘い香りがわしの心を満たしていく。そちらのカラスもオレンジジュースの味わいに翼を震わせている。

「最近ラプラスはどうなんだ……？」

「…………ア」

気になっていたことをストレートに言葉にすると、カラスはいささか華やかさに欠ける音を漏らす。どうやら悩みがあるらしい。

「どうした」

「…………ア」

便利屋扱いされて少し困るのと、コーラばかり飲んでいて心配なのと、最近何かの動画を見ては奇声をあげるのが気になっているとカラスは言った。

カラスが鳴く。それはただの小さな音の粒だが、同類のわしにはカラスの言いたいことがなんとなく分かるのだ。

「…………ア」

「ふうむ…………」

便利屋もコーラもいつも通りとして、奇声はどうしたものか。わしもルイからの又聞きでラプラスの叫びについては知っている。

決して悪いことで騒いでいるわけではないのだ。

だが、他の面子に迷惑もかけられん。

「…………まあこのまま続くようなら痴態を晒させる感じでもいいだろう」

「…………ア」

肯定、と同時にカラスは聞いてくる。ルイは最近どうなのかと。……………ふむ。

「最近は少しミスが多いな……………疲れているのかもしれない……………」

「……………」

「……………？……………ほう、それは良い手だな」

カラスの案を聞いたわしは、その素晴らしさに嘴をパチパチと鳴らす。音波が少しワインの水面を揺らした。

「なにやってるんですか？」

そんな時、ぴよこんとたぬき耳がデスクの下から見えてくる。大福のように柔らかい耳をピクピク動かしながら、よいしょ、と一匹の狸が晩酌に加わった。

「ぼこべえか……………寝てるんじゃないかったのか」

「風真殿が起きちゃって、剣を振り始めちゃったですよ」

相変わらずののんびり声と身振り手振り。愛らしいマスコットといった風格だ。

「そうか……………今日は飲むか？」

「ううくん、白湯にしとくです」

「……………」

ぼこべえはどこからか小さい水筒を持ってきて猪口に並々と注ぐ。こうして見るとどうにも日本酒に見える。

「ぼこべえはどうだ、最近は」

「いろは殿が剣の鍛錬に熱中して色々サポートしなきゃなんです」

「ほう……相変わらず努力家だな」

「……ア」

「そうぞカラス。ラプラスにも言ってやるんだ」

「……ア」

晩酌は朝方に近い時間まで続いた。

秘密結社はバイトする

バイトしようぜ!!

「はい、ちゅーもーく」

「んだよ幹部」

「珍しいでござるな」

「ルイルイがわざわざこんな朝からね〜」

「ねむ……」

珍しく全員を呼び出した幹部は真剣な顔で正座していた。これはあれだ。お暇いだくつてやつ。あれつてどういう意味だっけか。グツバイ宣言？

思考に耽る吾輩を知らんぷりして幹部は続ける。

「はい、知ってる通りホロックスは常にギリギリの経営なんだよね。秘密結社なのに、ギリギリの経営なんだよね。………ね、ラブ」

「……ん？、おう」

「胸張るなよ」

「ルイ姉の言う通りでござるよ」

「ラブちゃんこの前も無駄遣いしそうになったしね〜」

「ぼえ…ぼええ……」

幹部は光のない瞳で吾輩に訴えかける。

まるで吾輩が悪いみたいじゃんか。

「——ま、というわけで」

「おう」

「皆でバイト、しよっか」

「「……………へ？」」

「スヤア…………」



「らしやーせー」

「えつと……………常闇ちゃん……………?」

「……………あ、吾輩か……………は、はい?」

「声大きいのはいいことだけど、ここ、メイドカフェだから」

「はーい」

常闇律。それが吾輩のバイト時の偽名だった。

ってかおい幹部恨むぞ。なんでメイドカフェなんだよ。

常闇 律（とこやみ りつ）って誰だわまじで。吾輩の最近のお気に入りの悪魔さんの名前つけければ良いって問題じゃないんだ。吾輩ラプラス・ダークネスって名前あんだが。

吾輩がオタク君達にキャピキャピするの苦手なの知ってんじやんかよ。素で接することしかできんわ。全然楽な仕事じゃないじゃねーかよ。なんでここに派遣したんだ。

そんな心の声押し殺しつつ、吾輩は先輩に教えられるがままに仕事をこなす。たまに料理を提供しなきゃいけないくて、ファンサとやらはその時だったり、チエキの時だったりする。

チエキは撮られたら記憶消して現物抹消してやる。

認識障害で角は隠しているとはいえ、吾輩の顔を覚えられるのも困るし素っ気なくこなすのがいいだろ。

ちなみに認識障害かけておいたとはいえ角は普通にあるから横から吾輩に近づこうとすると顔面に角がぶち当たるぞ。確率1/2だ頑張れオタク君達。

吾輩の振り向き加減で殴ることもできる。ルパ〇ダイブしてくるような厄介オタク君がいれば何もしくとも普通に串刺しだ。

防衛対策もバツチリだな！ぎやはは！

「ほれ【でりしやす♡オムライス】」

名前やべえー。漫画とかアニメとかでバイトする推し見てると浄化されるけど自分でやるとキツイ以外の何物でもないわ。

やっぱこういう仕事ができるのはやりたくてやってる人なんだろうな。知らんけど。

こういうのはやっぱ趣味に限る。

「あつ、……塩対応もいいですねー！」

なんじゃそりや。どこの新人だ。

「いただきます」

「あいはーい」

喜ぶオタク君を置いて吾輩は早々にキッチンに帰宅する。先輩はなんか満面の笑みだった。

「律ちゃんキャラ上手いねー！他のとこでやってたの？」

「やってないっすよ」

生まれてこの方吾輩はバイトをしたことがない。バイトしなくてもお金は稼げるし、

死にはしないからな。

「そっか……あ、じゃあホールスタッフ経験者？」

「いんや、バイト自体が初めてです」

「え、未経験!？」

「はい」

「へー、凄いな……」

吾輩はそんな賛辞は耳の奥に残して、さつさと残りの料理の把握と給仕に務める。そんな時、吾輩は見逃さないんだ。

仕事に専念しているはずのメイドが、明らかにこちらに向けて良くない感情を向けている。

「ふーん……あ、ほれ「メロメロ☆エスプレッソ」お待ちだぞ」

こりゃあ退屈しなそうだ。



「ラブ、大丈夫かな」

ボールペンを指を使ってくるくると回転させながら、私はあの働けない上司のことを

考えて頭を悩ませていた。

『働きたくないでござる！ぜえつたいに働きたくないでござるー！』を地でいくうちの総帥はとんでもなくものぐさだ。

『ラプー、ごはーん』

『ぎやはは〜！まじで○アロラントやめれないんだけど〜！ぎやはは〜！……あ、後で行くぞー』

『……はあ』

ご飯も食べずに日夜ゲームか興味が向いた物事しかやらない総帥なんて唯一あの子だけの気がする。というかこの組織は本当に秘密結社なんだろうか。

上手くやっていけているか心配だよまったく。

ため息をつく私をがんもが書類で叩いた。

「元々赤字はラプラスのせいだしなあ。カラスも不健康を悩んでおったし一石二鳥だろう……ほれ、ここミスつとるぞ」

「ええ…、あ、ほんとか。ありがとう」

「他の三人はどこに派遣したんだ」

「うーんとね、いろはが料亭、こよが大学教授の助手、沙花叉は……清掃員、だったかな」

「……沙花叉は大丈夫なのか？」

バイト先を聞いた途端、今度はがんもがあわあわとしだして毛並みが荒れる。こういう仕事は本当に人間に似ているから分かりやすい。

声さえ酒焼けてなければこべえみたいにマススコットの活躍できるかもしれないのね。

「うーん……」

そんなことはさて置き、今はがんもの言った「沙花又は大丈夫なのか」という件についてだ。

正直どうにでもなれという思いしかない。

ラブと同じくらいものぐさな所はあるし、ラブと違って極端な負けず嫌いってわけでもないからバイトを選ぶには苦労した。

結果としても「なんだよ清掃員って」と自分にツツコミを入れたくなっただけどね。

まあでも、いざという時にしか頼りにならないラブとは良い意味で違って、趣味とはいえ、汚れ仕事をやってもらっているからたまには他の仕事もいいんじゃないかと思う。

「とはいつても、頑張ってるかなあ……」

いつの間にか私はラブの時と同じように天井を見上げてしまっていた。



ああ、掃除したい。

皆さん、沙花又は掃除したいです。

「ほらあそこもなつてないよ、あんた人生で一回も清掃したことないの？」

「……つ……ぐ……つ……はーい」

——このお婆ちゃんを掃除したいです。

ルイ姉の圧に負けて清掃員やらされてるけど絶対適任じゃない。私のお仕事は生物の掃除であつて無機物の掃除じゃないんだけどな。

「ほーら、ちゃちゃつと動く」

ああ、どうせならいろはちゃんと同じとこがよかつたなあ……。

モツプをへし折りそうなほど握りしめながらあの満面の笑顔を求めてぶつぶつと祈りを唱える。そんな私をますますきつちり叱るお婆ちゃんは相当の猛者だ。

——と、それは置いておいて。

私は清掃対象の職場の燦燦たる様子を目の当たりにして、げんなりすることを止められない。

「これは……」

ゴミ袋にまとめられたカップ麺の残骸。デスクに並ぶモン○ターエナジーやらレツド○ルやらのエナジードリンク。

凄い。さすがに私の部屋には勝てないけど、ルイ姉が見たら顔を真っ青にしそうなオフィスだ。あの人は綺麗な空気が良い仕事を生むってよく言ってるし。ま、ワタシの部屋には勝てないけど。

そこかしこに寝袋が見える。空のもあれば膨らんでいるものまでぱつと数えられないくらいはある。小さい市場が開けそうな彩りだ。

デスクマーチってこういうのかな。

(デスクマーチっていうのは簡単に言えば「やばいくらいの仕事量を短時間でこなさなきゃいけない状況のことだよ」by沙花又)

秘密結社にいるものの、趣味と実益を兼ねた掃除をしているだけの私にはそれが新鮮で思わず敬礼をしてしまう。

働くっていうのは難しいんだろうな。

やっぱりお仕事は楽しくやれることじゃなくちゃね。

「ほら、早く集めな」

楽しくやれないところなるし。

「~~~~つっ」

社員さんを寝かせるための小さい声でも変わらない棘に、私は額に筋を浮かべながら迅速にゴミを回収していった。

そのあと、何回か趣味の方のお掃除をしたくなることがあった。しなかつたけど。

バイトしようぜ!!②

「失礼いたします。ご夕食お持ちいたしました」

膝を曲げて身体を支えながら、両手を揃えて丁寧な畳に添える。その体勢のまま深々と礼をする。里で茶飲みや座禅、滝行をやる時とかによくやる正座から土下座の構え。

そのまま頭を上げると同時に襖を閉めて、手早く縁側に出る。そこで初めて一息入れて肩に入っていた力を抜く。

「ふう……」

すぐに調理室の方に戻らなきゃいけない。静かに早歩きする。いつもの軽めの羽織ではなく着物をしつかり着ているからか、肩は重く、足をおおっぴろげにして走るわけにもいかない。

「窮屈でござるな……」

拘束されているかのような感覚に、風真は自分の背中に冷や汗が伝うのを知覚した。この後はコース料理のメインを別部屋に運ばなきゃいけないはずだ。

とにかく早く、早く戻らなきゃ。

「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ」

誰も見ていないのと、見られそうになってもすぐ隠れられることを良い事に、手を振り上げてリズムカルに足を前に進める。軽く跳ねる髪の毛のしつぽがふさふさと首に当たる。

『いろはよ。侍たるもの行動時にも休息をとれるよう訓練するのだ。警戒していない状態を作つてはいけない』

『侍が寝たままでも動けたらかつけーじゃん！』

人生で二人の上司から全く同じことを言われたのはあの時が初めてだった気がする。

といつても片方は純粹に風真の身を案じていて、もう片方は興味が湧いたものを自由に、適当に投げっぱなしジャーマンしているだけだけど。

h o o Xでやるのが個人的にこうした技術が使えるお仕事で良かった。給料は5円チョコだけど。事務仕事をやらされることになっていたら、風真はどんな感じの人間になっていただろうか。

多分別でトレーニングしなきゃいけないくて、あまり自由な時間がとれなくなつてしまつていたかもしれない。そう考えるとお仕事しながら経験を積めるのはありがたい。かといつても結社内にある修練場のお陰でトレーニングには事欠かないから、そんなことになつても意外と楽しかったりするかもしれない。

でもそれはh o o Xが存続できる場合のお話だ。

「赤字はまずいでござるからな……!」

改めて働くモチベーションを持ち直して再び歩き始める。早めに戻れば余裕もできると、少し休憩できるかもしれないんだ。

よし。

そう思いながら角を曲がったところだった。風真は突如頭によぎる違和感に首を傾げる。

「……………あれ?」

「ここ、さっきも通った気がするんでござるよな。」

「調理場は確かあそこを曲がって真っ直ぐ。それから……………」

左、右、右、左……………上?

高級感溢れる日本料亭を縦横無尽に歩き回る。本当に縦横無尽に歩く。けれど気づけば状況は悪化して、遂にさっき料理を届けた部屋の前に来てしまった。

ここ、これはもしかして……………」

「ま、まままま……………」

自覚したくはない。こういうことに関してアルバイト前にルイ姉からきつく注意をされていたからというのがあるけれど、それ以前に自分が嫌いになりそうだから。

けれど、これは……………」

これはさすがに……。

「ま、迷ったで……ごぎるか？」

カタカタと震える脚に「これでおしまいだね！」って風真に伝えるみたいに、鹿威しがポンツと聴き心地の良い音をその場に響かせた。



「紫外線と赤外線が不可視光線とされているのは諸君もご存知だと思うが……」

教授がペンから照射される赤い点をスクリーンに当てながら説明するのに合わせて、マウスでパワーポイントの進行速度を調整する。

最近では遠隔からでも操作できるのだからこよがやらなくてもこの人ならできんじゃないだろうか。

的確に操作していく中で、淀みなく講義を進めていく教授を見てこよはそう思った。遡って考えれば、教授のサポートとしてアルバイトを始めてから、雑用的なことしかできてない気がする。

『さて、では早速今日の講義で私の代わりにPCを操作して貰おうか』

と初対面の時に言われてからずっと、指示される仕事はそんなことばかりだ。自分

で自発的になにかすることがあっても教授の助けにはなつてなさそう。

私ここに来て正解だったのかな。

折角大学まで来たのだし、もっと色々サポートできればいいんだけどなあ。

そんなこんなで、どうしようかと考えているとその教授が何故か講義内容の説明から話を外して座っている一人の生徒を指して言う。

「そしてだな……、と長良君、pcが気になるかな？」

思考に耽っていたこよがハッと我に返ると、講義を受けている生徒君が教授に注意を受けていた。長良君と呼ばれた生徒君はこよの方をチラチラ見ながら「すみません……」と頭を下げている。

「ん……？」

生徒君、もしかして今、こよのこと見てた？

パソコンに集中していた視界を大きく広げると、少なくとも生徒君達がこよの方を見ているのがなんとなく分かった。

あれ、なんかミスをしてたかな。

いや、これって。

(こよ、注目されてる?)

そんなに目立つだろうか。

いや、確かに今まで一人で講義を進めてきた教授に突然サポーターがついたら浮くかも。首から下げている大学関係者のプレートも教授はつけてないからこよだけだしね。

一応、ラブちゃんの認識障害でコヨーテだとバレそうな耳と尻尾は隠しているけど、もしかしたらそれ以外におかしなところがあつたつてこともあるかもしれない。仕草とかがコヨーテそのものだったりとかね。

怪しく思われないようやり過ぎさないとなあ。なんて思いながら周りを逐一確認している間に講義の時間は刻々と過ぎていった。

「やはり君は注目の的みたいだな」

教授専用の講義室の非常口から外に出ると風が気持ち良い螺旋階段に出る。外に張り出しているその場所は、傍から見れば少女漫画の出会いに使えそうだ。

これが高校でこよの隣に同学年の女の子がいたなら恋が始まるとか仲が進展するとかあつたかもしれないけれど、さすがにそんなことはない。

そんな場所で壁に身を寄せ、煙草を手にしながらこよに話しかけるのは粕菜良子（こまな りょうこ）さん。サポート先の理系大学の教授さんだ。

毛先が少し乱れていても綺麗な黒髪。切れ長で鋭い目に少しこけ落ちた頬。真一文字に引き結ばれた唇。とにかく冷たい刃物のような外見で、初対面ではこよも緊張した。クールな女の人だ。

とにかく痩せているけれど不健康というわけでは全然なくて、運動をしている感じの細さ。希薄な存在感が白衣に不思議と合う。

見た目通り若い人だから、教授になるまで沢山お勉強をしたんだなっていうのが分かる。

「そうなんですかね〜」

そんな良子さんの冷やかしかもしれない言葉に、こよは階段に腰を下ろしながらそう返した。風は荒れてもなく弱くもない絶好の強さ。涼しさに目を閉じたくなる。

「自覚なしか?……よっぼど整っていると思うが」

こよが首を傾げたのを見て、良子さんが口元をちよつとだけ緩める。あんな雰囲気であんな優しく人を褒められることができるのが少し意外だった。あれは笑顔なのかな。

「そうですか?」

「生徒達が惹かれるのも無理ないだろう」

言いながらふつと煙草を吸うと、ゆらりと揺れる煙が持つ香りがこよの嗅覚を刺激する。これだけはあまり好きではないかもしれない。こよが研究着の袖で鼻を隠すと、気

づいた良子さんが臉を少しだけ持ち上げる。

「おっと、煙草は苦手か」

「ちよつと苦手かもですね……」

「そうか。すまない」

まだ吸いかけの煙草をこよから遠ざけて、灰皿にぐしぐしと押し付けながらそう言う良子さんは、また新鮮な表情をしている。

「あれ、よかつたんです？」

「君が嫌がっているのに吸うのもな」

バツが悪いいたずらっ子のように柔らかく笑って天を仰ぐその姿は、ラブちゃんと重なつて見えた。

「似てる」

「ん？」

あ、声に出てた……。

「あ、いや……私、せつかくサポートしに来たのにあんまり役に立ててないなつて」
「ほう？」

咄嗟の発言から誤魔化したけど、それこそ聞いてみたい話に繋がった。この流れで良子さんがどう思っているのか知っておきたい。

講義より重要な教授のお仕事といえは研究だ。

なのに良子さんはデータ収集は一人でやってしまおうし、分析や統計なんかも一人でやるだけやって、わざと少しだけ残した簡単なものを生徒にやらせてみたりしているだけ。

研究の分野でこよが関わることは全くと言っていいほどない。

「やることは講義のサポートだけです」

と、そこまで言い切って良子さんの方を見ると、心底意外そうな顔をしていた。表情変化が乏しいから、色々な顔が新鮮だ。

「役に立っていないとは心外だな」

こよの言葉を最後まで聴いて、今度は良子さんは口を開く。

「調査での外出や分析に関するスケジュール管理。講義資料の添削、表現修整。参考文献の読了と解釈。これだけ主体的にこなしてもらっていて、役に立っていないわけがなかろう」

「あ、あの、それこそ良子さんがやった方がいいんじゃない……」

「適材適所だよ。研究に関しては君の得意ではないだろう。気にしないでいい」

それとだ、と足を組み直しながら良子さんはまたあの顔をした。そう。ラブちゃんみたいなの——

「——研究者はズボラなんだ。頼りにしてるよ」

バイトしようぜ!!③

吾輩だ〜!

バイト始めて二週間が経ったぞ。

少しずつだがメイドとやらに慣れてきて、仕事もまあまあ捗るようになってきた。つてことで残る問題は一つに絞られてくる。

それが吾輩を疎む奴らの存在だ。

でもまああぶっちゃけ無視してバイト続けることもできなくはないぞ。吾輩大人だし。でも無理だ。吾輩無視できなかつた。

「レクリエーションタイムだよー!この席は私と律ちゃん担当しま〜す!やるのは人狼ゲーム!」

あるメイドが数ある中の一つの卓に吾輩を連れていき、座らせながらそんなことを言い出した。

吾輩新人メイドだし誰が喜ぶんだと思つたら、そこに座っているオタクくん達はちゃんと喜んでた。

普段見てる限りだとめっちゃ人気あるんだよなこのメイド。オタクくんはどんだけ

払ったんだろこのメイドと遊ぶのに。

つてか、レクリエーションタイムとかこの店だとなかった気がするんだが気のせいかな。吾輩二週間バイトやってきたけど初めてだぞそんなの。

ま、それは置いといてだな。

このメイドは明らかに、吾輩と遊びたくいなんてばやばやした気持ちでいるわけがないよな普通に。

実はここ二週間、吾輩に仕事を押しつけるだの、汚いところの掃除やらせるだのと悪逆の限りを尽くしてきた腹黒メイドこそこいつなのだ。

そんな奴が純粹に吾輩と遊びたいわけない。

なんかラノベみたいなタイトルだな。

「ほら、律ちゃんもテンション上げてこ？」
「ういす」

んなわけでチキチキリアル腹黒人狼ゲームが始まった。

人狼だーれだ。こいつ。

はいおしまい。解散な。



「次はこつちを——」

「——はいはいっ! (小声)」

「……!」

こつちを仕留めな。(片付けな)

と、言われる前にこのゴミ共を仕留める。

いや、本当にゴミだからね。転がってるやつ。

「……随分と良い動きしてきたじゃないかい」

お婆さんは一瞬目を見開いて、そのまま薄くニヤリと笑う。妙に貫禄がありすぎる表情に笑いを堪えるのに体力を使わなきゃいけない。

お掃除の仕事を初めて二週間。

なにかといびられ続けて、遂に私は決心した。

これからもうお婆さんに仕事は一切渡さない。持ち前のスピードでこのお婆さんがゴミを除去する前に私が横取りしてやる。

そしたら仕事してないトロいやつはお婆さんになっちゃうもんね。

「ふっ……」

オフィス内を疾駆しながら片っ端からゴミを片付けていると、私の心を読んだかのよ

うにお婆さんが鼻を鳴らした。口は笑みに歪んだままだ。

おっと、やっと私の働きを認めたとかそういう感じなのかな――

「――勝負とはいいいだろう。受けて立つよッッ!! (小声)」

私が僅かの思考で腕が鈍った瞬間、お婆さんが動いた。私より速くはないけれど、私よりはずつと無駄のない動き。的確にオフィス内のいらぬものを排除していく。

「掃除歴十年の私を舐めるんじゃないよッ! (小声)」

「くっ…、!」

お婆さんの予想以上の覚醒に歯噛みしながら、私は脚力に物を言わせた三次元機動で、珍しく「お掃除」に本気を出し始める。

「かあああああああつっつ!! (小声)」

「はあー……っ!! (小声)」

信念のぶつかり合いがそこにはあった――

掃除のおばちゃんと、

掃除屋の私と。

己のプライドを懸けて、ゴミを拾う――!!!



「……………三十分もどうしたの?」

「すみません……………」

あれから二週間。

こうして迷うのはあれからこれで三回目。

決して怒られているわけではなく、本当に疑問だというような女将さんの表情。怒ってもらえた方が割と楽だけれどやっぱり心配してくれているだけなのが心に響く。

風真は伏して謝った。

「働き者だしすつごく助かってるけど、大丈夫そうかい? 疲れてない?」

「大丈夫でござ……………、です!」

「そう?……………無理しないでね」

「はい!」

風真は遅れを取り戻すため、粉骨碎身の気持ちで仕事にあたる。持ち前の持久力と体捌きがあれば普通の人よりは長く速く動く。

けど閉店間際にもう一回迷った。

泣きたくなるでござる。



人狼ゲームの四回目が終わった。

過去の内容としてはこんな感じだ。

一回目、吾輩が人狼。腹黒メイドにオタクくん三人が誘導され市民勝ち。

二回目、吾輩は市民。腹黒メイドが人狼。吾輩はワンターンキルされる。その後腹黒は「あ、人狼って言っちゃったろうっかり」とかなんとかで投票を集めて市民勝ち。

三回目、吾輩は市民。また腹黒メイドが人狼。このゲームではワンターンキルはなく、話し合いで腹黒が何故か吾輩を庇い始めた。お?と思ったらちゃんと次のターンで殺されてた。その後も腹黒は殺しまくって人狼勝ち。

四回目で市民側として本気で潰しにいった吾輩によつて、カマかけられたオタクくんaが釣られる。市民勝ち。

いや吾輩ぼっこぼこじゃねーか。

「律ちゃん負けがこんでるからつて熱くなりすぎだよ〜」

「それにしても美上ちゃん上手いね〜」

「わあご主人様、ありがとうございます!」

こいつは吾輩に人狼なんかで勝ちまくって一体どんな優越感にダイブしてるんだ。

ゲームで蹴落としたつもりになって悦ぶなんて怖すぎだろ。

吾輩は別に悔しくない。

………悔しくないし。

ま、まあ? こうボロボロに負けるとすこーし悔しいとかなんとか思ったりするかもだが? そんなことないし。

「あ、律ちゃん顔固ーい」

「あ?」

——おととと。

抑えるんだ。吾輩はこんなところで心を乱すようなお子ちゃまじゃないんだ。こんな腹黒の煽りなんて放っておけばいいんだ。うん。

「あ、でも二回目の時の殺されちゃってほけーっと眺めてたの、可愛かったよ」
大人の吾輩に、子供の腹黒がそつと囁く。

………!? ☆ ▲ ▽ / / # # # # # # # # # # # #

あーきもちええー!

なんだア？てめエ……………

吾輩、キレた…!!

「じゃー次で最後にしよつかー！」

ばやばやと笑う腹黒を見ながら、燃えたぎる心を魔力まで使って抑えながら、吾輩はついに準備を整える。

よし。もうこんな腹黒メイドに付き合つてられん。

真のチキチキリアル人狼ゲーム始めるわ。

バイトしようぜ!?④

「カラス、頼んだぞ」

カラスに密かに連絡し、吾輩は落ち着いて人狼ゲームをこなす。二週間隠し続けた準備の成果が今発揮される。

「はいーじゃあ次で最後でーす!」

何も知らずにオタクくん達や腹黒はゲームを進めていく。そう。吾輩の思惑は誰も……うーん……カラスくらいしか……いや割と幹部も……うん多分誰も知らん。

役決めのカードを配られた瞬間、カラスが”遠くから”吾輩に返事をして、それを聴いた吾輩は大きく目を見開いた。



「全く、そんなに手伝いたいのか?」

「やっぱり仕事をした気がしないんです」

「……はあ、そうか」

バイトを始めて二週間。

どうしてもちやんとお仕事をしたくて、良子さんに頭を下げた。研究がどんなものかは知らないけれど、講義だけじゃなくて、どうせならそれ以外でも沢山力になりたい。

そんなこよの頼みを、良子さんは最後は承諾してくれた。

「なら、今日のところは私の研究についてきてもらおうか」

「分かりました！」

そう苦笑いする良子さんにこよはついていく。

大学の教授は研究室をもっていて、そこに准教授やら生徒君達もいるらしい。こよはhooxに専用の部屋を持っているのでそこら辺は教えられるまで知らなかった。

そういうえば昔は籠もって色々な研究をしたなあ。

今日は非常階段には出ずに、一階を過ぎてなお普通の階段を降りていく。良子さんの研究室は地下一階。前に何回か行ったことがある。

「といつても、人に研究を見られるのは恥ずかしいものだな」

「そうですか？」

「ああ。君はそうじゃないのか？」

「こよは見られたら研究対象になってもらうので！」

「そう、か……。君の同僚は大変そうだな」

「皆優しいですよ〜」

「それはなにより」

二週間もサポートをしていて、ようやく良子さんとの会話の語彙が増えた気がする。休みがあまりなかったお陰でよりフォローしやすかった。学ぶこともいっぱい!

ルイルイが決めた一ヶ月の期間中に、もう少し色々勉強させてもらおうと!

「そういえば、良子さんはどんな研究してるんです?」

「そうだな。主に不可視光線についてだな」

「不可視光線っていうと、前に講義でも話していた紫外線とか赤外線とかのことですよ?」

「どうやら説明する必要はないな」

不可視光線。

少し難しいけれど、電磁波の中で、人の目で見れる波長のものを可視光線。その波長が短かったり長かったりして目には捉えられないのが不可視光線。

太陽光とかが可視光線だったりするよ。

「主に最近では紫外線についての研究をしている」

コツ、コツと段に靴を叩きながら良子さんは珍しく身振り手振りを使って説明する。

「へえ〜。また何ですか?」

「理由は色々あるが、一番はオゾン層絡みだな」

「オゾン層かく。確かに季節の揺らぎが激しいですもんね」

「全くだ。ここ最近は特に身体に悪い」

「こよも最近めつきりダメなんです」

こよがそう言うのと良子さんはまた緩やかな笑みを浮かべながら足を動かす。コツコツ。コツコツ。

あれ、そういえば長いな。

研究室は地下一階で――

「――あれ?」

胸の奥を掴まれたような違和感に、こよは立ち止まった。

「ん、どうした」

「……えつと……」

前を歩く良子さんは自然に振る舞っていた。こよが混乱するくらい自然だった。いつも通り、自然で。

不自然なくらい、いつも通り。

でもその姿は少し違う。

黒かったはずの髪は少しずつ白銀に染まっていた。瞳孔は野生のそれに。際立った

変化はそれだけだった。

でもそれは明らかに人間でない生物の姿をしていて。

「どうでもいいが、研究室はこっちだぞ」

「あ、……は、い？」

何故？

こよは分からなかった。

ここまで晒しておいて、気づかせておいてこの余裕。いつも通りの薄い笑顔。手招きする手が硬く強い筋肉で強張っているのと、鋭い爪が明かりを反射しているのに、良子さんの反応はいつもと何も変わらない。

その非日常に片道を突っ込んだみたいなきもち悪さに、こよは冷や汗が止まらなくなってしまうていた。

返事はできても、一步が踏み出せない。それでも目と通じる感覚器官が全身全霊で叫んでいる。

それでもこよは、動けない。

「しっかりしろ博衣くん。研究の手伝いをしてくれるんだろ？」

「あ、えっと、なんか、あれ？」

逃げて。

掻き消される景色の中に、全てを見通すかのような獣人の歪んだ笑みが映った。



「」を追い求めて私は彷徨い歩いた。

昔、「」は私の星に降り立ち、私と出会った。

「」は何故か私を自身に近づけようとはしなかったが、私は無視して、「」の甘さにつけ込んだ。

強引に話をした。夢の話。

「」が言った地球と云う名の惑星。侵略するのだと宣う私と同じくらいの女の子。私はそれを聴いて「」に何かを伝えた。

伝えた言葉に「」は怪訝な顔をした。

その直後。「」はもつと険しい顔をした。私の星の者が「」を探查し、追跡してきたのだった。

「」は言った。戦う意志はないと。

だが私の星の者は宇宙の正義のために「」を裏切り者として、命を狙った。

「は魔王のような強さと悪魔のような狡猾さを併せ持ち、私の星の全勢力を相手に大立ち回りを演じた。」は兵器のほとんどを無力化し、逃亡した。

「の忠告を無視して」「を匿った私は惑星流しの刑に処され、幾度となく生き残ることなどできないと確信できるような放浪の時を過ごした。

確信した。「は私を守るために自身に近づけようとしなかったのだと。

だがそれは遅い。

強い者は生きる。弱い者は淘汰される。

自然の摂理が紙一重で私の命を刈り取ろうとする中で、私はいつか見た「のよ
うな強さを渴望するようになった。

だが私は弱い。弱すぎる。

「には足りない。届かない。

そう嘆く日々に、しかし神は私を見捨てなかった。

地球だ。

偶然だった。地球に、辿り着いてしまった。

温かな自然。照らす太陽。澄んだ空気。

軟弱な世界が私を迎えた。

これが「が守った地球？

これが、こんなものが、「」が持つ強さの先にあるものなのか。
ふぎけるな。私は激怒した。

そして「」が望んだものを私が手にすることで、「」にはない強さを証明することにした。

「」のような完璧な存在になる。そのために。

いつか君と空を飛べたら

「良子さん……」

「その名前はやめてくれ。偽名だし愛着もない」

目を覚ませば暗く、見知らぬ場所。

機械に拘束されていると即座に理解し藻掻き叫ぶこよりに、彼女は見向きもせず吐き捨てる。

その目はもう、こよりを見てはいなかった。

口だけが動き続ける。

「君が組織の人間だということは分かっていた」

「……!?!」

「バレバレの認識阻害にあやふやな経歴。バレないと思ったかい?」

バレていた。その事実がこよりを大きく揺さぶる。ラプラスにもらった認識阻害の魔法が不十分だったとは思えないが、それを看破した目。

そして、言動。

明らかにただの人間ではない

「あなたは……一体……」

「名前なんて必要ない。私が望むのは名を知らせることじゃなく、地球の支配だ……まあ偽名繋がりで適当に、ウルフィと、そう呼ぶといい」

「……………」

話を戻そうか、とまるで大学の講義中であるかのように彼女————ウルフィは語る。

「課題はそれをどう実現するか……さて博衣君。オゾン層は知っているかい？」

「オゾン層……？」

「そう、オゾン層。紫外線を脅威を排除し太陽の恩恵だけを地球人に与える素晴らしき結界のことだな」

「……それを、なんで今……！」

「さて問題だが、それが完全に破壊されると地球はどうなるかな？」

「……………」

オゾン層。地球という惑星を包む膜。太陽から放出される有害な紫外線を大幅にカットする役目をもつ、酸素原子で作られた層。これがあるからこそ生き物は生態系を維持することができる。

だがそれは人間の活動の影響で、年々薄くなつてしまっている。

今でさえオゾンホールというオゾン層の薄い部分が広がり、温暖化や気候の急変動が増えているが、

完全に破壊されるということはつまり、

「……生物が存在しなくなる……」

「そう。生態系は崩れ、紫外線が持つ有害な物質の全てが生物の細胞を破壊していき、死の大地が出来上がる」

「で、でもいくらオゾンホールが広がってるからって、今すぐ破壊なんて——」

——ありえない。

その言葉を紡ぐ前にこよりは漠然と理解する。

ウルフィの意図。

「そう。今すぐに破壊されることはない」

それは

「厄介なものだな……」

圧倒的な殺意。

「しかし、太陽から与えられる光の全てを一点に凝縮して、オゾン層を通過し地球を貫く装置の存在があれば、なんと何百年と待たずして地球人がみな死ぬ様を見物できるんだ」

「そ、そんなこと……」

地球上で最も危険な、殺意。

「地球の国々は核兵器とやらを用いて牽制をしあっているのだろうか？……その小細工の全てをその力で掌握して、私はこの惑星を支配する」

その殺意を止めることは、捕らえられたこよりではできない。

「……ぐっ!!」

なぜもつと早く気づけなかった、こよりはそう歯噛みする。

博衣こよりという、ウルファイにとつて邪魔な存在を雇ってまで研究成果を明らかにしなかつたこと。それも秘密結社のことまで全て分かっているとおお放置していたその余裕。

不自然さというならいくらでも思いつく。

そしてここでこよ리를捕まえているということは、全てを話したということは放置する理由もなくなつたということ。

それ以上に有用な使い方をするとということ。

それは、それはつまり――

「君には特別な存在として、研究対象になつてもらう」

コヨーテでありながら人間に近いこよ리를実験材料にするため。

「先程、その装置の小型試作機が完成した」

「……………」

「そしてここには太陽とオゾン層を近いものを用意した実験施設が備わっている」

「……………」

「どうなるか注目だな。……オゾン層を透過する閃光が可能か否か、獣と人間の狭間の存在にそれが有効なのか否か……」

「……………」

こよりは精一杯の怒りを瞳にたたえてウルファイを見据えた。

「……………少々驚きだ」

「なにがですか……………」

「君はこれから私の実験の犠牲になるんだぞ」

「それが、なんですか……………」

「怒り以上に、恐怖はないのか？」

こんな時にまで、知的好奇心を埋めようとするウルファイという一人の科学者。

面白いという風に笑う彼女に、こよりの表情は変わらない。鋭い相貌。ウルファイを睨み続ける。

「恐怖なんて、ない……………」

「ほう……さすが、ラプラス・ダークネスの部下だな」

「………！…なんで今ラプちゃんの名前を……」

「これは彼女から始まったことだからだ。だからせめて恨むといいよ……君の総帥を、ね」

「……………」

今度はこよりの疑問符に反応することなく、彼女がなにかのホログラムを操作すると暗かった部屋に光が生まれた。

まるで太陽のような光球。作られた真空空間の中で蠢いている。

こよりを掴む機械拘束が動き出す。光球とオゾン層を模した幾何学的な空気の壁。そしてこより。一直線上に繋がる。

「そしてこれが試作機……」

言葉に合わせ部屋の天井が変形し、黒色の装置が降りてきた。擬似太陽と擬似オゾン層の間に割って入り、グラグラと輝く光球に反応して鈍く光る。

その黒の銃口は、疑似オゾン層を挟んでこよりに向けられていた。

全てが静止し、準備が整った。

「さ、実験開始だ」

「良子さん……」

「やめてくれと、言ったはずなんだがな」

「……」

「まあいい」

だがその時、そう言いながらもウルフィは懐疑的であった。

彼女にとって、死ぬ寸前の生物の顔は二種類。死ぬことを理解できずにいるか、全てを理解した絶望を撒き散らしているか。

こよりのあの相貌。死を悟ったといえはそうではなく、状況を理解できていないわけもない。ただ、彼女を見守るような表情。

いたずらをする子供を、きつくあやすような。

「……」

「……？……起動しないんですか……」

「その顔、何を考えている」

「別にどうもしません」

（妙だ。落ち着きすぎている）

「なんの自信だ」

彼女は問う。

「自信なんてありません」

「……………」

「ただ一つ」

「……………なんだ」

こよりは答える。

「私はラブちゃんを、絶対に恨まない」

「……………そうか。……………さようなら、博衣君」

興味が消えた。

あの落ち着きは、ウルファイには害でしかない。

実験の成果を求める高揚感と、ついに届いた神にも等しい力への満足感で掻き消してしまえ。

呆れたようにウルファイは最終ロックを解いた。嚴重にしまつてあつたりモコンパネル型の起動スイッチが顕になる。

(……………すまないな。博衣こより)

ここまでできてなお目を逸らさずにウルフィを見つめるこよりに、ウルフィは口は出さず、心の中で謝ってからスイッチを押した。

「……ア！」

「——！」

——はずだった。

腕に走った突然の衝撃にウルフィはスイッチを手放させられた。そして高く奇天烈な鳴き声を伴った「見えない」何かにパネルを奪われる。

「なんだ……」

そのままふわふわと浮遊するパネル。今度は驚愕に顔を歪ませ、ウルフィはそれを掴もうと近づく。

「……………ア!!」

しかし近づくほどに鳴き声は鋭くなり、パネルはふわりとその指から逃れてウルフィを攪乱した。

姿を隠してパネルを持つ者がいるのは明らか。だがこの実験室にいる以上、セキュリティの恩恵で光学迷彩は効かない。

だとすればこれは高位の――

「――認識阻害?……誰が――」

そして好機を邪魔された苛立ちに、冷たくウルファイがその者の所在を問うたその瞬間。

「リアル腹黒人狼ゲーム……」

――声がする。

「っ!?!」

――それは、「見えない」鳴き声とは比べ物にならないほど大きな音だった。まるで人間大の飛行物体が落ちてきたような、空間自体が歪んだような、嫌な轟音。

しかしその音に晒されながらも、その衝撃の元凶であろう主の声は、ウルファイの耳に突き刺さるように響いた。

逆に咄嗟の出来事の連発に理解が追いつかないこよりは、知っている鳴き声と、知っている声だけに自然と意識が集中されていく。

だが知っているはずの声は、飄々さを含みながらも、多大な怒気もまた孕んでいた。

「わりーがこっちは人狼ゲームの最中だ……」

ゲームをするには低すぎる、その声。

「……それ、おめーだけどな」

強引な転移魔法の影響でヒビが入った床に悠々と仁王立ちしながら、魔王かのような冷徹な表情でラプラス・ダークネスは飛来した。

いつか君と空を飛べたら②

「バイトしろ、か……」

一ヶ月の認識阻害魔法。幹部にしては珍しく吾輩に頼った金策を提案してきたな。

「……………」

経歴詐称は幹部がやるとはいえ、さすがに身バレとかの安全策は十全に用意しといたほうがいいだろうな。

安全策。

安全策……………。

「ぬぬぬ……………」

カラスとがんもとぼこべえ……………

あいや、侍は元々用心棒なんだから問題ないか。新人強いし同じくモーマンタイ。そう考えるといつちゃん危ないのは博士か。

つてもバイトは明日からだし、一夜で全自動護衛ロボ作らせるのもなんかなあ……………。

「おいカラス」

「……………ア」

「お前、一ヶ月博士につけ」

「……ア？」

「念の為だ。お前にだけ博士にもバレないようにゴリツゴリに認識障害かけつから、ずっと博士のそこいろ」

「……ア」

「いよしつと」

「うそ、だろおい……」

カラスの視認映像。そこにいる女は吾輩の記憶にはない存在。白衣を着た、髪がツヤツヤなのかボサボサなのか分からない大学のせんせー。

だが――

「――なんでそんな奴が、認識障害使ってた……」

そいつは恐らく吾輩にしか分からないほどの、やばい練度の認識障害を使っていた。

そこから改めて注視すれば、そいつは吾輩から見れば明らかにそっち側の人間だ。目つきも身体運びも何もかもが心を不快に撫でてくる。

「……おいカラス」

「……ア」

「絶対に博士から離れるな。死守しろ」

「……ア」

「絶対にだつ!!」

「ツツ!!……ア!」

死んでも殺させねーぞ。



「まさかここに来るとはな……」

ウルファイが感嘆の声を上げた。

このタイミングで来たということは恐らくそうとう前から罠を張っていたということだ。

接触は一度もなかったはず。

(それで、そんな状況で気づいたのか……!)

認識阻害まで見破ってその上ですぐには動かず、万全を期して待ち構えていた。周到

に、丁寧に、ウルフィを嵌めた――

「は、ははっ……………」

これが面白くなければ何が笑えるのだろうか。

「……………なんも面白くないぞ」

「ふふ……………これは失礼。予想以上だったのぞ」

「なにが予想以上だ」

再び燃え上がる興味という名の怪物をウルフィは抑えられない。狂気に取り憑かれたような、まるで主神を迎えた信者のような笑みを浮かべて彼女は問う。

「いつから気づいていた。どうやって見破ったんだ」

「教える義理はない」

「惜しいな……………博衣こよりはまだこっちの支配下だぞ」

「……………」

「そこに隠れているのはカラスだろ……………あいつの力では拘束具は外れない」

「……………やらせてみるか？」

「ハツタリはもう少し上手くないとな」

「……………」

そう。ウルフィが言うようにカラスにそこまでの能力はない。そしてラプラス自身

はウルフィにマークされ、自由に手出しできる余裕はない。

「ラプちゃん……」

「博士、じつとしてろ」

——いいから、と答えてラプラスは対峙する。

「いいだろ、話してやる」

ラプラスの手口はいたってシンプル。

ウルフィの正体を察した時点で、カラスの認識阻害をさらに強化すると共にこよりの認識阻害を「弱めていった」

警戒のレベルから、相手はまだこよりを狙うつもりはないはず。そう推測したラプラスはわざと相手に認識阻害を看破させる。

「なるほどな。その状況なら私が動き出すタイミングをある程度図れるということか」

こちらは見破って、しかもバレずにいる。そのような心理状態にすることができれば、相手の予定を意図的にズラすことができる。

実際、ウルフィはこよりを拘束し密かに実験の成果を試す道具として利用するべく、試作機の開発を急いだ。

後はカラスと魔力を繋げておくだけでいい。

「そこはお前とカラスを頼った。……お前が予想外の事態に冷静に対処できる奴じゃな

きや無理だからな」

「光栄なことだ」

「うっせーわ」

「なるほど。ふふ……やられたよ」

ラプラスの側にいなくても、カラスなら魔力を通じて簡単な意思疎通はできる、たとえカラスもろとも気絶させて逃げてても残滓を追える。

「まさか、本当にやるとは思わなかったけどな」

「想定外だったかい？」

「ああ、そうだな。想定外だ」

大学内に電気トラップを仕掛ける大胆さ。それを予想することはできない。

カラスが気絶したことでラプラスは途中で残滓を追えなくなり、元々制限された魔力を擦り減らしてまで実験場を探り、通信でカラスを無理矢理起こし、時間稼ぎをさせて、そしてギリギリで見つけ出したのだ。

「そこまでやる必要があったのがうぜーけどな」

「なんとも嬉しい言葉だな」

「——だが」

「……？」

確かにやられた。ギリギリだった。

そこは認めざるを得ない。

しかし見つければ、そうすることができれば——

きつく結ばれるラプラスの口元が緩む。

「こつからは、ずっと吾輩のターンだ」

——ウルファイが行動を起こしてから今までの、今この時までの時間稼ぎも、もう必要ない。

「っー」

——ラプラスが袂に開けた天井とは別の場所に風穴が開く。

まさにウルファイがいる場所の真上。

察知したウルファイの迅速なガード。その上からガラリと銀色に輝くクロウが凄まじい速度で衝突する。過激な攻撃とは裏腹な高い声が降り注いだ。

「まあつたくー！人遣い荒いなあ！」

「くっ……い！」

体勢を崩されたウルファイが侵入者を迎撃せんと脚を振り上げる。抜群の体幹によって実現する韌やかな蹴りがクロウの装着部分を捉えた。

音は甲高く響く。

「いろはちゃん！ルイ姉！」

再びの高い声に合わせ、二つの影が飛来した。

「いくでいぎるよ」

「うん！」

クロウとは違う鋼の色味。打ち手の意思が具現化したかのように鋭く研磨された一振りの刀が、クロウの持ち主に対処すべきウルフィを無視して、こよりの拘束具をバラバラに斬り刻んだ。

開放されたこよりを紅い翼が包む。

そのまま空中移動とは思えないスピードで旋回し、ラプラスの元に着地する。

「……素晴らしいな」

思考が追いつかない刹那の奪還に、ウルフィはさらに頬を吊り上げる。ラプラスはやつといつものイタズラ笑いを見せて、言う。

「……吾輩が来たと分かったその時、おめーは強引に逃げるべきだった」

「二人だけ姿を現したのは、ブラフか」

全ては「こいつは緊急事態に動かされ、単身乗り込んできた」という印象を残すための演技。

カラスを使ったハツタリすらも、ラプラスが口を滑らせてしまったと相手を油断させ、奇襲を悟らせないための嘘。

「吾輩一人で来るわけねーだろ」

「……！」

「さすがに余裕ぶっこきすぎだぞ」

「……ふ、はは……！」

「吾輩は一人じゃない」

言葉を紡ぐ総帥を立てるように、複数の影は光の前に顔を出す。鷹、侍、シヤチ、そしてココローテ。

二週間離れていた者達がついに総帥の元に集結した。

そう――

「――こいつら全部ぶち込んで、秘密結社h o l o o Xだ」

いつか君と空を飛べたら③

『近付くな』

幾人も寄せ付けないような、ナイフのようなその言葉が私に突き刺さる。しかし何も知らない私は躊躇することなく歩み寄った。

『やめろ。吾輩に近付くと、死ぬぞ』

その言葉も、無知な私には子供のホラにしか聞こえない。当人に私を傷つける意志がないことだけは分かってしまうから不躰に近付く。

『来るなって言ってるだろ』

『知らなくい』

私と同じような年齢に見える女の子の、精一杯の強がりのような口調を私には気にも留めなかった。

『なんだ、おまえ……』

そんな一方的なものが、私とラプラス・ダークネスとの出会いだった。



「ラブ、この人……」

「ああ……」

「……………」

「吾輩は知らんぞ」

「え、ラブ!？」

神妙な空気を出しておきながら、否定はきつぱりと、あつけらかなと。期待したルイがずっこける。

「普通に記憶にないぞ」

「いきなり呼んだと思っただらんなの？お掃除抜け出して来ちゃったじゃん」

「相変わらず適当でござるな」

「ラブちゃん……」

「あの人、それにしても結構な視線をラブに向けてるんだけど」

「そりゃそうだろ……」

「え、」

そしていつも通りな雰囲気に戻るh o o Xに冷水をかけるように、ラブラスは至極真面目な目で彼女を見据えた。

「あいつは、知ってるみたいだしな」

「無論だ」

「……………やっぱな」

各惑星がラプラスを軸にして始めた宇宙間の大戦。

それが終戦への道筋を辿った後、ラプラスは、手首足首につけられた枷によって力を封じられている。

だが、その時の記憶はない。大戦時の記憶もあやふや。ラプラスにあるのは、大戦が終わってからルイと歩んだ頃からの記憶だけ。

よって恐らくウルフィとの関わりは

「大戦絡みだろ。しかもお前はこっち側じゃない」

「ご明察恐れ入る」

「敵討ちでもするんか」

「いや、違うね」

「……………」

「私は君に代わってこの星を支配するだけだ」

「なんでだ」

「あの時の君のような、完璧な強さを手に入れるためだよ」

「意味分かんないな」

「力も記憶も失った君に分かって貰えるとは思っていない」

それと、とウルファイは付け加える。

「分ならずとも、私が諦めることはない」

「……………なるほどな。ここで吾輩達が揃うのはギリ予想通りか」

「ああ、予想であって対策は不十分の最悪の状況だな」

場所を変えなければな。そう言つてウルファイはポケットから小型の長方形カプセルを取り出した。手で何かを操作すると、ウルファイのすぐ横の時空が歪み、トンネルが生まれる。

「ただの転移門だが、君達が追わなければ私は楽に身を隠せるぞ……」

意味深にそう言い残し、ウルファイは歪んだトンネルの中に消えた。

「ラブ、あれって……」

「そーだな」

準備不足を無視して、ウルファイは自らを使ってラプラス達を戦場に誘い込むつもりだ。

そしてこちらは、もちろんこのまま放っておくわけにいかない。

「いくぞ」

四人は総帥の掛け声に応え、五人でトンネルの中に飛び込んだ。



「ハイハイ……」

荒野。

緑も水なく、地にはヒビが入り、砂埃が吹き荒れる広大な大陸にラプラス達は降り立った。全員が抜けきった瞬間、転移門は掻き消える。

見渡す限り同じような景色。

存在するのは主に六人。

「ここでもやるってか」

集まった五人を前にして、掴みどころのない動きでふらふらと姿を見せるウルファイ。ラプラスが周囲を見渡し、問いかける。

「そうだな」

「……吾輩達とお前で、勝負になるとでも？」

「勝負にならないなんてことはあり得ない。……策とはそのためにあるんだ」

言うなりウルファイは再度ポケットから同じものを取り出した。転移門発生装置。先

程のよりは大分大きめだ。

転移門。恐らくそれは大きさやなんかで、移動距離や移動可能質量、移動速度に違が出る。

そういうのは正直厄介だ。そういうの使い分けて攪乱されれば、例えばだが、h o l o Xメンバー諸共未知の世界に飛ばされてウルフィには逃げられる可能性だってある。

「……？」

誘い込むような真似をしないと、実際はあれを使って逃げ回るだけなのだろうか。ラプラスだけでなく、h o l o Xの全員がそう考えた時だった。

「私は見た通り一人な上に、そちらの全員を相手どれる強さはない」

「だろーな」

「だからこうするんだ」

生まれた転移門の奥から、不気味な呻きとザクザクという足音が周囲を埋め尽くさんと響く。その音が一段と近くなった瞬間、ゆらゆらと門から無数の人型ゾンビが這い出てきた。

「……！！」

それと同時に、ウルフィは大仰な動作で彼らの存在を明かす。

「インフェクトゾンビ。一体一体は決して強者ではないが、傷をつけられると君らでも危険な域の猛毒を感染させる」

「……なーるほど」

「殺し切るのが簡単だと思わないことだな……腐ってもゾンビ。動き続け、襲い続けるのが習性だ」

「げっ」

沙花叉が明らかに拒否反応を示した。

だが無理はない。生者にとつてその輪廻を壊す存在であるゾンビは心理的不快感を相当高める。精神力では相当なものをもつ沙花叉でも、接近を忌避させるには十分。

それでなくとも、この量だ。

他のメンバーも難色を示す。

「数攻めか」

「……こうでもしないと私は君とぶつかれないからな」

内臓から煤けてしまったかのような嫌な匂いを漂わせながらゾンビは進む。理性はあるのか、妙にきつちり隊列らしきものを組んでいる。

「さあ、君らが対処する番だよ」

「ラブ……」

「ラブラスう、どうすんの〜?」

「……しよーがねえ!」

ラブラスはため息を盛大に吐き散らかしながら、荒れた地面に掌を置いた。その行為自体は即座に止め、今度はしっかりと踏みしめながら、両手を身体の前で組む。

「カラス、博士についてけ」

「……ア」

「ラブちゃん……」

「さすがに丸腰だろ?……それじゃきついぞ」

「……うん、分かった」

「さて侍と新人、お仕事だ」

「……、それって……」

「そういうと思ったでござるよ」

「ニシシ、話が早くて助かるわマジで〜」

「ええ〜!あれ相手すんの〜!」

「良い役回りだが!お掃除しろお掃除!」

「はあ……まあ、最近「お掃除」できてなかったから丁度いいけどさ〜」

「よし。んじゃ任せたぞー！」

そんなわけで、ゾンビは（全て）いろはと沙花叉に丸投げして、ラプラスはウルフィと相對する。

「手伝うよ」

ルイが寄り添った。

「さんきゅ幹部——じゃ、行くぞ」

ラプラスが組んだ両手の腹をグツと重ね合わせると、二人を中心に地面を幾何学的な模様が染める。

ルイに「使ったらそっち系の人には痕跡がバレる」ともっぱら批判されている魔法。しかしルイは何も言わず、ラプラスはニヤツと口角を上げた。

直後、魔法陣は鮮やかに輝き、二人の姿は掻き消え、

——ウルフィさえも霞のように消え去った。



風が吹いていた。

空というものは雄大で、地上の騒がしきとは打って変わって、風音さえ静かに讃え

る。誰しもが人生で何度も見上げる青い天井は、生き物が地球という惑星を出ることがない限りその者を内包し続ける。

優しく、厳しく、それはある。

昔、自由自在に飛翔することに憧れ、蠟を固めた翼をその身に宿し、空に挑んだ者がいたという。

その者は手にした自由に心動かされるが、太陽によつて翼を溶かされ、その空の雄大さを全身に浴びながら無惨にも落下していった。

傲慢にも空を求め、技術を過信した者は散る。

——そして今、その大空に三つの影が現れた。

消えた地上からしてみれば遥かに高い空。

その高度に瞬きほどの速さで届いてみせる。

「っ！」

「下は侍と新人、博士に任せた。これがおめーのお望みらしいしな」

「ますます光栄だな。まさか真正面から殺り合えるとは思わなかったよ」

「……………おめーが吾輩に何を言いたいのか知らんが、とりあえず止める」

「……………来い、ラプラス・ダークネス」

飛翔できる本物の翼を持った者が傍にいながら、ウルフィと共に落下していくラプラ

いつか君と空を飛べたら④

「ラブちゃん……………」

こよの目には、止まってくれない。
でも分かる。

髪を逆立て、飢えた獐猛な獣のように荒く鋭い一撃を喰らわせようと吠える影と、その影の猛攻を全て捌きながらも、空中での有利を獲り、一撃必殺の致命傷を狙い続けるもう一つの影。

翔け、躲し、掠め、留めて、ぶつける。

目の前で起こっているのは、重なり合う拳が、衝突する意志が、その一撃一撃が周囲の空気を震わせる常軌を逸した闘いだ。



「援護などアテにして、衰えたな」

「ブーメランだぞ。その吾輩に勝てないお前はなんだ」

交わす言葉は静を匂わせ、打ち合う拳が代わりに大きく空間にヒビを入れる。支えない空中での格闘戦。

射出された右拳がラプラスの顔の横を掠めその背後の空間を穿つ。それと同時に右足、左拳と小さい身体に攻撃を殺到させるがラプラスにはどれも紙一重。

突き出された拳は甲を起点に流され、蹴りはその勢いをカウンターに利用される。崩れた体勢のまま、今度はラプラスから放たれた裏拳を開いた掌でしつかりと受け止めた。腕を支配する衝撃の余韻は知らないものとして無視。

「ふんっ」

右腕を拘束されたラプラスは即座に脚を使って逃げの一手。逃すまいと振りかぶった強靱な左掌に、しかしルイに後ろから抱きかかえさせ後退することで間合いから外れた。

「さんきゅ幹部」

言いながらウルフィの元へラプラスが飛来する。ルイの回転と膂力、ラプラスの脚力によつて認識すら届かないほどの速度を生み出す二人式カタパルト。

しかしそこからの神速の一撃は、ウルフィの受け身によつて半減され、その上しつかりとガードされた。

双方そのまま高度が下がり、再び両者によつて近距離でのインファイトに雪崩れ込

む。無数の駆け引きと誘導。それを読み切った上で行われる常識外れの速さの乱闘。

お互いがお互いを捉え、その上で一撃を見舞うことを狙う闘いは、なんと先手で攻め続けるウルファイが劣勢。

優勢でなければならぬはずなのに、互角の攻防という言葉すら遠い。単体でも厄介な存在が、しっかりとサポートの恩恵を受けているという厄災ぶり。

この二人は、強い。

ならば、とウルファイは戦略を張り巡らせる。

「——勝てないとは言ってくれろ」

「っ!？」

至近距離、突如として腕に仕込んだ装置から熱線を放出するウルファイ。反応したラプラスはギリギリで回避。ルイに身体を回収させるも、まだ間合いの中。

「ビームサーベルかよ!」

「(名答)」

ウルファイが薄く微笑みながら、左肩口からその光の剣を思い切り振り抜いた。

「幹部」

ルイがラプラスがそう伝える数秒前に動き出す。翼を大きくはためかせ、迅速に折りたたむ。

朱色の息吹が二人を吹き飛ばすべく巻き起こり、直後たまたまれた翼によつて空気抵抗面積を著しく低下させたその姿は弾丸のように掻き消えた。

刹那、紫電一閃。

先程まで二人がいた空間に熱線による一筋の煌めきが立ち込み、消える。

瞬間。その薙ぎ払いの軌跡の遥か下に移動していたその弾丸はそのまま弧を描いて高く舞い上がる。

それはルイの、ラプラスを抱えての高速旋回。一瞬で下に滑空し、その勢いのまま上昇し、自身の高度を上げる芸当。

先程よりも高い場所ではためく翼が、避けた攻撃の余韻さえ蹴散らした。

優勢が変わる。上を獲ったラプラスとルイによつて空中での特権の全てをウルフィは失った。

隙をついた攻撃にも全く動揺しないその胆力。ラプラスの指示なしでも的確に仕事をこなし、結果で見せるその行動力、状況判断能力。

「さすがはラプラスの援護だけはあるな」

二人の抜群のコンビネーションに、だがウルフィの笑みはまだ消えない。

「だが、そこは死路だぞ」

旋回を終え、高所で翼を大きく広げているルイ。それに抱えられたラプラス。

「……っ！……幹部ッ!!」

——その姿を「何もなはずの」周囲から殺到した無数の熱線が覆い隠す。肥大化した緋色の球体は焰を伴って大きく破裂する。

爆音が轟いた。

「さあ……どうだ……」

ウルファイにとつても危険な至近距離での超爆発に、耳を抑えながらしかし、一切の油断なく爆発の内部を見つめる。

ラプラスが格好をつけて空中での戦闘をすることは読んでいた。その上で始まる直前に遠目にばら撒いておいた光学迷彩仕込みの熱射砲。

殴り合いながらもルイの場所を考慮しながら遠隔操作で少しずつ囲むように仕掛けた初見殺し。ウルファイの奥の手。

手応えはあるが——

「——よいしょっ！」

「っ！」

声が聴こえた、コンマ0秒。

それは背後にいた。

「——くっ!」

「遅い」

「っ!!……がッツ!!」

再び舞い降りた二つの影の急上昇。旋回の速度を伴い鋭く研ぎ澄まされた翼と硬く握られた拳。ウルフィは胴をねじ切られんばかりの威力で打たれ、衝撃と共に、くらつた身体は僅か浮遊する。

(ダメージがない………?!?)

「やっぱ作らせといて正解だな」

「無駄にならなくてよかったね、ラプ」

再び大きく翼を広げ、ウルフィを見下ろす二人。ニヤリと笑うラプラスの手には、小さい筒が握られていた。

浮遊が終わり、落下へと戻っていく身体。激痛を抑えながらもウルフィは来るべき地面とは仰向けに二人を睨んだ。その口は弧を描いて。

「電磁バリアか………!」

「しっしっし」

ウルフィの計略を看破し、誘い込んで全てを叩き伏せる。その余韻をひとしきり満足した後、ラプラスはいきなり自身を抱えているルイの腕を振りほどいた。小さな身体は

宙を舞い、叩きつけるような風を浴びて落下する。

「ラプ」

「さんきゅ幹部……後は吾輩がやる」

そう言い残して、ラプラスはウルフィと向かい合った。等間隔。いや、ラプラスの方が若干落ちるのが速い。

段々と近づく二人。電磁バリアによって至近距離からのレーザーも意味をなさず、切られるカードは再び拳。第二ラウンド開戦の合図は秒待ち。

一人と独りの戦闘は、今この瞬間からの一合から終わりの気配を滲ませて始めていた。



「ぐ、オオオオオオ……」

ひたひたと寄ってくるゾンビもどきの首を、クローで容赦なく撥ねながら駆ける。超音波を使って敵の位置取りを把握しながら、私は掃除を続けていた。

「掃除は、やっぱこうじゃなきゃ!」

振り下ろされる腕を難なく躲してひと薙ぎ。だるま落としの要領で、無くなった身体

を埋めるように上半身が落下する。

それだけじゃだるま落としは終わらないけれど、生き物は一回こっきりで終わりだ。ぐしゃつと崩れ落ちる肉塊をもう気にもせず、私は、別方向のゾンビもどきに攻撃を開始する。グズグズしてはいられない。

後ろの方ではいろはちゃんもゾンビもどきを殲滅しているはずだ。そこまで削り通す。

「よつと……」

数が多い。それなりに準備をしていたというあのお姉さんの台詞は伊達じゃなかった。傷を負ってはならないという制限もあって、中々踏み込めない。

けどそれはいろはちゃんの方がきついはずだ。チャキ丸は構造上、クロスレンジは死角になる。いざとなれば強引に斬り伏せることもできるかもしれないけど、この状況でそれは危ない。

フオローしなくては。なんとしても。

「待ってていろはちゃん！♡」

その後の「ご褒美」への期待に目を輝かせつつ、一心不乱に私はクロウを振り回し――

「――風斬」

風斬。かざきり。そんな単語がずっと後ろの方から聴こえた。それは一番聴きたい声。

その声に無意識に振り向いた私は驚愕する。

「う、うそお……」

竜巻のように大きく、厚く噴き上がる風は数百の雑多を巻き込んで大きく舞い上がり、収縮と共に大きく余波を残して拡散する。

太刀打ちできないような大災。目の前の事態を形容するのにも言葉が足りない。

風に囚われていたゾンビもどきは皆四肢を綺麗に斬られていて、地面に落下した後、動かない。

そんな過程を開いた目でしつかりと追いながら、私が気づいた時には、私の周りにいたゾンビもどきまでもが地に伏せていた。

「ふう……大丈夫でござるか？」

パチン、と愛刀を納め、こちらに駆け寄るいろはちゃんの後ろにはもうゾンビはいない。

数秒前に私がやろうとしていたことを、いろはちゃんは数秒でやってのけてしまっていた。

「は、はは……」

さすがに私も開いた口が塞がらなかつた。

「いろはちやーん!♡♡♡♡」

でも好き!

いつか君と空を飛べたら⑤

「一人でやるってさ」

しようがないな、という風に笑いながらルイルイが降りてきた。見つめるのはこよと
同じ場所。

「一人でって……」

ラブちゃんがいくら強いかは分からないけれど、それでも良子さんが弱いことにはな
らない。考えて挑むタイプは時間を与えるだけで相応の獣に化けてしまう。

「……………」

私は何をすればいいんだろう。器具もない場所で博士の私が何をできるだろう。ラ
ブちゃんをフォローしないと。

「……………」

「いよ」

「っ……………」

「大丈夫だよ」

「……………うん」

肩に手を置いて、ルイルイは安心させるように言う。ルイルイの声はいつもそうだ。皆を不安にさせない。

「ラブなら時間くらい、余裕で稼ぐから」

「そうだね……!」

そうだ。信じなくちゃ。

ラブちゃんはいつもこよを信じてくれるんだから。

そう。こよは頭脳なんだ。やることなんて、少し考えるだけでいくらでも見つけられる。

今は良子さんがどんな手段でラブちゃんを仕留めようとしているのか、何が一番有効なのかから逆算して、阻止する。

「ルイルイ、お願いがあるの」

「ふふ……なあに?」

私のお願いを聴いて、ルイルイは微笑んだ。



本来罨は相手を嵌めるために存在する。だがその罨自体に嵌めなくとも、罨を仕掛け

られた側の動きは驚くほど鈍る。

端的に言えば、畏は「仕掛けられている」という心理にさせられるのが一番の利点。

生物の警戒は360度全方位に向けられるわけではない。多方向からの攻撃にはそれ相応の対処能力と視野が必要になり、それが複雑になるほど相手は崩れやすい。

あると分かっているのと、分かっているのでは訳が違う。

こちらから何かをしなくても、相手の警戒を他に向けることができる。畏はその存在自体が囷になりうるのだ。

「だが……」

「うりゃっー!」

拳、肘、脚での連撃に防御を強いられる。相当に硬化させた筋肉までも通過して骨に響く衝撃に、私は呻いた。

だが呻くだけでは終わらせない。輝かせた鉤爪でラプラスの首を獲ろうと鋭く突き出し続ける。

右。腕につけられた硬い枷を使って受け流される。ギャリイ、という金属音が擦れる音と火花。何かが焦げたような香り。

左。超速で肘を横から殴られ逸らされる。体勢を崩し、立て直す暇もなく足を繰り出す。まず右。恐らくこれまでで一番であろう威力の蹴りをガツチリと左腕でガードさ

れる。

すかさず右拳。ラプラスは咄嗟に首をひん曲げて避ける。鉤爪が彼女の髪を何本か散らす。その程度。

しかしそうやって全てをいなされても私は構わず四肢を駆使してラプラスの防御を崩しに行く。今は致命傷にならずともいい。一撃一撃をそのつもりで当てにいき、隙を無理矢理作り出す。

私はビームサーベルを使用するような素振りを見せ、釣られて電磁バリアの展開を狙うラプラスの裾を掴んで引き寄せる。

「っー」

だがそれは予測していたのか、掴んでいる左腕を逆に掴み返され力が均衡する。瞬く間に囀の右拳を首に向けて射出するが、見事なまでの反応速度で掌を使って側面から弾く。

(罨の密度が足りない——！)

確かに効いている。罨の存在は徐々にラプラスの思考を縛ってきているはずだ。間違いはない。

だが、この相手を倒すには手札が足りない。

私はそこから両方の手首と指を動かして鉤爪を疾駆させるが、さすがに動きは鈍く、

虚をつかれながらラプラスはその全てを捌いてみせる。

再三再四口にするがお互い空中。なのにこれだけ動きが違うのはただの力の差ではない。年季の差だ。私が子供として星の中で歩き回っていた日々を、ラプラスは星の外という魔境を相手に過ごしていた。

たとえ記憶がまばらになっても鍛え上げられたものは嘘をつかない。本人の思考の遜色なしに動いてくれる身体はそこにある。

だがだからといって負けるわけにはいかない。

「は、ああああっ!!」

咆哮を上げて獣としての本能を活性化させる。

しかしそこには過去に関する恨みだとか、そのようなものは一切なかった。いや、元々そんなものはどうでもいい。私が彼女を求めた理由は唯一つ。

その強さ。

目の当たりした私はただ高揚感に満たされ、思うがまま感情の赴くままに力を振るう。

「……………」

遠く離れた岩にヒビを入れるほどの我が咆哮にラプラスは反応を示さない。彼女が声を発するとしたら攻撃の――

「——オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ」

「っ！」

突如奇怪な掛け声と共に凄まじい速度で攻撃を繰り出し始めるラプラスの手札の多さに私は追いつけない。捌き、受け止め、掠め、喰らう。その連鎖が身体に負荷を蓄積させていく。

「オラオラオラオラオラ——」

「く、ぐうつ、づっ！」

「オラアっ！」

「ツツツツ、ガアツツツ!!」

最後の一発だけは確かに食い止める。が、腕全体に響く電流のような衝撃波が圧倒的な差を教える。

「まだまだあつ!!」

だが終わらせはしない。極上の果実を手にして、人齧りで終わらすなど愚か者もどきのすることだ。愚か者ならば全うしたあとに、

——死んでみせろ。

「?」

何かを察したかのように怪訝な顔をするラプラス。だがそれを無視して私は一気に

限界を超えた速度での連撃を開始する。

自分でも思考が疎らになるほどの喪失感に、だが攻撃は終わらせない。右、左、右、右、左――

刹那、ラプラスの目が別の方向に動いた。私以外の何かを注視した。落下中のはずなのに途方もなく長く感じる戦闘。その時間初めて、戦闘以外に視線がいった。

これは好機だ。

今しかない。

「……………ふっー」

私は隠していた転移門発生装置を起動させる。背後に小さなゲートが開き、それは私だけを取り込む。

即開閉を可能にした転移門装置はラプラスがそこを通過する前に消え、二人いたはずの戦場はラプラスを残して誰もいなくなった。

「……………」

その瞬間、孤立したラプラスの背後から私は現れる。時間も位置取りも、全て計算通り。

「……………！」

気づいたラプラス。だが転移門は一度潜ったものをワームホールへと連れて行く。

ゆえに気配を追って事前に接近を察知できたわけではない。

私が見れてから、コンマ何秒かの間隔。

それだけあれば十分だ。

私はガードしようとは構えるラプラスの腕を思い切り掴んだ。振りほどかれないよう、どれだけ反撃を受けても離さないよう気合を入れる。

ほぼ、抱きついた形。

瞬間、私の胸元のあるペンダントが光を放ち始めた。疑似太陽発生装置から作り上げた生物強化装置。クリスタルにそのエネルギーを貯蓄し、身体と融合させることで爆発的に身体能力を上げることができる。

対象が人間ほどの身体強度の持ち主ならばその力の圧力によって弾け飛ぶが、生憎と私は獣だ。その装置が与える力を存分に振るうことができた。

だが、それをもってしても届かなかった。

ならば、その力で私をラプラスとの戦闘で生き永らえさせてくれたこの相棒を私の操作により、爆発させる——

「死なばもろともだ……」

「っ、……お前……」

自爆。

それがラプラス・ダークネスを倒す唯一の手段だった。不意打ちがぎりぎり届く、ラプラスの甘さにつけこんだ最悪の一手。

普通の爆弾では数を積んでも彼女を取り逃がす。だが、疑似太陽を作れるようなエネルギー量を直撃させれば効果はある。

ラプラスの力が封印されているからこそ、この刃は届く。

「さくらばだ。ラプラス・ダークネス」

クリスタルが支えきれぬほどのエネルギーを蓄積し、ヒビが入る。一度壊れかけたそれは溢れ出す力の奔流によって完全に崩壊し――



研究者のほずの良子さんの強さは恐らく、外部的な作用によるものだ。恐らく強化装置。あの常軌を逸した戦いぶりとか何かに「動かされている」ような違和感。

こよが見てきたものでそれができるのは。

――あの、疑似太陽を作るエネルギーしかない。

だったら良子さんの真の奥の手は。

(エネルギー暴発による巻き添え……)

周りに何も無いような荒れ地を選んだのはそれを邪魔する手立てを封じる目論見。

「ルイルイ、お願いがあるの」

「ふふ……なあに？」

「全速力で飛びまわって、私の実験を手伝って！」

（意訳：死ぬほど働いて！）

「あ、はは……了解……」

ウルファイがどこかに捨てたであろうここに来るために使った転移門発動装置。もうエネルギー切れで動かないようにしているかもしれないけれど、こよが改造すれば少しの時間だけ開くことができるかもしれない。

そして良子さんの試作機を持ってこれれば、こよが前に作ったことのある物を再現できるとも思えない。

『博士……この漫画見ろ！殺せ○せーだけ殺せるレーザーだ！かつこよすぎだろ！博士これ作ってくれ！』

『ええ、どうしよつかなあ。あんなにでつかいののはこよ扱えないしね』

『あんなにでつかくなくていいから！小型でいいから！』

生物の身体を通過して、一切の傷を負わずに目標だけを破壊する光線銃を。

それでエネルギーを中和さえすれば、爆発は止まる。

「ルイルイ」

「はあ……はあ……はあ……ん？」

「手伝って」

（意識：休まないで）

「ひいつ……！」

ぐちゃぐちゃの理論と希望を奇跡みたいな偶然とルイルイまで利用して、なんとか固めて再現したライフルを空の二人に向けて構える。

だけど、こよの目じゃ狙いきれない。

だから、ルイルイの目を使う。

「右……いや、少し戻って……」

「うん……」

「よし、いいよー！」

「カラスちゃんお願い！」

カラスちゃんからラブちゃんに必要事項だけを伝える。聞いたラブちゃんは視線だけをこちらに向けてルイルイの目にそれを捉えさせる。

意思疎通はできた。

良子さんは自爆のために背後を取る。それは転移門発動装置でしかできない。思考を具現化したかのように今まさに姿を消し、ラブちゃんの背後から現れる良子さん――

「……………っだよー！」

全てを見通す鷹の目を信じて、こよは引き金を引いた。

いつか君と空を飛べたら⑥

一筋の閃光が私の身体を貫いて、私は全ての手札を失う。その瞬間、少女の手刀が首筋に当てられ、意識が刈り取られた。

夢を、見る。

『吾輩は独りでも問題ない……来るな、巻き添え食らうぞ』

『………?』

『何やってんだ……! 帰れって……!』

『独りは——』

『!』

『——独りは、寂しいよ?』

『っ………んだそれ………』

記憶の中を、漂う。



ここはどこだ。

「……………」

どうなった。

「……………」

どう、なつたんだ…………。

「…………づ、あ……………」

「目、覚めたか……………」

「…………っ」

暗闇に閉ざされた景色が微かに開けたとき、立っていたのはウルフィが求め続けた少女だった。あんなに湧き立っていた感情は臨死状態の身体によって薄れていく。

今まで何かに浮かされていたのだろうか、とウルフィはぼんやりと考えた。全ての悪事は覚えている。後悔もない。しかし、その時の情熱はどうしても燻っていく。

「ラプラス…………だーく、ね、す……………」

「…………吾輩の勝ちだ」

そう。全ては終わっていた。

「つ……そ、か……まけ、たか……」

「良子、さん……」

博衣こより。

ウルファイが謀った者がこちらを見ている。

それだけではない。五人全員が集まっていた。

あの数のゾンビを二人でいなした戦闘係。そして抜群のフォローができる幹部。それを従える総帥。

そして――

「おめーは博士に負けた」

「……そう、だな」

水面のように穏やかな心中で、ウルファイは思い出す。

転移門装置と試作透過砲を改造し、生物強化装置であるペンダントを中和、破壊。ウルファイがラプラスとの戦闘に夢中になっている間にもこよりは動き続けていた。

そしてそれをラプラスに伝え、ラプラスは気を失ったウルファイを静かに地面に寝かせた。

「これは病院です」

この子は皆を助けるために仲間と協力し、ウルファイを止めたのだ。

独りであるウルフィとは、全く違う。

「……………そ、れは…むりだな…」

そう。負けたのだ。

ウルフィの完敗だった。

「無理って……………」

「わたしの、からだは……………ぼろぼろだよ」

「……………それも実験の影響かよ」

ラプラスが問う。その通りだった。

人体に影響を及ぼす物質の研究。自身の身体を粉にして進めなければ試作機の完成すらあり得なかった。強化装置の副作用も合わせて、強靱な身体も限界だ。

細胞は日に日に腐敗し、崩れ落ち。それは広がり、生命を途絶えさせる時がもう近い。全開戦闘までして、今も会話できているのが奇跡。

「……………そう、なんですすね」

「ああ……………」

全てを察したこよりにウルフィは笑いかけた。ウルフィは殺されていてても文句は言えない。しかしそれをしてくれない彼女らに、ウルフィもまた甘えていた。

「……………ころさない、のか？」

「悪いが部下の望まない人殺しは御免だ」

「ふ、はは……あまく、なったね……」

「吾輩は前の吾輩をあんま覚えてないからな」

潰れるように笑うウルフィに、しかしラプラスは戦闘中のように笑みを浮かべることはない。

「きき、たい」

「なんだ」

「なぜ、……ふゆー、を、つかわなかった……」

浮遊魔法。

ラプラスはそれを使えるはずだった。高速移動はまだしも、落下していくウルフィを放っておくことだってできた。勝負は真正面から決めるものでもないのだ。

ではなぜ、何故か。

「それ使ったら、かつこよくねーじゃんか」

「っ！……はは……！」

——本当に、甘くなった。

聞きたいことを聞けて、全身から力が抜け始める。気力で持たせていた命の息吹は途絶え始める。元々鮮明ではない景色が、さらに暗澹のものになっていく。

もう、年貢の納め時だ。

「あまいな……」

「吾輩は、一人じゃねーからな」

「……!」

「吾輩ができないことは、こいつらができるから」

『吾輩だけで全部やる。だから独りでいい』

「仲間だからな」

『吾輩は独りでも問題ない』

「そうか……」

変わったのだ。

変わっていかなかったのは、ただの子供のままだったのは、ずっと、あの時からずっと

「——もう、い、つてくれ」

「……?」

「わたしは、ここに……いていいそんざいじゃない」

「……そうか」

「はは……さらばだ……ラプ、…いや…ほろつくす…」

ラプラスがウルフィに背を向けて、皆を集めて歩き出す。離れていく。遠く、何処かへ。

こよりは歩きながらもまだ、ウルフィの方を見つめていた。悲しい何かを見るように。諦めなければならぬ現実を噛みしめるように。

「じゃあな」

その視線は、ラプラスの魔法によって霞と消える。

最後の言葉は、もう誰のものか分からなかった。

「……………」

大空がウルフィを前にして広がっている。

気がする。

風が吹き抜けるのだけが分かる。五感はほとんど死んでいて、それ以外はモウロウとしている。

目の前にあるであろう空を自由に飛べたら、どれだけ気持ちいいのだろうか。全てなかったことにして、何も知らないままに飛び回れたら、どれだけ幸せなんだろうか。

——だが、それはできない。

それをする、ウルフィという存在は死ぬ。

なんの意義も持たないただの肉塊だ。
だが彼女らは違う。

飛べるはずだ。

何度でも。

傲慢なイカロスは、独りだけだから。

「あ……………」

息が、短くなる。

もうすぐ。

眠気のように、ゆっくりと――

「――いつか、きみ、と……………」

それを紡ぐことなく、ウルフィは世界からいなくなつた。



「博士、わりい」

結社に戻ってきた途端、ラブちゃんが謝った。

「え、ラブちゃんが……ラブちゃんが……！」

「どーゆー反応だそれ」

結構レアな光景を目の当たりにして、こよはしばらく口を開けっ放しにしてしまった。危ない危ない。

絶好のイジリポイントなんだから。

「……悪いって、なにが……？」

「うっ……」

「言われないと、分からないな〜」

「ぐぎいいあああ………」

「ふふっ」

羞恥か、頭を抱えて悶えるラブちゃんの可愛さにこよは口元を緩ませる。

「その……すぐ行けなかったしい？」

「うん」

「あぶねーやつと関わってもらっちゃったしい？」

「うん」

「最後は頼ったから、な」

「うん、そうだね……」

可愛いラブちゃんの反省を見ながら、思う。

あの人にどんな悲惨な過去があつたのか。

こよはそれを知らない。というかホロックスメンバーは皆知らない。全てを知るのもあの人で、全てを仕掛けたのもあの人で、終わらせようとしたのもあの人。

微笑したり、冷酷に見下ろしたり、ニヤリと微笑んだり、弱々しく笑みだけを浮かべたり。

少しの間でも近くにいたのに、こよには分からなかった。

「……悲しいね」

「ん？」

でも、敵と思いきれる人じゃなかった。

「……あれで、終わりって」

「……ああ、そうかもな」

察したラブちゃんは口を閉じる。

でもそれは少しの間だけだった。

「吾輩は、独りじゃないぞ」

胸がむず痒くなるような台詞を、溢す。

「そんなの分かつてるよ」

「ん」

そう。ラブちゃんにも、あの人にも、私にもルイルイにも、いろはちゃんにもクロたんに、過去はある。

ラブちゃんは記憶をあやふやにされているけれど、過去はちゃんと抱き締めて背負っている。あの人との戦いにノツたことだってそうだ。

不満を漏らすことはなかった。

だからいい。

特別な理由なんてない。

こよが信じる、皆を信じればいい。

「今日はラブちゃんがご飯当番ね」

「ほえ?……はあーっ!?!」

皆といるのが、楽しいから。

【本当に秘密結社ですか!?!】 設定集

「本当に秘密結社ですか!?!」シリーズを読んでいただきありがとうございます。

当初の目標（ここまでやりたい的なお話）であったバイト編までが一段落したということ、ここら辺で一休みを兼ねて細かい設定の紹介をしていこうかなと思う次第でございます。

前書きにて既に言及しておりますが、本編だけ読みたいという方はブラウザバックを推奨します。



【ラプラス・ダークネス】

秘密結社総帥。本作の裏ヒロイン。元の彼女にけだるげな雰囲気を少し含ませると本作の彼女のようになるかもしれない。本作では起きるのが遅いときがあったり、少しものぐさだったりとマイペースが目立ちますが、元の彼女は先輩のホロメンに行儀がよく、丁寧だと言われることが多く、普通に早く寝るし早く起きてるみたいです。しか

し最近では昼夜逆転気味な様子。やればできる子タイプかなと思っっています。本作での魔法のレパートリーは私にも謎ですが、とりあえず転移魔法と浮遊魔法は多用します。

「来るときに備えよ」

ラブ様の配信終了時の挨拶。本作では、ホロライブ加入前から好んで使っているという設定です。配信では適当になっていくぐだぐだ加減は必聴ですよ。主のお気に入り「来るときに備えやがれてんだ」なのでそれも本作に。果たして今は使われて……。

「コーラ」

ラブ様がよく飲んでいる炭酸飲料。缶のものをよく飲んでいる様子。缶はプルタブを一度開けてしまうと塞ぐ術が無く、放置していると甘い香りにつられて黒いヤツがやってくるのでご用心です。飲み過ぎもご用心ですよ。

「食べ方が綺麗だと言われる↓食べ方を汚くする」

【ホロ新春おせち会】より。綺麗と言われると汚くしようとするラブ様。本作ではいろはさんの作ったうどんを食べていました。

「パロディ」

ラブ様が配信中にねじ込むネタ。元ネタが分からないと話についていけなくなりますが、そうなった場合はラブ様から笑いながらの注釈が入るので安心です。本作では伏

セ字があるものを含めて様々なパロディネタがあり、調べると分かるようにはしてあるはずなので、気になった台詞や文章は調べてみてください。

「ラブラスの魔」

日本でのラブ様の呼び方ですね。

「4歳のころハーバード大学。即辞める。三年間違う親に育てられる。その親がいる組織を潰す。生まれた星が消滅して地球に来る。地球とマブダチになる。」

ラブ様が投稿した動画内容から抜粋。本当かどうかは分からないですが、どうやらハーバード大学を辞めたのは校舎内でギャルとバイクを乗り回したことが原因らしいです。

「ヴァ○ラント」

ラブ様がよくやるFPSゲーム。負け続けたり異様に上手い手でキルされたりすると奇声をあげます。ナイフでラーメンと壁に書けるといふ器用な面もあり、限界を突破するとラブラス語を喋るようになるという可愛い一面も。イライラしないように「気持ちええー!」という言葉を使うことがあります。

「アイドル好き」

たびたび限界化しています。案件のやり方がガチなことからもどれだけ好きなのか伺えますね。たまに推しに対してポエムるのでスクショしてコピペして送ってあげま

しょう。ソシヤゲで推しが出ないと問いかけてしまいますので後で当てられたか聞いてあげましょう。

「トワ様ガチ恋勢疑惑」

真実です。自身の3Dお披露目で手を繋いだり、トワ様の誕生日配信で一緒に歌を歌うなどのガチぶりをご披露いただいております。本作ではホロライブ加入前からトワ様のことが好きな描写があるのに他のホロライブメンバーのことを話さない（知らない？）という若干の設定崩壊があります。以後それが顕著になるかもしれません。どうかお見逃しくくださいませ。

「カラス」

ラブ様の上に乗るカラス。本作ではよく鳴き、ラブ様を飛んで運んだりしてましたがその速度はひどく遅いという設定です。鳴き声はラブ様なら細かい意図まで分かるはずなんです、他のh o l o o Xメンバーにとってはカタコトで聞こえるみたいです。



【鷹嶺ルイ】

秘密結社幹部。本作の彼女はほぼ元の彼女通りのはずです違ったらすみません。本

作ではバイトをいくつか掛け持ちしてh o o l o o Xの赤字を回避している苦勞人さんです。ホロぐらでは家計簿ソフトを用いて管理をし、状況によっては詐欺る悪人ムーブをかましていました。それもこれも全て総帥のせいです。苦勞具合は本作の番外編「吾輩は戦艦が欲しいのだ！」にて伺えるようになっております。本作では魔法は使えない設定のほずです。インターンの勧誘は彼女が行っていますが、それ以前にラブ様のセンサーに反応しない人は選ばないので、勧誘といつてもそんなにはやっていません。空を飛ばせばh o o l o o Xナンバーワンです。私がギャグセンス無し人間なので、本作ではダジャレは抑えめにしてあります。

「怒らせると怖い」

ぎりぎりのところで秘密結社を守り通す幹部の圧は6期生の誰よりも強く、怖いので困ります。よくラブ様が怒られているので必見。コラボ配信、切り抜きなどでそんな一幕が見れます。

「鷹の目」

本作では主に望遠や暗視に使われるルイさんの目。黒○のバスケやア○アシのように広い範囲を俯瞰できる能力も一応あると思うのですが本作ではあまり使われないかなと思います。鋭く金色に光るのがイケメンポイント。

「がんも」

ルイさんの相棒。仕事に追われるルイさんの代わりに書類を片付けることもしばしば。お酒好き。仕事の時以外は日中は寝ていて、夕方になると晩酌の準備を始めちゃいます。ご本人談によると喉が酒焼けしているとか。



【博衣こより】

秘密結社博士。h o o Xの頭脳。彼女も元とあまり変わりません。本作では博士という役割の他に、発明や鍛冶、機械関係の知識があるという設定のため、最低限の道具で改造から実験までこなす凄い子だというエピソードが出来てしまいました。その影響で沙花叉の得物であるアイアンクローとシャチのマスクはこよりさんが作ったことになってます。配信の方ではよく多方面にピンクココロの力を発揮していますが、本作ではスキップくらいしかしてないんじゃないでしょうか。出番があまりなくてすみません。もう少し増やしていけたらなと思っております。研究されるよりはしたい派らしいです。「こよの十戒」という用語やSNS凍結キャンペーン、「アーカイブを倍速で消化していたらその間に配信が二回分増えていた」というエピソードは有名です。

「ベンゼン環」

アクセサリー。ベンゼン環自体は6つの炭素原子が正六角形を形作ったものです。主に薬剤などで見受けられるのでどうぞ探してみてくださいませ。

「ココロちゃん」

こよりさんと一緒にいる小型のロボットココロちゃん。本作では未登場ですが、「バイトしようぜ!編」の分岐である「いつか君と空を飛べたら」の後日にこよりさんのお供として作り出された設定です。しかし「風真の里編」ではお留守番。「こよりハザード編」にて重要な役割を果たしていただきました。



【風真いろは】

秘密結社用心棒。本作のメインヒロイン。つよつよ。ケモミミ大好きっ子。性格的な面は元の方と本作で大して変わりありません。本作では沙花叉に好意を向けられるも決定的な想いが伝わっていないためいろはさんにとっては沙花叉はスキンシップが多いという印象しかない感じですが。チャキ丸さんは里の鍛冶師が鍛錬した設定。業物。本作ではいろはさん独自の剣技が出てきますが、本作中では言及はしません。あくまで

出てくる技名と描写のみで補完していただきたいです。

「DX日〇万」

チャキ丸さんのこと。一体何をしたというんだ……。

「ぼっちーでいける」

世の紳士たち（と沙花叉）を喜ばせるいろはさんの正直罵倒。本作では風呂に入らない沙花叉が近寄つてくると自動的に口から迸ります。そして沙花叉は興奮して悶え、そしていろはさんはドン引きするまでがワンセットです。

いろはさんは度々故意に視聴者の心を破壊してくるギャップが堪らなく愛おしいですね。主のお気に入りは怪文書ニキが襲来した際の「何があつてもペえ」という罵倒。いろはさんでなければasmrこよりさんの「気持ち悪い」なども必聴ですよ。

「ぼいんえ」

いろはさんのお供。のんびり口調にまるっこいボディ。癒やしを体現するたぬきちやんです。私の推しの一匹。いろはさんの食料兼方向音痴対策員。本作ではお酒に弱く、白湯を好んで飲むという設定にしています。



【沙花叉クロエ】

秘密結社新人の掃除屋。本作のメインヒロイン Part 2、本作では主にいろいろに対する好意と執着と変態度が増していたり、戦闘設定としてシャチの超音波機能が付け加えたりといろいろ上方修正(?)されています。お風呂嫌い。掃除(敵の)が趣味です。

インターンとして h o o l o x に加入するエピソードを書くにあたって、お金持ちの家育ちであつたり、少しコミュニケーション不足な点を付け加えました。しかし実際海外留学に行かされたりと、配信で聞けるエピソードからそんな面が伺えたりしているような気がしてくるのは気の所為でしょうか。

本作でのいろはさんに対しての好意は本物で、アプローチを繰り返しては稀にあるいろはさんからの不意打ちカウンターに鼻血を出しながら悶絶しています。たまに反撃しているいろはさんの思考を乱していたりもします。

沙花又自体は推しに対しては限界化を超えて真顔で好意を伝え続けるやばい人ですが、本作では抑えめです。

「アイアンクローとシャチマスク」

沙花叉の得物。こよりさんが作ったという設定。錆びにくい鋼を使っていて切れ味も申し分無いです。シャチマスクは身バレ防止とモチベ上昇に繋がっています。本作

ではクロウとクローの二種類の呼称を使っていてややこしいですが、どちらでも問題はないと思うので、適当に呼んでいきましょう。はい、すみません。本作ではできる限り統一することにします。

「超音波」

索敵、麻痺付与が可能。ほぼチートのような力ですね。

「シオン先輩ガチ勢」

それが真実。ホロライブ公式チャンネルでの「夏バテに効く情報持ってきました」にて限界化している様子が凄く顕著に見られるのが可愛いのでアーカイブでは是非。

「ルイ姉さんガチ勢」

本作ではいろはさんに変更されています。全国のクロルイ好きの皆様すみません。

「殺陣」

敏捷性が売りです。動きや速度に緩急をつけて相手に自身の攻撃を慣らさない独特な殺り方ですね。これと超音波を駆使して闇討ちされたらまず生きて帰れないと思います。



・粕菜良子（ウルファイ）

いつの間にかh o o r o Xメンバーを前にたった一人で戦おうとしちゃってた無謀なお方。本作最初の敵ネームドです。恐らく本作唯一の座も勝ち取ることになるかもしれないですが、もしかしたらまた別のネームドが出ちやうかもしれません。しかし天下は目の前。モチーフは狼でコヨーテのこよりさん繋がりですが、敵になる経緯に関与しているのはラブ様です。

◇◆◇時系列など◆◆◇

ホロライブ加入前のお話。沙花又が入社するところからホロライブ加入前までを執筆予定です。入社順はラブ様、ルイさん、こよりさん、いろはさん、沙花又。結社の場所は比較長閑なところ。バーチャル東京ではないです。

◇◆◇裏話◆◆◇

「沙花又クロエ編について」

この子、絶対にこんな気弱じゃないだろと執筆段階で時系列からなにから全て変更した結果の、物語冒頭が加入前という設定。一番最初なので書きたかったものが一番詰まっています。

悪役の設定的にはもつと外道な候補もあったのですが、それだとただの踏み台にしかならないので全却下し、ある意味正義ともとれるような要素を含められるように頑張りました。

沙花又にとつては総帥とルイさんとの出会いが人生の分岐点であり、その際にかけてくれた言葉（特にルイさん）の温かさを知っているので、実験対象の男の子に声をかけるところで沙花又はその時のことを思い浮かべていました。なので作中でもそこは男の子視点にして、1話の沙花又視点に寄せています。台詞とかも似通っているかと。

個人的なお気に入りシーンは最後の総帥とのプロレスシーンとこよりさんが参加するシーンです。

「ラブ様の大冒険編について」

「ミルクティーを飲んでる姿見たい！」という馬鹿みたいな欲望から生まれた本作。少女との出会いなどが書いている私にも予想外で、なし崩し的に少女の悩みに付き合う総帥の優しさが良い……。作中で総帥が中華おこわを食べているシーンがありますが、その話を投稿した後「あれ、ラブ様つて魚介か貝類かなんか苦手じゃなかったっけ。あれ……？」と思いつながら帆立の存在を急いで抹消したなんて秘話があります。

女の子は後にリスナーとなつている姿をおまけで書いたりなどしてとても愛着が湧いたキャラなのですが、子どもにとって、親に振り向いて欲しいって悩みは凄く普遍的

なもので、凄く苦勞する部分だろうなと書いているうちに強く思いました。大人になると軽く謝れないのも辛いですね。

お気に入りには女の子が中二病で総帥をいじるシーン。本当にそんな力がある総帥と地球に住んでいる女の子のギャップが見えて、お陰で総帥の素の反応を引き出せた気がします。

「風真と沙花又編について」

ほとんど脳死で書きました。指が動く動く。空回りしている感じが出ていて両者ともとても可愛かったです。それを各々サポートするメンバーにほっこりさせていただきました。一生空回りしてるところを書きたいんですけど、成長はさせなければいけないのでこういうお話はもうあまり書けないんだらうなあと思ったり。

【番外編】 吾輩は戦艦が欲しいのだ！

「吾輩も戦艦ハル〇ード乗りてえー!!」

ああこれだ。最近カー〇イにハマリ始めたと思つたらこれだ。〇ルバードなんか造れないのに。

と総帥の無茶振りを苦笑いで聞きながら、秘密結社h〇ooXの女幹部、別名「ほぼ雑用」の私は内心ため息をついた。

自由奔放が過ぎるこの最高意思決定機関(人)は何かと無茶振りをする。最近だと「掃除めんどくせー」とか「吾輩ご飯食べたい」といった可愛い我儘じゃ飽き足らず、

『なー幹部ー、吾輩専用の全身洗濯機作らね?』

とか、

『そろそろ東京乗っ取るぞ!』

とかの無茶無謀の押し付けを私にするようになった。

私も言いたい。

『ラブ、まずは総帥自ら赤字生むのなんとかしよ?ラブが無駄遣いしてたらいつまで

経つても洗濯機は造れないし、東京どころか埼玉すら乗っ取れないよ?」

って言うってやりたい。

しかしそれを言うところの総帥はぶくぶく頬を膨らませて逆ギレするか、都合の悪い顔をしてすたこらさつさと逃げることしかないから厄介だ。

「はあ……、なんでハルバー〇?」

だから、いつも通り聞いてみた。

「だってあの戦艦のフォルムめっちゃかつこよくないか!？」

いや確かにそうなんだけどね。

「あの船頭のメタナ〇トの顔を吾輩のやつにしたい」

「うーん……それはやめたほうが……」

「あれ、そうか?……ならとにかくハ〇バードみたいな戦艦が欲しいんだ!」

「でもさ、あれだよ?……ハルバ〇ド、絶対に沈んじやうんだよ?」

「それがかつこいいんだ!……沈いじやんか!」

沈めるんかい!

お金かけて戦艦造ったとして結局沈めちゃうんかい!

私泣くよ!!

泣いちゃうよ!?

「うーん……ダメ」

「えーいいじゃんか幹部うー！」

ダメです。それをやったらh o o xは解散になっちゃいます。というかその前に胃が引き絞られて私は倒れます。病院には連れてかないでね。入院費嵩むから。

「すぐ壊しちゃうものにお金かけられないよ」

「ハルバー○……欲しい……」

「ぶーたれてもダメ」

「……!!!……幹部のバカ！」

「はーいはい」

もう知らん！

そう言つてトテトテと幹部室を出ていくラブに私は二度目のため息をつく。

「あれルイルイ、ラブちゃんどうしたの？」

すると、恐らくラブとすれ違いで幹部室に入ってきたであろうこよりが私の前で首を傾けた。ベンゼン環の髪留めがカチャ、と僅かに存在を主張する。

この時間差なら普通にラブの吾輩怒ってるぞムーブを目にしたんだろう。

「ラブがさ、戦艦ハルバー○が欲しいんだって」

「あ、なーるほど……」

心中お察しいたします。という風に苦笑いを見せるこより。ラブの独断指示をのりくらりと躲して私を援護してくれる貴重な存在だけど、この子も時々悪魔みたいな実験しちゃうことがある。

ふわつと可愛いピンク色の髪とケモ耳と、人当たりが良さそうな明るく活発な表情。白く眩しい衣を着こなす姿。

そんなのに気を抜いていると、いつの間にか大変なことになっているのだ。

「ラブちゃん今度はカー〇イにハマったんだ。いいねえ〜」

「いいねじゃないよ……無茶振りは困るって」

「まあ、そこがラブちゃんの可愛いとこだしさ」

「うーん、そうなんだけど……」

「あはは、管理職は大変だ」

「手伝う?」

「やめときまーす」

今の。向き合って「手伝う?」の「手——」に差し掛かる前くらいには拒否されていた気がする。即答ってさ……。

手伝ってよ……

「大丈夫だよルイルイ」

「……………ん？」

「お手伝いならもうすぐ来るって」

「……………んえ、どういうこと？」

自分の腕枕に項垂れる私に、こよりはそれだけ言つて、

「あ、ちなみにこれ来月の予算ね♡」

「づ……………」

悩みの種を増やして帰つていった。



「吾輩そろそろ戦艦くらい欲しい……………」

「なにしょぼくれてるでござるか？」

「ん？……………なんだ侍か」

吾輩が結社内の螺旋階段で体育座りでしょんぼりかましてると侍が声をかけてきた。

「こいつはいつもこうだ。ポンコツなのにたまたま妹みたいに吾輩のこと扱う。」

……………ま、悪い気しねーけど。

「新人はどうした」

「お掃除中でごさるな」

「置いてきたんけ」

「床に散った血で風真にラブレター書くって言い出したから放ってきたでござる」

「……相変わらずだなあいつ」

「まあそれは置いといて……何があつたんでござるか?」

侍は吾輩の隣に正座しながら問いかける。階段なのによく正座できんな。吾輩絶対無理。

「戦艦ハル〇ードを巡って幹部と熾烈な戦いをだな——」

「——あ、なんとなく分かったからもういいでござるよ」

「おいなんでだよ!」

最後まで言わせろよ!

「……いつもいつもルイ姉に無茶言つて……ルイ姉もそろそろ胃に穴が開くでござるよ」

「ふん、……吾輩知らーん」

「こういうときだけ子供のフリするんじゃないでござる」

「戦艦くらいいいじゃん!」

「戦艦の建造費知ってるでござるか?」

「知らない」

「ラブ殿……」

あはは……と言いながらも侍は目に涙を滲ませている。それは吾輩の無知に対してか、吾輩の案が通らないことに対してか、どっちだ。

「ルイ姉への同情の涙でござるよ」

「金寄越せ」

「クズでござるな」

「真に受けんなって！」

「冗談でござるよ」

「このやろー」

吾輩は苦々しい顔で侍を見る。こいつの冗談は冗談に聞こえないんだ。たまにマジな時あるし。

そんな吾輩の警戒を知ってか知らずか、そんなくだらないことなら、と侍は腰を上げて

「プーたれてないで、ちゃんとして謝っておくんでござるよ？」

「……………へん」

「ふふ……………素直じゃないでござるな」

そう言つて何処かへ行つちまった。

なんとなくいたたまれない気分になつて、足音を限界まで小さくしながら幹部室へと向かう。でも別に謝るとかじゃないし。

「ゲーム機取り来ただけだし」

言いながら自動開場扉をわざわざ手で静かに開けて入る。「言いながら」↑ここ大事な。

「ん……………」

この時間だとまだ幹部は仕事をしているはずだけど、返事もため息もない。そんな怒ってるのかよ。幹部は怒らせたら怖いんだ。

吾輩はうげーつとなつてから恐る恐る幹部室のデスクを覗いてみた。

「……………うおつ……………」

幹部は寝てた。デスクに突つ伏してスースーと寝息たてとる。

「そんなに忙しいんか……………」

いつもはニコニコ笑いながらもぱぱっと仕事を終わらせている幹部なのにこういう

のは本当に珍しい。しかも顔色が案外悪い。

「……………」

今回はやめといたほうがよかつたかな。

そう思いながら吾輩はなんとなく幹部に潰されてる仕事関連の書類をもぎとつて目を通す。

「ん……？……………ん!？」

戦艦の設計図と建造費の詳細データ？まさか幹部はマジにハルロード作ろうとして、それで仕事が増えて疲れてんのか。

てかこれあれじゃねーかよ。ヒロインか主人公が勉強できなくて頭めっちゃ良いほうが勉強教えるけど最初は「なんで解けないんだ問題」に引っかかって勉強できない方がドタバタ逃げ出して後から申し訳なく思つて戻つてみたら分かりやすいようにノートとか作った形跡残しながら眠りこけてるヒロインor主人公を見て「勉強頑張ろう」つてなるエピソードじゃねーか。

いやなげーよ。吾輩息続かんで。

「なんつーベタな展開だ……………」

あーゆーの読んでた時は勉強できない方にしつかりしろとか思つてたけど、吾輩がそうなると思わんかった。ラブコメつてよく出来てんだな。

「んー……」

吾輩がいるとも知らずもそもそする幹部。

漫画みたいに呑気なもんだとは、さすがに言えん。

「こういうエピソードの締め方って、やっぱあれだよな」

吾輩は眠ったままの幹部に睡眠を深くする魔法をちよちよとかけて、お姫様抱っこでベッドに運んだ。

寝てろ幹部。



目が覚めて気づいた。私は寝ていたのか。

そして一気に血の気が引いた。

「あ、しびれと……」

どうしよう。戦艦関係の資料を漁っていたところから記憶がない。こよに貰った予算とかで収支の計算してあまりに大きすぎる費用はカットしなきゃならなくて、他にも書類とかアルバイトとか――

「ひいっ……」

やらなきや!

そう起き上がった時だった。

「……………あれ」

私、ベッドで寝てたっけ。確か仕事はデスクでしてたはずだから、居眠りしちゃってたならデスクにいるはずなんだけど。

「ん……?」

まさか自分でベッドに入って寝たの?

仕事を全部終わらせて?

「いやいやいや」

そんな短時間で終わる仕事群じゃなかったはず。

「な、なんで……………あ、いや今そんなこといいや!」

今は頭にハテナマークを浮かべてる場合じゃない。早く仕事部屋に戻って——

『——おい博士え、これなんだ?』

『ラブちゃんそれは今関係ない資料だよ』

『ラブ殿、遊んでないでこっち手伝ってほしいでござる』

『おい侍!遊んでるとかゆるなよ。吾輩一生懸命やつてるだろが』

『今だけは時間が惜しいんでござるって!』

——寝室を出ようと手をかけたドアノブ。仕事部屋に繋がる閉ざされたドアの向こうで、知っている声が飛び交っていた。

「……う……これって……」

間違いない。ラプとこよ、それにいろはだ。
なんで仕事部屋にいるんだ。

『ラプちゃん、それ終わったらこつちもね〜』

『きびきび働くでござるよ』

『くっそー！こんなことなら新人をバイトの方に駆り出さずにこつち回すんだったー』

！』

『こつちの方がずっと忙しいでござるな』

『まあルイレイのお仕事だからね〜』

「——あ、」

もしかして——

私は驚きと一緒にやっつとドアを開けた。

「……ん？、おっ、幹部おはよー」

「ルイルイおっはよー！」

「よく寝れたでござるか？」

私を見つけるやいなやニパツと満開の笑顔を咲かせるいろは。ひらひらと手を振る
よ。

——こつちを向かずに資料に真剣に目を通しながらも眩くラブ。

『ふあ、あ……………』

『あ、ラブおはよう』

『んー、かんぶ、おはよ……………』

いつも言い出す側だった。

いつも待つ方だった。

いつも先に起きていて、ラブが寝ぼけたままふらつと入ってくるのを見ていただけ
だった。

「……………」

今日は、逆だ。

「ちくつしよー、幹部が起きる前に終わらせるつもりだったのに」

「最初に全部一人でやろうとして、できなくて一時間くらい悪戦苦闘しちゃったせい

だね〜」

「ぐっ、……」

「そのくせギャンギャン泣きながら風真とこよちゃんに『やばいどうしよ侍！終わんないよ、仕事終わんないんだよお……！』とかって頼ってきたでござるよな」

「なにもゆるいな侍！恥ずいだろが！」

顔を赤らめてラプがやつとこつちを向く。バツが悪そうに口を尖らせて、ちよつと俯いて。

「ほらあれだ。戦艦はひとまずほりゆーだな……それと、洗濯とか、適当にぶちこんどいたから……その、掃除とかもな。……感謝しろ感謝……」

「ラプ……」

「その、あれだ。……ごめん」

私は嬉しいんだか悲しいんだか分からない。でも、悪い気分じゃなかった。どうしようもない妹が、どうしようもなく可愛くて、胸がいつぱいになる。

こよというはがやれやれ、という風に微笑んでいた。私はもう耐えきれなくなつて、この面倒くさい総帥に言った。

「ありがと、ラプ……おはよう」



「ああ！」

「ん、どした幹部」

「色移ってる!!…折角のおしやれ着……」

「あ……お、あ、そ、そりやあな、難儀だなあ幹部……」

「ラブ……」

「へ……?お、おい泣くなよ!ごめんって!!」

秘密結社hooOXの女幹部。

受難は尽きない。

風真の里へレッツゴー!

風真の里へレッツゴー!

「幹部! お風呂をもっとでつかくするぞ!」

「……ん?」

秘密結社hooXの総帥にして問題児のラブ。の発言にしては妙に「かわいい」我儘が私の前で始まっていた。

『全自動吾輩洗濯機作ろーぜ幹部うー!』

とか

『幹部! 吾輩、戦艦ハル〇ード欲しい!』

とか言い出しちゃうこの子にしては本当にリーズナブルなお願いかもしれない。

いやそんな、いきなりお風呂(多分湯船)を大きくできないし、お湯引いてこないといけないし、水道代が勿体ないし、どうせ三日坊主だしっていうダメダメポイントはあ
るけれど、1から戦艦造れっていうよりはマシなんです。ほんとに。
「いきなりだねラブ。どうして?」

「吾輩最近働きすぎで疲れた」

「おいお前表出ろや」

「んえ？なんか言ったか？」

「あ、ううんなんでもない。働いたって……この前の？」

「そうそう。あれあれ」

そう。私達はこの間、緊急事態のために戦闘行動をとったばかりだ。特にラブは親玉とやり合っている。……メイド服のままだ。

「結局バイトもちゃんと一ヶ月やったしな」

あの腹黒メイドはお仲間さんにいじめを告発されていなくなってたけどな、と溢すラブ。

「確かに。ラブにしては珍しいね」

「吾輩には疲れが溜まったということなんだ」

「バイト終わってからも一ヶ月経ってるんだけどなあ」

「いいじゃんかよ幹部う」

——まったくどんな発想なんだか。

私はラブを見ながらつくづくそう思う。

疲れた↓お風呂入りたい↓幹部お風呂洗ってくれならまだ分かる。

ラブは、疲れた↓お風呂↓ん？待てよ……どうせならでつけー風呂でウハウハしたく

ね!? ↓幹部お風呂でつかくして!としてくるのが本当に厄介だ。

けれど、そういうお願いならば簡単な躲し方を知っている。

「お風呂がでつかければいいの?」

「おう!」

「そつか………なら、銭湯はどう?」

——銭湯。それは人間にとつての楽園。

身体をしつかりと温め、疲れを癒やすお風呂という概念を外さず、様々なアミューズメントを取り入れた最強の場所。

銭湯なら湯船も大きい。質が良い分決して大きくはない温泉よりはコスパが良い。

よし。戦闘(せんとう)の疲れを銭湯(せんとう)で洗い流すんだ!

これで………勝った!

「銭湯ってあんま風呂でつかくはないじゃん」

「ああ、とっておきのが……」

「何変なこと言ってるんだよ」

私の提案にラブが待ったを掛けてしまった。

これはもしかして……長くなるやつ?

「それに銭湯は人多いじゃんか〜」

「ええ、そこ……?」

「そこだろ! 吾輩静かで大きくて気持ちいい風呂がいい!」

今回こだわるポイントはそこか……

たしかにあの時ラブは頑張った。科学者の人と戦って時間も稼いだし、バイトも逃げずに行つたし、残りのバイトの期間も認識阻害使つてくれたし。

人が全くないってことは秘湯になるけど、ラブが望むほど大きいものなんてあるわけないし……。

「吾輩あれがいいぞ。源泉かけ流し」

心のなかで呻いているうちにラブが追撃する。聞きたくない言葉をくらつてしまった。

「う……どこでそんな言葉を……」

「吾輩にだつて銭湯と温泉の違いくらい分かる……吾輩の興味を銭湯に惹いたつてダメだ。ここに湯引くぞ!」

「お願いラブ。それは勘弁して……!」

「ねえねえラブ殿、ルイ姉」

「ふっはっは!……よし幹部。始めるぞ」

「やめてえ……許可が……お金があ……!」

「おーい、ラブ殿く、ルイ姉く?」

「よっし、博士も呼んでくるか!」

「ラブー!!」

「——ラブ殿!ルイ姉!」

「!?」

背後で発された大きな声に、やり取りしていたラブと私は肩をビクツとさせる。振り向けばそこにはいろはがいた。

「っわー、びっくりした……」

「お、おい侍、いきなりなんだよ」

「いきなりじゃないでござるよっ!……ずっと呼んでたでござる!」

いろはは真つ赤に染まった顔と、ぷりぷり膨らませた頬を私達の前に晒しながら言う。相変わらず淡い色の可愛いポニテがふわふわ揺れている。

「あ、ああ……わり、気づかんかったわ」

「ごめんいろは……」

「もう……一体何を揉めてたんでござるか?」

首を傾げていろはは私に聞いた。ラブが「吾輩にも聞けや」と眉をひそめるも半ば無

視。

イジられが定着してる。

「なんでもないなんでもない！……ラブがまたギャーギャー言ってるだけだから」

「おい幹部」

「ラブ殿……まーたもぎやってるでござるか」

「もぎやるってゆーな」

もぎやるってなんだ。

「そんなことより……いろはこそどうしたの？」

「え、風真でござるか？」

「そーだぞ侍、いきなりどうしたんだよ」

「……まいつか、……あのでござるな——」

「うん」

「——お暇をいただきたいんでござる……」

「……………」

「……………」



「お暇だと……?」

「コホン……吾輩に至らぬ点があつたなら言ってみろ」

「どの口が言つてるんでござるか」

「ほんただよ」

「ぐっ……」

まったく、冗談の通じない侍だ。

「お暇をくれ」つていうのはまあ簡単に言えば「離婚してくれ」つてことだな。まあ今の状況に即して言い換えるなら「秘密結社辞めるでござる!」が妥当か。

「まあ、さすがに言葉の綾でござる」

「んなの分かつとるわ。さっさと本編入れ本編」

「ラブ、もうちよつと余韻大事にしようよ」

「実は——」

どうやら侍は里帰りをしたいそうだな。なんでも親に帰つておいでと言われたらしく、侍の親はあんまそういうことを言わんこともあつて決めたらしい。

「里帰りかあ」

「ルイルイには申し訳ないでござるが……」

「ううん、全然大丈夫だよ」

「吾輩に聞かぬーんかよ」

「え、問題ないでござるよな?」

「まー、のーぷろぶれむですけど?」

侍がこうやって頼みに来るのもあんなに気がするからな。とりあえずオツケーしとくか。

「つてか、そういえば侍の里つて何処にあんだよ」

「秘境でござるよ。ずーつと遠くでござる」

ぴーんと指差して侍は言う。

「そういえばこよとクロエのは近くまで行ったことあるけど、いろはのはないなあ」

「こいつ出会つて即入社だったしな……それにしても、秘境ねえ」

「緑が多くて良いところだござるよ」

「そうはいつでも緑だけだろ?」

「むむ、自慢じゃないでござるが里の皆が頑張つて作ってきた里なんでござるよ!」

「へん。そんなこと言つたつて——」

——と、言い切る間際。吾輩は黒色を背景に一筋の線が頭をピシユンと通り抜けるような感覚に襲われた。それは最早名探偵コロン。そういえば今年も面白かったな。

「……………侍」

「ん、なんでござるか?」

「……………侍の里つて、超でっかい風呂、ある?」

「んー、山中近くにある里だから秘湯は山ほどあるでござるな。多分その中にあり得ないほど大きいのが——」

「よし侍!……………それは、源泉かけ流しか?」

「え、なんでござるかその庄」

「いいからいいから……………」

「……………ここまで言うとは幹部も察したらしい。何故か目を輝かせながら吾輩に合わせていろはを見つめる。」

「……………普通にみんなそうでござるよ」

吾輩と、特に幹部の顔がパツと明るくなった。

「……………それだあツツツ!!!」

風真の里へレッツゴー！②

「いろはが帰ってくることにしたそうだ」

「あら、ほんと？」

「帰ってくるって……姉上、ここまで帰ってこれるのかな」

山中を駆ける三つの影が言葉を交わす。普段の修練時はあまり余計な話をしないその一家は、それにしても浮き立った様子で一家の長女の帰省を心待ちにしていた。

だがその脚は遅しく、景色はぐいぐいと強引に引っ張られるように変化する。

「ふっ……」

忍ばせた吐息で体内管理を行いながら、舗装されていない山中をパルクールの選手のように踏破していく。

「「方向音痴気味だからなあ……」」

息のあつた連携をとりながらのそのモノローグは、完璧な重なり、ハーモニーをもつて総意としていた。



「博士え、飛んでいこうぜ……?」

「だめだよラブちゃん」

「ラブさ、もう結社を秘密にしようとしてないよね」

カタンカタン。

各駅電車は永遠に停車と徐行のような速度の走行を続ける。この路線に乗り換える前は急行やらなんやらですぐ降りたりすぐ乗ったりできたのに、もうかれこれ二時間以上このままだ。

そして人がいない。

「つまらないぞー、さむらい、いつ着くんだけー」

「堪え性がないでござるな。あとちよつとでござるから」

「ふう……」

窓から外を眺めるも見えるのは農業にスタータスを振り切った長閑で晴れやかな景色。

ラブも最初はそのシンプルな美しさに目を離さなかったが、長い時間対して柔らかくもない椅子に振動付きで座っていれば飽きるしお尻も痛くなる。

まるで使えないマツサージチェアとは、ラブラスの言だ。

「んー……」

「ラブちゃんふあいとっ！」

こよりに励まされるもその膝に突っ伏して呻くラブ。

「うう……」

「クロエはこつち寄りかかりすぎ」

「だつてえ……」

こつちはこつちで、乗り物酔いにうなされるクロエが私の方に頭を預けてくる。こういう時こそいろはに甘えればいいのに本人はそういう考えはない。

『しんじーん、おきてー、ねーおきてー』

『ん、え……』

『おきてー、おきておきてー』

『あも、うん、……うるさいなあ……』

まあでも、仕事明けで寝入ってるクロエを無理矢理連れてきちゃったのが悪いか。でもいろはの里だし、連れて行かなかつたらそれはそれで——

『なんでづれでつてくれながつだのー……』

——つて泣きながら詰め寄ってくるだろうし、さすがに我慢してね。

「ねえぼこべえ」

苦笑いしながらクロエの頭をナデナデしつつ、私はいろはのお供のぼこべえを呼ぶ。
「なんですか〜?」

ぴよこもふつとどこからか顔を出す可愛いタヌキはそのまんまるフォルムに似合うのんびりとした声で私に返事を返した。

「電車降りたら、そこから徒歩で何分くらい?」

「う〜ん、……恐らく皆さん換算で30分ですかねえ〜」

「うえっ!」

「あ、ラブちゃん復活」

「それって最寄りから吾輩達がダツシユしてってことだよな?」

「はい〜」

「ううう……まじかよ……」

「里は山中ですから〜」

「幹部う、着いたら飛んでえ……吾輩疲れた……」

「もう、座ってただけなのに……もーむりだ……」

「う、にゅん……すぴー、すぴー」

だるーんとかよりの膝の上で休むラブと、もうすぐ着くのに今になってすやすや寝息を立て始めてしまったクロエを見ながら、私は「やっぱりこれがh o l o Xだな」と考

えていた。



「着いた……」

最寄り駅。

吾輩は大地を踏みしめながら立っていた。電車という地獄の時間を乗り越えて吾輩は立っていた。これから吾輩の王への道が――

「――さ、行くでござるよ」

――ちよつとくらい言わせろや。

ぼこべえの案内のお陰で吾輩たちは道に迷うことなく進んでいく。侍に任せると必ず一回は迷うがそのお供のナビは完璧だ。

新人も電車を降りて走り出す頃には目が覚めてて「うつそー！いろはちゃんの実家ー!?」とハアハアし出してる。

吾輩はそんな新人から目を離し、ぼこべえに進路を聞いてる侍を茶化した。

「おい侍。そろそろ里の場所くらい覚えろって」

「お、覚えてるでござるよ!……ただ、ちよつと、外れちゃう……だけで」

「それ覚えてるって言わねーからな」

「ボクとしてもいろは殿お、そろそろ〜」

「ぼ、ぼこべえはお口チャックして案内するでござるよ!」

言いながら侍は足を動かす。ゆーてほどよく荒れた山中でも落ちないのは自然にそういう足運びが身体に染み付いてるってことだな。

吾輩もそうありたいもんだが、残念ながら幹部の腕の中だ。

「かなしいもんだな」

「いや自分で走れよ」

低い声で幹部がツツコむ。吾輩こういうツツコミは結構好きだ。幹部は「くしなよ」とか「くにしよう?」とかつていうよーな言葉遣いだが、たまーにズバツと来るからな。

「いいぞ幹部!」

「なにが!」

そんな風にぎやーぎやーしてたら、少しずつ景色が開けてきた。山の中が、手入れされてるような整った草木の連続になる。

もう30分か。

「そろそろじゃね？」

「はい」

侍の肩に乗るほこべえがニコツと笑って我輩を方を向く。その途端バツと視界が開けて、気づけば崖の上に吾輩たちは立っていた。

「おあー！」

畑。田んぼ。四方八方に行儀よく並ぶ、でかめの日本式旧家屋。一際でつかい楼閣み
たいな建物。緑と土色が混ざりながらも営みのはつきりと分かる里が崖下に見える。

「ここが風真の里、……侍の里でござる！」

ニパツと笑って侍は手を広げた。

「すーいー！」

「いろはちゃんの里お……！♡」

「わー、ひろーい……」

博士が全身で興奮を表現して、新人は顔を朱に染めて感動し、幹部は圧倒されるよう
に里を見渡す。

ノスタルジックな光景と吹く風が吾輩の疲れをちよつとだけ癒やしてくれる。まさ
しく絶景。

ここだけの話、まじで綺麗だ。

「なあ侍、このこの崖、このまま降りればいんだろ？」

「そうでござるよ」

「いよし、いくぞっ！」

吾輩の音頭に合わせて、皆で一斉に崖を下り降りる。

そんな吾輩たちに気づいたのか、里内にちらほらいた人達が互いに耳打ちしたかと思えば、快活な笑顔でこちらに走ってくる。しゅば、しゅばつとえげつない速さだ。

人数も増えてく。どんどん増えてく。

——ん、あれ、これ増えすぎじゃ……ね？

目の前で二倍三倍に膨れ上がる侍を前にそう思いながら、降りきつてすぐの門みたい な場所に辿り着いてみると、その頃にはわつさわつさと侍の群れが、門の前を埋め尽くしてて。

『侍の里へようこそーっ!!!』

息のあつた大合唱で吾輩たちを迎えていた。

んで侍は何故か赤面してた。なんでだよ。

………てか侍の里だとみんな侍じゃねーか。

とりま里の中ではいろはって呼んどくか。

風真の里へレッツゴー!③

【いろはが帰ってきたぞー!!】

「どうわっ、き、……きつつー……お、おい侍……こ、この侍たち……どかせっ……あつ
ー」

【わっしよい! わっしよい!】

「わっ、あ、わー! ルイルイ助けてー!」

「あ、こよりー! どこ行くのー!」

【あのいろはが友達を連れてきたぞー!】

「いろはちゃん……あの、つて……?」

【わっしよい! わっしよい!!】

「——余計なこと言うなでござるっ!!!」



まるで満員電車。さっき電車降りたのに。

いろはちゃんの里の侍さん達に揉まれて、やっと寝起きからスッキリしてきたと思つた頭がクラクラする。疲れと息苦しさを解放するために私は一息ついた。

「むー……」

いろはちゃんは侍のみんなを静かにさせてからゆつくりと腰を下ろして体育座り。拗ねてるポーズだ。

「すまなかつたよいろは……お連れ様にもご迷惑を……」

里の侍の中でも強そうな人がおろおろしながら拗ねるいろはちゃんに弁明する。見たところ侍の中の族長的な存在なんだろうか。女の人だ。黒髪ポニーテールにアメジストのように輝く瞳。

そんな人の言葉にしかし、いろはちゃんは体育座りを解かない。可愛い。私にもたまにそうやって塩対応して欲しい。

「それはそうでござるが……」

「いろはが久し振りに友達を連れてきたものだからびつくり——」

「——た、隊長！だからそれを言うなでござるっ!!!」

あ、族長じゃなくて隊長さんだった。

苦笑しながら弁明を続ける隊長さんの言葉が終わっていないうちに突如として大声でくつてかかるいろはちゃん。可愛い。相当焦ってる。可愛い。

「うおっ、」

「いろはちゃんが大声を……!」

ラプラスとこよちゃんがいろはちゃんの声に驚く。

それもそうだ。いろはちゃんがここまで荒ぶることは滅多にない。それも仲間内に。さては恥ずかしいと見た!

なんで恥ずかしがってるのかはわからないけど。

「っーん……」

「あはは……」コホン……さて、お連れ様御一行。改めてようこそ侍の里へ……私はこの里の里長代理だ。侍部隊の長も兼任している。以後よろしくお頼み申す」

拗ねるいろはちゃんに申し訳なさそうに笑って、身体を私達の方に向けて侍の隊長さんは言った。その後ろには快い笑顔で私達を見る侍さん達が大勢いる。

ちゃんと歓迎されてみたい。

「ども、吾輩はさむら……いろはの上司のラプラス・ダークネスだ。よろしくなたいちよーさん」

「よろしく、ラプラスさん」

「んでこいつらが右から幹部、博士、新人」

「こらラプ。せめて名前言ってよ」

「あ、」

「もう……。どうも、私は鷹嶺ルイと申します。この二人は博衣こよりと沙花叉クロエ……。私含め、皆いろはと充実した毎日を送らせていただいております」

「これはご丁寧にも。よろしくお頼み申す、鷹嶺さん博衣さん、沙花叉さん……。いろはと仲良くしてくれてありがとうございます」

柔らかな笑顔を浮かべながら隊長さんはルイ姉と握手を交わした。そして再びいろはちゃんの方を向く。

「いろは、改めてよく帰って来たね。……ラプラスさん達はこれからどこに連れていけばいいかな？……宿舎かい？」

「……風真のお家で預かるでござる」

「そうか、うん。それがいいな」

「ふーん」

「あはは……。どうか機嫌を直してくれ」

「……はあ、しよーがないでござるな……。ただいまでござるよ」

「ああ、おかえり、いろは。積もる話はまた今度だな。……それではラプラス様御一行、ごゆるりとお過ごしください」

それだけ言って、やっと隊長さんは里の侍に解散指示を出した。まだ話し足りない

いう人々を持ち場に戻らせていく。

「拗ねていても心は通じ合っている隊長さんというはちゃん。やり取りを見ても信頼しているのが分かる仲良いプロレスみたいな会話だった。

私はいいなあと思う。

「よし……皆殿、風真の家に連れてくでござるよ!」

口を尖らせながらも挨拶を済ませたいろはちゃんは、そんな私の想いには気づかず、バツが悪そうに笑った。



さむら……いろは!の家に向かう過程で里のデイトールを知る。崖の上からじゃ分からなかったものが見えてくるのがおもしろい。

個人の家かなと思うところに当たり前のように風車があったり、広かつ肥えた土地で稲が穂を実らせてたりな。

昔の人の暮らしの知恵ってやつは現代でも通用するもんだなと感心する。

「……えつとな、」

「……………」

結構な大きさを誇るいろはの家。その前に立つ吾輩は曖昧に口を吊り上げることしかできない。そしていろはは真つ赤になつた顔を掌で必死に覆っている。

他の部下達もみんな、吾輩と同じ顔だつたから、正直に言った。

【おかえりなさい!!そしていらつしやいませ!!いろはとお仲間さんく】
「宿つてわけでもないのにこの垂れ幕……さすがに、やりすぎじゃね?」

「……母殿おー……!!!」

里の長閑さか、羞恥の叫びが圧倒的な悲痛さをまとつて至近距離にいる吾輩たちに刺さるように届いた。

——んで、今は家ん中つてゆるわけだ。

「うふふ、こめんなさ〜い」

どこ吹く風つて感じていろはの母親は笑う。いろはと似ているような、でも大分大人びたような顔が笑顔を咲かせる。

それでも身体つきはやっぱり侍以上に逞しい。筋骨隆々つてわけじゃないが、ぎゅつと引き締まつてる。

いろはのよりまた少し淡い金色の髪は、母親がころころ笑うたびに桜が舞い落ちるよ

うにしどけなく揺れる。肌はそれを優しく支えるように細やかで、白い。

……………吾輩、詩人もいけるな!

つてか若いなー。これが美魔女つてやつか。歳知らんけど。

「ごめんじゃないでござるよ!今すぐ外すでござる!」

「あら、なんで?」

「は、はは恥ずかしいからに決まってるでござろうが!」

しかしまあ、ここまでうるさいいろはは久し振りだ。滅多に見ることがない。やつばそうやつて落ち着いているような奴も親にかかれば子供なんだな。

……………いや、この場合はいろはの母親が子供っぽいのか?

「もく、お母さんいろはのお説教より皆のお話聞きたいなあ」

おいおい。

「はあ。それはいつだつていいでござろう……………?そうだ、父殿は?」

「お仕事行つてるわ」

「じゃあ弟君は…………」

「ふふ、就職活動よ」

「ふうん、相変わらず忙しそうでござるな」

「弟さんはもうすぐ就職なんですか?」

帰郷直後に会えない父親と弟に残念そうな顔をするいろはと、それをあやす母親。そんな親子の会話に幹部が違和感なく入っていった。

ほんとうこういうの上手いんだよ幹部は。

「ええそうよ。今頑張ってるの」

「もうすぐ帰ってくるはずでござるから、そしたら紹介するでござるよ」

「さんきゅーいろは」

「んえ、なんか変な気分でござるな」

「なあんでだよ、いいじゃんかいろはって呼んだって」

「うふふ、いつもは何て呼ばれてるの？」

「いつもは侍って呼んでるんですよ。ね、ラブ」

「おう」

「あら可愛いじゃなくい」

「母殿は少し静かにして欲しいでござるよ………ん、帰ってきたでござるな」

吾輩達も加わって楽しく会話していると、ずっと遠くから何か近づいてくるような気配がした。

ん、と思ったら気配はもういろはの家の前だ。

はやいなー。

「只今戻りましたー!!」

「帰ったぞー」

遂にみんな揃って、お話は結構遅い時間まで続く。

風真の里へレッツゴー！④

「うわ、うまつ……!!!」

ラブは机に所狭しと並べられた料理の中からサーモンのカルパッチョを箸で取り、口の中に運んだ後で目を輝かせ、その美味しさに舌鼓をうった。

「あらうれしく、沢山食べてね」

その素直な反応にいろはのお母さんはすっかりご機嫌で、頼まれていないのにラブの皿に他の料理を取り分ける。

分かりやすいのはいろはと一緒なのかもしれない。

「ルイちゃんも、手伝ってくれてありがとね」

「いえいえ、この子を見習うわけにもいきませんし」

「んぐんぐ…おい幹部、吾輩の自己紹介やめろ、それは吾輩に効く」

「なら普段から少しはちゃんとご飯食べなつて」

「うふふ、聞いてた通り姉妹みたいね」

——いろはのお父さんと弟くんが帰ってくるまでに散々追求したh o l o Xの話
を思い出したのか、お母さんはクスクスと笑う。

私は否定したい言葉に苦笑いしながら人数分の湯のみ茶碗を人数分テーブルに並べた。

「姉上は上手くやれていますか？」

「もちろんっ、沙花叉はいつもいろはちゃんに頼らせてもらってるんだ〜」

「ちよっ、恥ずかしいこと聞くなでござる！」

「私は姉上がしっかりしていないのが心配なのです。……戦闘以外は結構ズボラですし」

「っ!!……弟くん弟くん!……いろはちゃんって、家にいた頃はお風呂上がりとか無防備だったりした!」

「ええ、そりやあもう」

「くくくくく♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「さ、沙花叉あ……」

「はあああ……♡しかめっ面のいろはちゃん可愛い♡♡」

「あ、ははは……良いご友人ですね」

「弟くんも、沙花叉と仲良くしてくれたら嬉しいなあ〜!」

「はい、よろしく願います」

「こんなふうに、左の方では弟くんを味方に引き込もうとする沙花叉と分かっ

で分かっていない弟くんと、ただただ羞恥に悶えるいろはがいて――

「うわあ、お酒強いね。……これは負けてられないな……!」

「ふっふっふー、お父さんといえども負けないですよー!」

「忍者殺し」なんて物騒な名前の日本酒で飲み合いをしているお父さんところよがいて

それはそれは賑わっている。

「……少し振りねえ」

と、微かに聴こえた柔らかな雰囲気に含まれた言葉と、それに反応し振り向いた私が見た、温かい眼差しがそれらを物語っていた。

「……すみません。娘さんを拘束しちゃって」

「ううん全然……、あ、やっぱり少し寂しいかも」

ぱあつと花が咲くような笑顔で戯けるお母さん。

「でも、子供ってそういうものだから」

その瞳はいつの間にか過去を見ていた。

「そうですか?」

「ふふ……そうよ」

私が聞くまでもなく、お母さんは目を閉じて周りの喧騒を懐かしむように、噛みしめ

るようにしてから言葉を紡ぐ。

ふとラブの方を見ると、口をもぐもぐさせながら耳を澄ませていた。

「子供つてずつと見ているつもりでも、いつの間にか大きくなってるんだから……」

『ははとのおー!』

「大きな喧嘩も、冷たい言い合いもなかった……何も言わずとも自分で頑張ろうとしちゃう子だったし」

『母殿おー!』

「だから、私があの子に伝えられたのは、いつてらっしやいと、おかえりなさいと、頑張つてねって、それだけ」

『母殿、いつてきますでござるよ』

「もつとなにか、あつたかもしれないのにね」

「……………」

「あの子はそれでも立派に育つて、離れていって、あなたたちと楽しくやつてるから……ちよつと妬いちゃうかな……うふふ」

そうやって口角を上げるお母さんに、私は何も言わなかった。

この人は分かっているのだろう。

言葉だけでは後悔しているように聞こえるけど、それは違う。ただ、自慢である娘の成長を誰より静かに見守って、寂しくも喜んでゐる「母」の姿がそこにはあった。

「……いろはがいい奴な理由が分かった気がする」

ラブが一言そう呟いて、その声は夜の闇に溶け込んでやがて消えていく。そこから私達はゆつくりと会話を続け、気がつけば時は経ち、喧騒は少しずつ止んでいった。

「ねえいろはちゃん、一緒に寝よう」

「さ、沙花又!?!」

「あ、じゃあ布団、用意しときますね」

「弟者!?!」

うつらうつらし始めた沙花又を介抱するいろはと悪ふざけに付き合う弟くん。

「う、……ここらでやめておくかい?」

「えへへ、そうですね……ん、」

日本酒の飲み過ぎで大分出来上がってきたこよりとお父さん。

夜は私達を導くように、更けていった。



「う、ん……」

幻覚だ。幻聴だと己を律しても聴こえてしまう子犬のように愛くるしい声を前にして、風真いろはには逃げ場がなかった。

「いろは、ちやあん……んにゅ……ん……ん……」

もう深夜。他のみんなは眠りについて辺りは虫のさざめきが風流を感じさせるばかり。普段のいろはならば久し振りの我が家の布団でゆっくりと疲れを癒やすはずだった。

だがしかし、伏兵がいた。

「らい、すきい……」

灰色がかった遊び心満載の髪は今は何にも縛られず梳かされている。閉じられた目と僅かに上下する肩は無防備そのまま。極めつけは、その美麗な肢体に纏うことで轟惑的に存在を主張する黒色のネグリジユ。

普段の仕事服をよりラフにしたような隙のある姿のまま、彼女はいろはの顔を、ネグリジユの布が届かない胸元に押し付け、抱きしめる。ふにゆんとした嫋やかな女性らしさがいろはを包み込む。

耳元で囁かれる恋慕とかかる吐息はかけられる者の意識を奪って決して離さない色

気に満ち満ちている。

赤子をあやすようにいろはの頭を優しく撫で続け、当人が顔を真つ赤にして口をもにもよませているというのに、知らぬ顔で寝息を立てる。

そうして彼女、沙花又はいつの間にかいろはの布団に入り込み、いろはを抱きまくらにして愛を囁き続けていた。

「さかまた……………」

ある意味理性のブレーキがなくなってしまった状態の沙花又の濃密な愛情表現にいろはのキャパは一瞬でラインを割り、頭から蒸気が吹き出す。

力を振り絞って無駄を承知で話しかけるが、やはり反応はない。

「いろはちゃん、……………んう……………ん…」

返ってくるのはチョコのように甘くとろけた言葉の愛撫だけ。それはいろはの心に柔らかく指をかけ、スツと引く。余韻として広がるくすぐったさが思考を乱す。

普段から「可愛い」と言われただけで照れだすいろはにとって、今の沙花又は危険人物以外の何者でもない。

「弟者……………」

一緒に部屋で寝るよう勧め、今ではぐつすりと夢の中に落ちている弟の姿が頭の中に浮かび、それに怒りを覚える間もなく、いろはは一晚中、必死に救済を求めるのであつ

た。

風真の里へレッツゴー!?

サー、と自然がしめやかに吾輩の身体を起こしていく。いつもアラムか幹部の声で覚めるこの目も、清らかな空気に導かれて自力で覚醒の時を迎えた。

「ん……」

最初に目に入ったのは木材建築ならではの木組みだ。無機質な吾輩の部屋とは違って、見ているだけで何かが身体に入り込んでくるような気がする。

放り出された手は畳の上。仕事をし始めた太陽が差し込んでいて、ちょうど吾輩の掌を明るく照らしていた。

「……あつたけー」

ギュつとその手を握って光をしちゅーに収める。そうすると血がほどよく巡りだして、起きるだけの熱量、適正な体温を獲得できる身体へと変化していく。

「よしっ」

そこまで味わいながら、吾輩はやつと上半身を起こした。自然の恵みが吾輩を健康優良児へと進化させていく気がした。

——ほんとにそんな気がしたんだ。あのときは。

「あれ、は！嘘だつっつ！！！」

吾輩は山中という自然の中を結構な速度で走りながら目覚めと今のギャップを叫ばずにはいられなかった。鳥の鳴き声、草木のざわめき、川のせせらぎ。

今はそういうのが全部煽りに聴こえる!!

「おい誰だ！観光なのに、折角だから里のトレーニングメニュー体験してみようって、言つたのッ!!」

侍トレーニング。其の一。

山中地獄めぐり。

「吾輩の美しい朝帰せ！」

言いながらも吾輩は亜音速に近い速さで山を踏破。どんどん景色の輪郭が粗くなつていく。だが先行組との距離が縮まらない。

「ごめんってラブ。ほら、運動しないとじゃん」

張本人が木から木へ飛び移りながら吾輩の方を向く。幹部は翼も使わずに森の中を自由に駆け回っていた。

「こやろう……」

それだけでも異常なのが分かるが、吾輩が言いたいのはいつらだ。

「ほっ、ほっ、ほっ」

「んー、よいしょー！」

体力自慢達の異次元機動。パルクールのプロでも裸で土下座するようなハイスピードフットワーク。吾輩のそれなりの走りでは追いつく術はない。

もう忍者だった。忍者の里に改名しろよ。



侍トレーニング。其の二。

大滝。

「ううう……」

大瀑布と見間違えるほどの量の水は、落下による力を得て容赦なくこよの頭と肩を叩き伏せようとする。とにかく痛い。あと何時間続けるんだろう。立っていられないかもしれない。

「こよちゃん、無理しちゃダメでござるよ」

幾らか飄々とした様子のいろはちゃんが氣遣つてくれるけど、私の耳には言葉として入ってこなかった。

「らい、じよーぶっ!」

段々と心が無になっていくのが分かる。

「……は、はっ!吾輩!これくらい!?!余裕なんだが!?!」

「結構効くなあ」

「あ……花畑でいろはちゃんが呼んでる……」

「沙花又!?!」

明らかに痩せ我慢してるラブちゃんの大声とか、真面目に滝に己を任せるルイルイとか、イケナイ顔をしているクロたんとか——

皆の可愛い声がすつ、と遠くなつていく。

「ん——」

煩惱が、流れ出ていく——

「けんきゆう……したい」

「「「え?」」」

ルイルイはまだ翼の研究し足りないしなにより鷹の目の能力の全部をデータに出力

して科学的に模倣できないか調べたいしクロタんに至っては筋肉の配列とか超音波受信器官の詳細とか戦闘中の脳波とか全然できてないしいろはちゃんのチャキ丸に使われてる鋼の種類も気になるしあそれは後で詳しい人に聞いておこうそれよりあの細い身体でどうやってあんな力が出るのかとか全身を隈なく調べ尽くしたいしラプちゃんは全部が全部謎だから一年くらい研究室にいてもらって解明し尽くしたい……ああ研究したい。研究したいよ……。それにしてもルイルイの脚とかクロタんのお胸とかいろはちゃんの腰つきとかラプちゃんの髪とかもう可愛いすぎえっちすぎ……!!!

「……………やっべえ」

そこからのことはあんまり覚えていない。

けど皆の話によると、溢れんばかりの煩惱を身体から出すためか、ずーっと怖い独り言を呟いていたらしい。



「よーし、頑張っちゃうぞー」

「御手柔らかにねー」

侍トレーニング。其の三。

組手。

本来なら木刀を持ってやるらしいそれは、クロエと私がやると木のクローと素手になる。なので一応木刀を借りただけ、使いこなせる気はしない。

「幹部、新人、ほどほどになー」

ぼけーつとした顔で私達の対峙を見るラブは眠そうなこよに肩を貸していた。なるべく静かにやらなきやすぐ目が覚めちやいそうさ。

「抑えめでやれつてさ」

「わかつてるよルイ姉」

忠告しても抑えないであろうクロエが「わかつてるよ」と言うときは大体「わかつてない」時だ。まあ、クロエは戦闘のスイッチ入れるとのめり込みじゃうタイプだからしょうがないけど。

なら、私が主導してかなきや。

「始め、でござるよ」

穏やかないろはのコールに、一瞬にして私とクロエの姿が掻き消えた。直後、クローが目と鼻の先に到達している。

「よっ、」

予想していたそれを躲し、こよとは反対側、つまり私にとっては背後へとステップ。クロエとも距離をとる。しかしクロエはクロエと共にゆらりと力の抜けた挙動の後、一気に闘志を全開にして地面を思い切り踏み切る。

凄まじい速度に細やかな左右への移動による攪乱を加えた先の読めない突進に、私は目には頼らず、ただ脊髄と触覚だけに意識を集中させる。

クロエの戦闘面での長所は色々あるけど、一番相手にとつて厄介なのは緩急の鋭さだ。自分で鍛え上げたであろうそれは、姿が見えたと思つたら首が飛ばされていた、というくらいに速度差を誇る。

だから私はただ、攻撃の気配にのみ絞つてクロエを待った。

「っー」

それは左後方からだった。

感知するや否や即座に左に旋回、右手の木刀を素早く振り上げクロエの前に据え、衝突の寸前意識より少し強く木刀をこちらに引く。

ふっ、と風が風ぐ音が辺りを満たした。

「わお」

クロエが私の行動の意図を察し、楽しそうに笑う。

木刀を引くことでクロエと木刀の衝突音を限りなくゼロにする私の思惑はなんとか

成功し、お互いそのまま鏢迫り合いに移行し――

「ふっ!」

――そうはさせないとばかりにクロエは、私に突き出した左のクローとは別、右に装着したクローを振りかぶることなく目が霞むような速さで射出した。

私は木刀で捉えた左のクローをなんの執着もなく突き放し、眼前で右のクローを避ける。そしてがら空きになった脇腹に向けて脚を振り抜く。

クロエはそれを無理矢理身体を捻らせて回避。

お互いが次の一手を瞬時に模索し、再び木刀とクローが搗ち合う寸前――

「――そこまででいやる」

いろはのコールが場を制した。

「ふう……」

「あーあ、終わっちゃった」

まだやり足りない。とばかりにがっくりするクロエの肩に手を置きながら、私も短くも濃密な戦闘から意識を剥がすため一息つく。

なんとなくラプの方を見ると、すやすやと眠るこよの頭を肩に乗つけたまま、私達にグッドサインを送っていた。



「うーん、うー、ん……」

「いろはちゃん、ほら、もうすぐだから」

トレーニング体験を終え、「お疲れ様会」と称して皆で晩酌を行った結果、お酒に弱いいろはちゃんはラプラスといい勝負で泥酔した。

ハイテンションになるラプラスとは違って、いろはちゃんは酔うとふにやふにやになって、寝言みたいな話し方になるのが可愛い。結社内でもあまり飲むことがない方だから、本当にレアだった。

今日はなんだか距離を詰められなかった気もするし。

朝起きたら、いろはちゃんが顔を真っ赤にしていて、それからというもの、なかなか近づかせてくれなかったのだ。

割けるような雰囲気じゃなくて、距離感を測りかねてるみたいな初々しい感じ。だからこうやって介抱でもくつつけるのが堪らなく嬉しい。

久し振りのいろはちゃんの感触に満足しながら、やつとこのことで布団が敷かれたいろはちゃんと私の寝室に辿り着く。

「ついたよー」

「う、ん……」

肩をトントンと軽く叩くと、ゆっくりと頷くいろはちゃん。私はその子供っぽい可愛さに悶えながらも、ゆっくりといういろはちゃんを布団に寝かせようとする。

——と、そのときだった。

「んー」

「んえ？」

何かを探すように手をフリフリと彷徨わせたいろはちゃんは、私の服に指がかかる、それを自分の身体に引き寄せた。

私はいろはちゃんを寝かせるために前に重心をかけていたから、何もできずにいろはちゃんと一緒に倒れ込む。

ポフツ、と布団が私達を支える音がした。

「あ………」

呆気にとられた私の横で、倒れた時の軽い衝撃により綺麗なエメラルドの瞳を半ばほど煌めかせた状態のいろはちゃんがこちらを見ていた。

「——っ!?!」

「んう………?」

状況を自覚した私の心臓が、張り裂けるほど強い鼓動を全身に伝える。一瞬にして酔

いが回ったかのごとく顔が熱くなる。

そんな私を見つめながら、幻に囚われているかのような惚けた顔でいろはちゃんは口を開く。

「しゃ、か、また……」

「い、いろつ、ちゃんっ!？」

名前を為していない私の言葉は、反射的に小声になる。

自分の名前を呼ぶいろはちゃんの声は、いつだったか、私の手をぎゅつと握りしめて謝りだした時のそれよりもずっと妖しく、ずっと嫺やかで、ずっと色を纏っていた。

たったそれだけで、私の思考回路はショートする。

「しゃかまたあ……」

先程より眉をひそめたいろはちゃんが、先程よりずっと私の近くに身体を寄せる。暗い場所、至近距離で見つめ合っている私達を誰かが見たら、なんて言うだろう。

意味のないことばかりが頭を巡って、私は動けなくなってしまうた。

「い、いろは、ちゃん……」

やつとまともに名前を呼ぶのと、いろはちゃんが瞬きするのが重なる。反応があったことに何かを感じたのか、いろはちゃんはまたもそもそと動き始めた。

それは、それは私にとって本当に一瞬のことで。

「…………え」

——気づけば、私の身体の上にはちやんの身体が乗っかっていて、身動きがとれなくなっていた。

風真の里へレッツゴー⑥ルートB

「んう……………」

「ひ、あつ……………」

馬乗りのまま、コツンと額を合わせた私というはちゃんの距離は限りなくゼロに近い。息も忘れて、目の前にある碧色の瞳に朧げに映る真つ赤な顔をした自分を見つめることしかできない。

「さかまた……………」

呂律の回らないいろはちゃんが私の名前を呼ぶ。鼻孔をくすぐる花菖蒲の香りはいつもと濃密で、いつもより蠱惑的に私を取り込む。

私の匂いがいろはちゃんに染められてしまうような感覚にクラクラして、高まつていく多幸感に鼓動が激しくなる。息が我慢できなくなつて、そつと忍ばせる。

それと同時に、名前を呼ぶ。

「いろはちゃ……………んっ」

接する身体。絡められる脚。私の胸に重なるさらしのないいろはちゃんのお胸。ドクン、ドクンと私の心臓が脈打つたびに少しだけ柔らかかに揺れる。

いろはちゃんの身体からこちらに熱が伝播する。私の熱もいろはちゃんに伝わって熱は循環し、身体の境界線が曖昧になっていく。

額もくつついたまま、見えない何かを交わしている。

胸の奥を甘い疼きがノックする。

少ずつ動揺よりも「このままでいたい」という気持ちの方が勝ってくる。このままずっとお互いを呼び合って、身体を重ねて。

「いろは、ちゃ……………」

このまま、ずっと。

清らかな香りに私は身を預け始める。そうすると身体は温もりを求めて、いろはちゃんの腰にすつと腕を回していた。さらに密着したせいか前よりもっといろはちゃんを感じる。

私は何も考えず、ぎゅつと強く抱きしめた。得も言われぬ感情の奔流に吞まれる。

早鐘を打ち続ける心臓さえも、穏やかないろはちゃんのと同期していく。二人が一つに溶け合うような、そんな感覚に溺れていく。

私はそのまま何かに囚われるように目を細めた。次第に意識も暗澹に落ちていく。視界の代わりに全身の感覚が鋭敏になって、触れ合うたび、僅かに吐息が漏れる。

「ん……………」

私が眠ってしまうと思ったのか、いろはちゃんは額を離し、私の頬に手を添えてトンと軽く触れた。

そのお陰で意識が途切れることはない。

「だ、め…………だめ…………」

しかし、寝てはいけないと頬を突くいろはちゃんに私はもう陶醉しきっていた。子守唄を聴いているような心地の良い世界に、浸ってしまった。

「さかまたは…………かさまのこと、どうおもってるの？」

でもその言葉を聴いて、少しだけ頭が冴える。視界が僅かに明瞭になって、またいろはちゃんの顔が、瞳が見える。

いろはちゃんは寂しそうな顔をしていた。

「なんで？」「どうして？」

そう言いたそうな顔をしていた。

「あ……………」

呆気にとられる私に、いろはちゃんは口を噤んでいる。お酒で頬を上気させながらも、答えるまで逃さないところをじっと見つめている。

「あ、えっ、と……」

「すぐこたえないとダメ」

いろはちゃんはそう言うのと私の頬をぐにぐにと伸ばした。

「いひやいいひやい……」

「こたえるの、こたえるのー」

「いひやいいひやはひゃん……」

ぼんやりと呻く私に、いろはちゃんはさらに畳み掛ける。顔を近づけ、私の肩に顎を乗せる。そのまま耳元で蕩けた声で呟く。

「かざまのこと、なんでぎゅつとするの……?」

その吐息に冴えたはずの思考はすぐに霞んで、私は我慢できなくなってしまった。

私は甘さで痺れている身体を無理矢理動かした。腰に回していた左手をいろはちゃんの後頭部にもっていき、しっかりと添える。

そして、もはや衝動的に私は近くにあるいろはちゃんの耳を啜える。

「ひゃんっ……」

酔っついていてもくすぐったがりないろはちゃんが咄嗟に頭を引いて私の唇から耳を離そうとする。でももう遅い。左手で頭をしっかりと固定している。

「あむ……はむ……」

柔らかい耳たぶを唇で優しく挟む。びくびく震えるいろはちゃんの身体を抱きしめて、私は何かに導かれるように口づけをする。

伝わっていないかったのだ。

私がいるいろはちゃんをどう思っているか。

ただ伝えるだけじゃダメなんだ。

今もただ言っても、酔っているから忘れちゃうんだ。

なら残さなきゃ。

いろはちゃんに私の匂いをつけて、私のにしなきゃ。

「ん、ゆ……」

少しだけ舌を出して、可愛いいろはちゃんの耳をチロリとなぞる。ピクンと震えたいろはちゃんに私は自分の身体を擦り付ける。

脚を絡めて、腰を抱いて、肩を包んで、頭を支えて。

思えば私も酔っていたのかもしれない。でも、今はそんなの関係ない。いろはちゃんに私を覚えさせることだけしか考えられない。

頭の回らない状態の、短絡的でお馬鹿な思考。それでいいと思った。気持ちだが、想いが伝われば。

「さかまたっ……」

慌てたような声がある。可愛い声。ずっと聴いてきた。ずっと聴きたいいろはちゃんの声。

「……ん……ふ、はっ……」

長いマーキングを終えて、私はやっと耳を解放した。

そして霞んでいく視界の中でかろうじて捉えた、熱を持ったままの綺麗な瞳を半ば見開いたいろはちゃんに向かって、私は微笑んだ。

「いろはちゃん、だあい好き」

もう自分が何を言ったのかさえ分からなかった。

直前の思考が全く思い出せない。

霧が一層濃くなって、限界が来たのがなんとなく分かった。

「う、ん……」

けれどいろはちゃんはそうやって頷いた気がして、そのまま目を瞑って項垂れたような気がして。

（おや、すみ……いろ、は、ちゃ……）

自分が何を言ったのかなんて認識するにはもう理性を失っていて、熱に浮かされたまま、私はいろはちゃんと一緒に、そのまま意識を手放した。



お酒に任せて寝た夜は一瞬だった。

晴天は登り、帰るときはやって来る。

『『お達者でー!!!』』

吾輩達は隊長さん以下里の人らの見送りに笑顔で答えながら最寄りの駅へと向かった。

「にしてもまさか朝まであったとはな、トレーニング」

思い出す。鐘が鳴らされた途端にいろはと父、母、弟が跳ね起きて（ついでに吾輩達を叩き起こして）走り込みと筋力トレーニングをやっていた。

唾然とする吾輩に「どうですか？」と誘ういろは弟。気づいたら皆仲良くスクワットやっていた。

疲れを抜くために里に来たのに、倍は蓄積した気がする。まあでも、体験したいって言ったのは幹部なのだから仕方ない。やるつきやなかったのだ。

後でなんか幹部にねだろ。



『ごっつらっしやい』

いつもみたいに、そう母上に送り出してもらった。

久しぶりの里だけど変わりはなくて、皆明るく活発に仕事と修行をこなして、交流を深めていた。それでも風真が帰ってくれば里中が『お帰り』と言ってくれる。

ありがたいことだ。

何も言わなかったけど笑顔で見送ってくれた父上と、控えめに手を振ってくれていた弟者。言うまでもなくh o l o o Xに入る前と一緒に。

温かくて、懐かしい記憶。

来てよかった。

風真は電車で揺られながらそう思っていた。

「……………」

……少し、引つかかることがある。

鐘の音で起きたとき、風真は沙花又にちよつとだけ覆いかぶさるような体勢で眠っていた。あの日みたいに抱きつかれるんじゃないやなかったのが不思議だ。

「っ！」

でも、風真はあの日ちゃんと……………

『うーん、うー、ん……………』

『いろはちゃん、ほら、もうすぐだから』

……………あれ、ちゃんと、してなかった、気もする。

「むむむ……………」

昨晚の記憶が全くと言っていないほどない。

自分が何をしていたのか、どんなことを言ったのか。

全く覚えていない。

『ついたよー』

でもちゃんとベッドで寝てたってことは、誰かが介抱してくれたんだろうか。

沙花又？

いやいや、沙花又のことだから勝手に潜り込んだに決まっていますでござるな。

そうだ。きつと母上だ。母上は風真がお酒あんまり強くないことを知っていたから。

きつとそうだ。

「……………」

何か大事なことを覚えてような気がする。

誰かに何を聞いたかった、とか……………？

「……………」

考えていると、左耳に少し違和感を覚えた。不思議に思いながら指で触れてみる。

「…………あれ、」

なにもない。

「気の所為でござるか……………」

おかしい自分にふう、とため息。

思い出せないならしようがないでござる。

元々酔えば全部忘れちゃう体質だし——

「——んう……………」

「わっ」

その時肩が少し重くなった。甘い香り。

「ああ、沙花又でござるか」

沙花又がうつらうつらしながら肩に寄りかかっていた。放っておくと、静かに寝息を

立て始める。

思えば沙花又にはトレーニング中、あまり話しかけられなかった。里に来た晩にずっとくつつかれていたから距離をとりたくなった。

それと……

「……………」

思い、出せない。

あれ、沙花又に何かを聞いた気がする。

でも、……ダメだ。思い出せない。

「いろ、ちゃん……らい、すひい……」

「……はあ、しようがないでござるな」

しようがない。引つかかるものは一先ずどこかにやって、寝言を呟く沙花又の顔をも

うちよつと肩に置いて――

『だあい好き』

「――っ!？」

頭の中で声が響く。ゾクツと身体が電流が流れたように固まって、また左耳に違和感が走る。

「あれ……」

今、何を言われて――

『だあい好き』

「っ!？」

何かが頭の中に囁いてくる。でも何を言っているのか分からない。聞き取れない。

—— やっぱり変だ。

なんで、こんなにドキドキしてるんだろう。

「おかしいで、いーごころよな……」

鼓動の意味が分からないまま、風真は未だ電車に揺られ続けた。

結社に帰っても答えは出ないままで、ねむねむな沙花又を介抱しているうちに、その高鳴りはどこかへ消えてしまっていた。

でもたまたまに、すごくたまに、あの言葉だけを思い出す。

風真の里へレッツゴー！⑥

鼻孔をくすぐる花菖蒲の香りは私の理性を掻き乱す。

当のいろはちゃんはぼわぼわした顔のまま馬乗りになつて、私のほつぺをムニムニしていた。力加減がされてないせいか、少し痛い。

「さかまたの、ばか」

「うえ……ひゃんへひよ（なんでよお）」

「おばか、ばか、……ふふ、ばあか……」

言いながら、ほつぺの伸びた変な顔を見て笑い出すいろはちゃん。酔つているときのいろはちゃんの笑みは、何かを自慢しているかのようなものになる。可愛い。

「さかまた、は、なにでしたしょー」

頭をゆつくり左右に振りながら不意に呟くいろはちゃん。いつもはポニーテールなはずが、今は下ろしている髪がゆつたりと同じ軌道を描く。

「……ふえ、ふあふあひ（私）？」

「うん。わるいことした。さかまたわるいこ」

「ふえー、わかふうなふいふおく（わかんないよー）」

「いうまでではなきない〜♪」

いろはちゃん、これはご褒美だよ。なんて思いながら私は過去の行動からいろはちゃんに怒っている理由を考えてみる。

うん。大体全部怒りそう。

「わかふうふなふいつへー（わかかんないってー）」

「じゃ、だめー……ふふふ……」

いろはちゃんは優しすぎるから大概は何も言わず許してくれるけど、たまにくつついたり「いろはちゃん好き〜！」なんて言うとき「照れるからやめろ〜！」って怒り出す。

じゃあ私の知らないところで好きって言ったとか。知らず知らずのうちにスキンシップしてたとか。

「……………ふっふひふひた？（くつつきすぎた？）」

「……………はずれえ〜」

「ひ、ひゃあ、ふひってひったほは？（じ、じゃあ、好きって言ったとか？）」

「は、ず、れえ〜」

ダメだ。本当にわかかんないよいろはちゃん。

私はギブアップって言うように四肢を投げ出した。実際に投げ出せたのは腕だけで、脚はいろはちゃんのが絡められてるから無理だったけど。

「さかまたわかんないのお?」

「ふあふあんふあい(わかんない)」

「えへへ、いつけないんだあ……」

ああ、酔ってるいろはちゃんはなんて可愛いんだ。

子供みたいで、でも笑つてるところとかはうつすら元のいろはちゃんで。凄く綺麗で可愛らしい至上の姿。

こうでもなきやいろはちゃんら馬乗りになんかならないし、そもそも露骨に近づくと距離とられるし。とてもレアだ。ずっとこのままでいたい。

そうして私が変わなことを考えている内に、いろはちゃんは自慢気に正解を告げる。

「さかまたはね、きのうね、ずーつとかじゃまのことぎゅつとしてたの」

「へ?」

「だから、ずーつとギューつてしながらねちやつてたの!」

……あれ、それ、くつつきすぎたってことじゃ?

「さかまたは、くつつきすぎなの!」

ええー! 私正解してたじゃん!

なんで外れなのお!?

「ひふおふあひゃーん! (いろはちゃーん!)」

「——かざまねえ、さかまたにくつつかれるの、うれしい」

「——ふえ?」

「だけどダメなの、てれちやうの」

「あ、うん……」

「さかまたはかわいーから、どきどきするの」

「っ?!?!」

えっ?!?!いろはちゃん!?

「ふあふおはふあ——」

「——さかまたうるさい」

「ふあ、ふあい……」

口を挟めなくなった私に、いろはちゃんは続けて呟く。

「さかまたは、ずーっとかざまのときにかけてくれて、とつてもうれしい。けどねけどね、さかまたのことすきだから、かざまはさかまたにぎゅってされるとこまっちやうの」
いろはちゃんそれって、好きって!

ラブのほう——

「でもさかまたはすっごくおともだちだから、かざまがこまってさけてもずうつといっしょにいてほしいの」

あ、ライクのほうだ。

「……………きいてるっ」

「ふあい」

「……………わかった？……………かざま、さかまたのことすきだからね？」

「ふ、ふあい」

「ふふふ、よーし」

反省したと判断したのか、いろはちゃんほつぺから手を離す。そしてそのまま頭をこっくりこっくりさせると、私の胸に顔を乗せて寝息を立て始める。

「すー、すー」

私はそのあどけない寝顔を見ながら、大きく息を吐いて、緊張を身体から追い出す。でも高鳴る鼓動は収まる気配がなくて、少しだけいろはちゃんに伝わって上下する。

「……………ずるいなあ」

寝室に私の声だけが鈍く反響した。



お酒に任せて寝た夜は一瞬だった。

晴天は登り、帰るときはやって来る。

『お達者でー!!!』

吾輩達は隊長さん以下里の人らの見送りに笑顔で答えながら最寄りの駅へと向かった。

「にしてもまさか朝までであったとはな、トレーニング」

思い出す。鐘が鳴らされた途端にいろはと父、母、弟が跳ね起きて（ついでに吾輩達を叩き起こして）走り込みと筋力トレーニングをやっていた。

啞然とする吾輩に「どうですか？」と誘ういろは弟。気づいたら皆仲良くスクワットやっていた。

疲れを抜くために里に来たのに、倍は蓄積した気がする。まあでも、体験したいって言ったのは幹部なのだから仕方ない。やるつきやなかったのだ。

後でなんか幹部にねだろ。

ってか、あれ、なんか忘れてるような気がする。

………なにが理由で里に来たんだっけか。



『いつてらっしやい』

いつもみたいに、そう母上に送り出してもらった。

久し振りの里だけど変わりはなくて、皆明るく活発に仕事と修行をこなして、交流を深めていた。それでも風真が帰ってくれば里中が『お帰り』と言ってくれる。

ありがたいことだ。

何も言わなかったけど笑顔で見送ってくれた父上と、控えめに手を振ってくれていた弟者。言うまでもなくhooXに入る前と一緒に。

温かくて、懐かしい記憶。

来てよかった。

風真は電車に揺られながらそう思っていた。

「……………」

何故か寝起きはスッキリしていた。

ひどく酔っていたことはなんとなく分かったけれど、それ以外は全く覚えていない。ベッドにはちゃんと入っていたから介抱されたんだろう。

多分、沙花又に。

「むむむ……………」

起きたら沙花又の胸の上だった。

ふかふかの枕かと思って顔をうずめていたら、沙花又のお胸だったと分かって跳ね起きた。恥ずかしくて、でも絶対自分から抱きついてしまったはずだから、沙花又を無闇に突き飛ばせなかった。

普段あれほど言っておいて、自分から――

「!!!!」

羞恥で「気に熱が回る。

あの柔らかな匂いに包まれていたことが脳裏に刻み込まれてしまつて、顔から火が出そうになる。寝言とか言っていただろうか。何かやつてしまつただろうか。

聞きたいのに聞けない!!

「うー……!」

そうやつて風真が身悶えていると、肩に何かが乗つかるような感覚を覚えた。

「むえ……」

沙花又だ。沙花又が眠そうな顔をしながら風真の肩に寄つかかっている。

「……しようがないでござるな」

どきまぎししながら、なんとか沙花又の頭をこちら側にコテンと倒す。沙花又は姿勢が安定して睡魔に飲み込まれたのか、すぐにすうすうと寝息を立て始めた。

沙花又は知っているはずだ。

風真が昨晚何かをしちやったなら知っているはずだ。けれど聞けないし、聞いても多分はぐらかされるんだろう。

「……………ずるいでござるなあ」

声は電車の音に掻き消される。でも風真は自分の心臓の音の喧しさに、結社に着くまで苛まれていた。

【断章】温泉を楽しむh o l o X

温泉の強みといえばその広さと効能にある。

湯の温度等は家のとそう変わんない。いや普通にめつちや熱い銭湯とかもあるけどそういうのは屋内の話だ。外にいればさすがに温度のバランスが良い。家と同じくらいになる。

だが家のは足や手を思う存分伸ばせないから、リラックスしきれないのが大きな弱点になる。その点温泉はストレッチサーなどない素敵な景色と存分の広さを兼ね備えているわけだ。

そして効能。いろは曰くこのお風呂は疲労回復効果に加えて美肌効果があるらしく、そう聞くだけでなんか万事大丈夫な気がしてくる。

……まあ、何が言いたいのかといえば

「「きもちいいね〜……」」

吾輩達は温泉を存分に満喫していた。

「ああ……きもちいい……」

っていうか、吾輩達の中で一番高身長で一番多忙な幹部が一番満喫していた。

「切実だな」

「んー、そりやね……いっつも誰かさんの暴走をなんとかしてるから」

「うぐ……」

吾輩が目を逸らすと、いつもはもつと圧をかけてくる幹部にしては珍しく微笑むだけだ。ま、旅行中だしな。

さんきゅー温泉。吾輩は目の前に広がる絶景を前に感謝の意を告げた。

圧巻の一言に尽きる。空気がおいしいところは星が綺麗に見えるというが、今日は本当にラッキーだった。雲もなく、他に強い明かりがないために星が宝石のように輝いているのがはつきりと見える。

地球から見れば粒のように小さいそれらは、本当は地球のような星なんだと思うと、やっぱり不思議な気分になる。

前も後ろも星夜に包まれている天然のプラネタリウム。星のシャワーを浴びながら湯に浸かる。まさに至福。まさに極楽だ。

じんわりと身体の芯まで伝わる熱さに力が抜けたまま吾輩は細く長く呼吸をした。

「よくこんな見晴らしの良い場所に温泉ができたもんだな」

「里ができる前から地殻変動とか色々あったらしいね」

「ふうん」

「あ、興味ない?」

「うん」

「さようですか」

幹部はツツコミをそれだけに留めて、ぐっと伸びをした後で深く息を吐きながら今度は肩近くまで身体を沈める。

「ねえラブ」

「ん?」

「あれ、なにやってるの?」

「……………吾輩にふるなよ」

あえて触れなかった話題に幹部が手を出してしまった。吾輩は半目でそちらに視線を送る。あえて言うならあれだ。あれは温泉回ってやつだ。

「まああれだ、賑やかだな」



「わっ、クロたんのお胸やっぱりおっきい〜!」

こよはのんびりとお風呂に浸かるクロたんの背後から腕を回して、そのまま背中にご

よの体をぴとつとくつつける。絹のように嫺やかな素肌がこよの肌に密着する。

珍しくいろはちゃんにちよつかいださなからどうしたのかなと思つたら、どうやら恥ずかしいらしい。

可愛いなあ。

「わ、ちよつ、やめてー!」

油断していたクロたんが自分の身体を縮めて抵抗するけれど、そんな可愛い抵抗じゃこよはもつとイジワルしたくなるだけだ。

「え〜いいじゃ〜ん、こよに触らせてよ……」

わざと色っぽく耳に囁く。

「やつ、ダーメー!」

くすぐったかったのか抵抗が大きさになった。そうなればお胸のガードは外れて――

「えいっ……♡」

「ふえあつ……」

隙をつかれた可愛い吐息。

それと同時に指にふわりとした甘い感触。そのまま何回か触れて、最後に掌で優しくお胸を包むと少しの弾力と反比例して、優しく沈み込むような柔らかさがこよの気分を

高めていく。

と、そこまで堪能したところで、こよは満足してクロたんから体を離れた。お湯に浮きぎみなそれから目は離さずに、

「ふふ、やわらか〜い」

と正直な感想を送る。

「こ、このつ、ピンクココヨーテー!!」

「わ〜ごめ〜ん」

自分の体を抱いて顔を真っ赤にしながら怒るクロたんから、こよは逃げるようにスイスイとお湯の中を移動して、そのままいろはちゃんに近寄る。

他人事だと傍観していたいろはちゃん。慌ててる顔も可愛い。

「え?……あ、や、やめるでござるよ!」

「ええ〜?……おねがーい」

「可愛い顔でお願いしてもダメなものはダメでござる!」

「耳と尻尾、後でい〜つぱい触って……?♡」

「す、少しなら……す、少しだけでござる」

「いろはちゃん!?!」

逃げようとするいろはちゃんを奥の手で固定。許されたスキンシップを実行する。

お風呂に入ってもほんのり香る花菖蒲の香りに誘われるようにこよはいろはちゃんの脇腹をつつついた。

「つ!!」

いろはちゃんはビクツツとして逃げようとするけどもう遅い。抱きついて、くすぐつてあげる。

「こ、こよちやつ、…ひやつ、…ちよつと、少しだけ、やつ、…少しだけつてひつ、！」

(いろはちゃん可愛い)

脇腹を攻めるといろはちゃんの腕の力が弱くなつていく。そこを逃さず、今度は腋をつつつく。

「やつ……」

「あれえ、良い声だね」

「…つ!!…!!……こよちゃん……!!??」

「あははつ、ごめんごめんいろはちゃん」

「もう……」

「ほら、可愛すぎてつい」

「可愛いつてゆーな！」

「いろはちゃんに近づかないでー！」

「ほくらクロたん、こっちだよー」

そんな流れでラブちゃんの角とルイルイの脚も触りたかったけどルイルイには全力で阻止されて、ラブちゃんもその陰に隠れていたので無理でした。

残念！ byこより。

こよりハザード！

こよりハザード

研究がしたい。

いろはちゃんの里への旅行を終えて、何故か以前よりずっと、h o l o o Xの皆を研究対象とすることを強く求めている自分がいる。滝行のお陰で煩惱は流れたはずだけど、なんでだろう。

特にルイルイへの思いは強い。興味本位で最初だけは協力してくれたラブちゃん、善意でできる限り付き合ってくれたいろはちゃんとは違って、ルイルイはずっと警戒心が高くてその思惑で近づくとすらできない。

そのせいで髪や翼、四肢から瞳まで、徹底的に調べ尽くしたい気持ち溢れてくる。「ラブちゃんも研究したいなあ」

あの未知数がこよを呼んでいる気もする。

日夜色々な研究を依頼されるせいとその思いをぶつける暇もなかったけど、最近は随分と暇なので絶好のチャンスだ。

「よーしー」

——どうせなら運にも頼らないとねっ！

と、こよはやつと完成した試作品。「夢が叶う薬」をぐつと飲み干した。



「暇だな……」

「暇だね……」

珍しくも幹部までもがのんびりとしている昼。

何故かって。旅疲れだな。

温泉入ってのんびりするはずが里伝統のトレーニングをこなした上で早々帰宅というハードスケジュール。一日くらいまで余韻に浸ってもいいと思う。

休みをとって旅行に行ったら余計疲れるという社会人あるあるなんかしてくれ頼むから。

「ラブ社会人じゃないじゃん」

「吾輩実質サラリーマンみたいなもんだろ」

「サラリーマンをナメてはいけない」

そんな軽口を叩いてるときだった。

パツという無音の合図と共に明かりが消える。

「ん？」

突如として真つ暗になつた世界。

光を失つた世界は音すら遮断するのか、以前は聴こえていたはずの雑音だとかは全部消えた気がする。吾輩と幹部が発する微かな呼吸の音くらい。

だが大丈夫だ。その音が落ち着いていることから一目瞭然だが、吾輩と幹部は動揺することはない。暗闇慣れてるからな。

「ブレーカー落ちちやつたのかな？」

「かもな。おいカラス」

吾輩がその名を呼ぶとどこからかひよっこり黒いもふもふが現れる。暗闇の中でも目が利く吾輩にカラスは近寄つて小さく鳴いた。

「……………ア」

「ブレーカー見てきてくれ」

「……………ア」

もう一度鳴くとパサツと翼を広げるカラス。

そのまま開いている扉から廊下に出ていなくなる。

そして、それから30分が経った。

「遅いな……」

「ね」

カラスの移動は吾輩を持ち上げないとそこそこ速い。結社はそれなりに広いけど、ここから30分もかかる距離じゃないはずだ。

本来、鴉は夜間に行動することはない。しかし吾輩と一緒にいるカラスは何故か夜に活発に動き回るといふ、秘密結社に都合の良い奴だからな。こんくらいなら問題ないはず。

そんなカラスの夜目で迷うか？

ていうかブレーカー落ちなら、どうせ寝てる新人は置いておいても侍と博士はなんか反応するはずなんだけどな。

……いや、すぐに博士の悲鳴が聴こえてこないってことは研究途中とかでデータがパアになったりはしてないってことだから、まあ寝てるってこともあるか。

侍もホラゲー苦手だからこつちに飛び込んでくるはずだ。そう考えると妙だな。

なんにしてもとりあえず吾輩自身の目で確かめる必要があるか。

「はあ………吾輩行つてくるわ」

「あれ珍しい」

「ついでにカラスも拾ってくる」

「いつてらっしや〜い」

幹部ののんびりとした声に手で返事をして、吾輩は部屋を出た。

コツコツ。

無音と不可視の空間に躊躇なく波紋を生む。カラスよりもずっと夜目が利く吾輩にかかれば屁でもない。ただ暗い空間ならホラゲーやホラー映画では日常茶飯事。

そんな領域、吾輩はとつくに卒業しているのだ！

ふっふっふ！

侍ならこうはいかんだろ、と吾輩は歩き続ける。

「ふんふーん、ふふっ、ふーん♪」

なんか楽しくなってくるな。あれだあれ。小さい頃に夜に外に出たら新鮮な気持ちになるあれ。よふ〇しのうた。

幼い頃はなんでもかんでもでっかく見えてたもんだ。

『あらラブちゃん、何してるの？』

『ちきゅーと同じ大きさのボール作った！ぎやはは！』

あれで満足してた日々が懐かしい。

なんてことを考えていたら、ようやくと電気室に辿り着いた。ここまでで約5分。やっぱりカラスが戻ってこないのは変だな。

「ま、早く直して戻るか」

そう扉を開ける。

「ん……?」

その時、吾輩の目は電気室内の様子を的確に捉えた。

何故か地面に突っ伏して寝てるカラスと新人。

「えっ、と……?」

落ちてないブレーカー。

そしてその前に立つ、様子のおかしい博士——

「様子のおかしい博士」

その事実だけで、吾輩の中で警戒の鐘がガンガン鳴った。

「は、博士……?」

「——うふ」

「!?」

吾輩が声をかけると博士はやつとまともな動きを見せた。肩を震わせて何かを耐えているような動作。まともな動きなのに博士以外の景色と噛み合っていないのが違和感すごい。

「うふふふ……いらつしやあい」

でも、なんだこりや。

「あははははっ——!!!」

それだけのことなのに、悪寒がやばい。

「……………ねえラブちゃん」

「ひっ!」

ようやくと吾輩の名を呼んだ博士はこちらを見据える。その目はある感情によって燃え滾っているのがわかった。

「……………一緒に研究、しよ?」

——それは欲。知識欲だ。

主に吾輩達に向けての。

「吾輩今忙しいからっ!!!」

それを認識した途端回れ右。

吾輩は全力で地を蹴って電気室から這い出る。そのまま幹部のいる部屋めがけて一目散に駆け出した。

「逃さないぞお……!!」

博士はそれを全力で追いかける。

そして、博士ハザードが始まった。

「いやっ、なんのっ、ホラー映画だっ!!」

吾輩は、まだ卒業できてない物理的な恐怖に泣きそうなりながら足の回転をさらに速めていった。

こよりハザード②

「まさか、電気止められた……？」

ラブがとことこ歩いて出ていった後、私は史上最悪の可能性を考えていた。

電気代の滞納はある程度しても電気がすぐ止められることはない。催促の音が強くないため放っておいてしまう人もいるらしく、電気が止まってから緊急事態だと自覚したなんて声が少なくない。

もしかして払えてないとか。

他のことに忙殺されて忘れてたとか。

「いやそんなこと……いやいやさすがにね」

先月末に行った収支計算では確かそこらもちやんと算出したはずだからやばかったら気づくはずだ。うん。大丈夫。

自分で自分を納得させる。

そんな時だった。

「幹部ッ!!!」

「んっ？」

まだ電気が復旧してないうちからもの凄い剣幕で舞い戻ってきたラプに私は首を傾げる。呑気な私の反応とは裏腹にラプはまさに命懸けみたいな表情だ。

その理由を知るのは二の句で事足りた。

「幹部やばい！博士がやばい!!」

「――」

こよりがやばいとラプが言う。

「ラプにとって今こよりは脅威。」

「こよりは日頃から私達を研究したがつている。」

「やばい。」

カシヤカシヤカシヤ、チーンと過程を半ば省いて解を導き出すと同時に、ラプが入ってきた扉からゆらゆらと桜色の耳が顔を出す。

「こんこよお……、あつ、ルイルイク、探したよお……」

咄嗟に鷹の目で視認する。手には危ない色の液体で満ちているフラスコ。次にそのフラスコに貼られたネームテープと「捕縛用」というメモ。

「さあ、研究しよ……」

最後にそうやって現れたこよりの、その瞳を見た私はラプの真剣さの正体を知ると同時にすぐに逃避行動をとらなかつた自分を罵る。

「やっぱ！」

「だろ!? 逃げるぞ幹部!!」

何故こよりが「ああ」なのかは今考えることじゃない。とりあえず逃げなければ研究という名目で調べ尽くされるのだ。

「ラブ、転移！」

「できません！」

「へ？」

「使えたら走ってここまで戻りません！」

「え、なんでよ！」

「博士にアンチマジック張られちゃいました！」

「え……」

「アンチマジックシールド……完成していたの?……わーたーしーにかーえーりーなーさーいーいー!」

「いやふざけてる場合じゃないでしょ!」

「ルイルイ、ラブちゃあん……」

「ひいっ!」

アンチマジックシールド。魔法使用を妨げる効果を一定領域内に付与する結界。前にこよりに見せてもらったことがあるけど、まさかそれまで駆使してくるとは思わなかった。

恐らく、結社の中はもう魔法使用不可だ。

こよりの不気味な笑顔がさらに恐怖を駆り立てる。

「どうするんだよ……こよりがいるの扉の前じゃん！」

「いや吾輩のせいじゃないぞ!？」

「確かにそうだけど——」

「——さああ……研究のお時間だよお……」

「ひいっ——」

どうする。どうするどうするどうする。考える鷹嶺ルイ秘密結社幹部の苦勞人。こよりは扉の前。私達と相對している状況。さすがにあの状態のこよりの傍らを通り過ぎて扉から逃亡するのは絶望的。

——いや、あの状態？

理性恐らくなし。五感は通常以上。

それなら——

「えいっ」

「んあ？」

「……もう一步」

「……お、おう」

一步。こよりの意識の割合がラプに偏る。

「もう一步」

二歩。さらに偏る。姿勢がラプの方へ傾く。

「あと少し」

三歩、四歩。

ラプの方を向くようになる。そしてこよりの方から一步、踏み出した。

「っー」

刹那、私は扉に向かってダツシユした。ラプよりも私のほうが扉に近くなつて、結果こよりの意識が突如として私に向き、そのまま私に飛びつく。

その足が地を蹴る寸前。

「ラプ、いけるよー」

ラプは私に向けて飛び上がったこよりから視線を切り離し、迅速に扉から外に出る。私もラプから視線を切つて、超速低空跳躍で迫るこよりを鷹の目で補足。十分引き付けて飛翔。こよりが着地する前に鋭角に扉に向かって部屋の中を翔ける。

こよりを躲す際に液体が脚にかかったが今はそんなことを気にしている場合ではない。

「そしてこよりがこちらを向きながら着地するときには、位置関係は逆転していた。」
「ごめんこより、逃げるね」

再び凄いい速度で迫ってくる頭ピンクコヨーテから、私はラブに倣って逃げ始めた。最終目的地は研究室。

あるあるだから考えたくないけど、試作品を自分で試してその効果にあてられている可能性が濃厚だ。研究室に行けば何を飲んだかが分かって、解毒薬も見つかるかもしれない。

まずはここを凌いで身を隠す。

遠ざかりながらも色の褪せた目で追いかけてくるこよりに背筋を凍らせながら、私は全力で翼をはためかせた。



暗い。

ただひたすらに、暗い——

「ルイ姉え……こよちゃん……」

”頼りになりそうな”仲間を呼びながら修練場の隅っこで縮こまる。お化けが怖い風真にとってこの暗闇は地獄の試練よりも怖い。

いや、暗闇だけだったら問題なかったんだ。

ずうつと変化のない暗闇に不安になり始めた風真。そこに遠くから笑い声や悲鳴が聴こえてきてしまったのがダメだった。

電気が消えて笑う人はいないはずはないから、きつと幽霊がいるに違いない。いま外に出たら、廊下を不用意に歩いたら、その後起こることを想像し、動けない。「助けてでござる……」

大丈夫だ。きつとすぐに電気は点いて、なんともなしで終わるはずだ。

——多分。

体育座りを崩さずに、ポジティブに。

でも身体の震えは止まらないでござるよ……。

こよりハザード③

『夢が叶う薬！』

こよりの研究室。研究台の上にはそんなことが書かれた空のフラスコが横たわっていた。しかし私はそのフラスコと近くで閉じてある文献を交互に視線を送る。

「……………」

「かんぶー、なんかあったかー？」

奥の方を探していたラブが私の名前を呼びながらトコトコと戻ってくる。顔からして「成果なし」といった様子だ。

「いや、これさ」

「ん、…………『夢が叶う薬』？」

「うん」

「結構減ってるってことは多分飲んだんだろうな」

こよりの夢が私達の研究なら運的な要素を底上げしておこうと思ったのかもしれないけれど、ただどうしたってあの状態にはならないはずだ。

なら凶暴性を増す薬とか、そういうの方が納得できるけど。

これは関係ない、のかな……。

ならなにがどうなって——

「でも、どれがどれだかこよにしか分からないしなあ……」

付箋でどんな薬か分かるのは一部の薬のみだ。

さすがにこよがどの意図で文献のどこを参照してどの薬をどう調査して作り上げたか探るのは骨が折れる。こよが徘徊している中悠長にやれることじゃない。

(それに……)

私はさつきこよを躲す際に液体がかかった脚に視線を向ける。

こよから隠れている最中、そして歩くたびに響く違和感。その正体としてくるぶしから膝近くまで氷に包まれている。

「あっちゃー、すぐ振り払っただけじゃだめか」

「捕獲用」の正体はやはり凍結薬だった。対象にかけるとものの数秒で浸透して全身を凍らせる薬。対象が死ぬことはなく、ただ身動きがとれなくなるだけの薬。

かかった瞬間に取り除いたけど、さすがに全身とはいかなくても脚くらいは凍っちゃうか。

「とりあえずこよりを元に戻す薬くらいは探さないと」

私はとりあえず上手く動かない脚をほっぽって、ラプに目標を示した。けだるげに頷

くラブと一緒に目当てを探し出す。

「さすがに解毒薬くらい常備してるだろ博士だし」

「はは……解毒薬ね」

あれは毒じゃなくて薬のはずなのにね。

「解毒薬ってか、語呂悪いな」

「ほんとだよ」

薬品に気をつけながらも私とラブはデスクの上の薬達に注意を向ける。できればもっと漁りたいけれど、さすがにどんな薬があるか分からない場所で無理はできない。

『『この動画が気になっちゃう薬』って……どういうこと？』

付箋がはつてあるのはありがたいけど、それでも使用意図がいまいち分からない薬も沢山ある。

「お、爆発薬だ！」

いや『足止めする薬』つてき……

爆発で何を止めるんだよ。

「声大きいってラブ。っていうか前見たじゃんそれ」

「この前試したら火力がやばくて結社内で使用厳禁になったやつだな」

「適当に試そーぜって結社内で誰かさんが投げたからね」

「……………えーだれだよやったやつー」

あの時は、炎が中々消えないのがこよりのこだわりだと胸を張るこよりが普通に怖かった。それにそういうのを結社内で躊躇なく投げるラブが悪魔に見えた。

「一体何を足止めするつもりだったんだらうね」

「肥大したモンスターの頭だろ？」

「それ仕留めちゃってるじゃん」

ラブがぶっこむネタと脳裏に蘇るあの時のやばい景色に苦笑いしつつ搜索を継続するけど、置いてあるフラスコにそれっぽいのはない。

「ないな……………」

「ないね……………」

そろそろこよがこつちにも来てしまうかもしれない。一応結社は結構広いけど、隠れるのもいずれ限界がくる。

「ま、さすがに『夢が叶う薬』とか『凍結薬』の効果も吾輩達に消されないようにはするだらうし、当たり前つちやあたりま——」

なんとかしなきゃなあ、そう思った直後だった。

全部言い切る前に腕を組んでいたラブの声が途絶えて、そのまま何かを呟きだした。

「……………待てよ、まずなんで博士はあんなに……………」



博士はいざというときのための用意を結構する。例えば凍結薬で自分が凍った時のために凍った状態でも意思疎通できる薬を事前に飲んでたりする。

それは吾輩達に対してもおんなじだ。

博士は運の底上げをするために『夢が叶う薬』を飲んでるんだろどうせ。んで凍らせて捕まえる用の薬も持ってた。

なら、吾輩たちが協力して解毒薬を持ち出して使わないようにどこかに隠すのが普通の対応だ。それを多分博士はやったから解毒薬がどこにもない。

そう仮定すると博士は何故あんな風になった。なんであんな風になって吾輩達を捕まえる必要があつたんだ。

吾輩達が逃げたみたいにも、あの状態だと間違いなく捕まえられる確率は下がるはずだ。頭を使って追い込む方が得だからな。

仮に理由があつてあんなつたとして自分が解毒薬を持ってないのは変だろ。そんな状態で得られるメリットなんてないはずだろ。

なら博士はあんなるために別の薬を飲んだんじゃなくて、間違えて飲んだ（あるいは

作った)薬の作用でああなってるって考えたほうがいいんじゃないのか。

解毒薬を隠した後でダメ押しで飲んだ薬。

原因はあれだ。

そこまで目を瞑って考えてから、吾輩は幹部に向かつてその物を持つてくるよう言おうとするが、どうやら同じ答えに辿り着いたっぽく、もう読んでた。

『夢が叶う薬』の近くにあった文献を。

「ラプ、これ！」

「……………なるほどな」

んで、目を見開いてそれを渡してくるってわけだ。

吾輩の推測通りなら、博士が飲んだのは『夢が叶う薬』ではなく——

「——『夢を叶える薬』ってことだな」

がちやん。

吾輩がそう告げた瞬間、扉が開く音がした。コロンで解決パートが来た時みたいな音だ。悪くないな。

……………って、あれ。

「あ……」

幹部がちゃんとホントに開いた研究室の入口を見ながら「やつべ」って顔で笑う。吾輩もそれを見て「まじかよ」って顔で同じ方向を見た。

博士がいる。

「うふふふふふふふ」

「いや怖いわ！」

「これからって時に！」

原因が分かったただけで打開策はまだ練れてないんだ。

咄嗟に身構えた吾輩と幹部を見ながら、博士は持つてるフラスコの中の液体を少しだけ扉にぱしゃつとかける。扉は秒で氷で埋め尽くされる。

「おっと……？」

「薬の効果が弱まってきて、頭を回せるようになってるとか……？」

吾輩たちが文献の中から見つけた『夢を叶える薬』

『夢が叶う薬』みたいな面白そうな薬じゃなくて、無意識に夢が叶うまで行動し続けるとかいうバケモンみたいな薬だった。

博士は『夢が叶う薬』と間違えてその薬かそれに関係するなにかを口にしてああなつたんだ、多分。

どんなラブコメだ。まんま主人公が薬にやられたヒロイン助けて惚れられるルートじゃんかよ。

副作用で理性とか思考とかがやばいくらい鈍るらしいから、あの時は逃げたけど今回は扉を壊すしかまともに出る方法がない。

壊すとなると少し時間がかかる。魔法も使えないしな。

んで、博士はほどよく薬が抜けてきて思考力が戻ってきてると。

うん。

「いやそれ、勝ち目なくね？」

「ふふふふ、あはははは………♡」

「はーと、きゆるん、じゃねーわホントに」

「ラブもふざけてる場合じゃないって普通に」

割と洒落にならない状況の中、吾輩&幹部と博士は対峙する。それは信念のぶつかり合いか、それとも反逆者の抵抗か、弱肉強食の世界の必然か、はたまた――

「――ラブ、余計なこと考えてるでしょ」

「……………」

エスパーかお前は！

面白そうな雰囲気無しじゃねーか！

「ま、確かにこんなドタバタそうないけどさ」

「バ○オハザードみたいだよな」

「あんなに被害拡大しないしゾンビは出ないし、ただのおふぎだからシリアスでもないけどね」

「この状況をシリアスじゃないとかどんな鋼メンタルだよ。」

「ま、とりあえず……」

「なんとかしよっか」

「ん」

研究室。薬品の匂いが漂う部屋の中で吾輩らは向き合う。

とりあえず次回に続くぞ、っていう話。

こよりハザード④

とりあえず吾輩達は逃げるか隠れるか抑えるかしなきゃいけないんだが、簡単に逃げられないしもう隠れられないし抑えるにしても凍らされるかもしれないしでパニックなわけだ。

ぶっちゃけ勝ち目が無いすぎる。

「暴れようにもここ研究室だしな」

「絶対にやめてね。これ以上損害出したら終わるから」

「え、結社存亡の危機?」

「……………ほんと、頼むよ?」

うわあ、幹部のガチの顔だ。

誰だよさつきシリアスじゃないって言ったの。

文献を参考にすると『夢を叶える薬』の効果と副作用を消す方法は二つあるらしい。

一、時間経過

二、解毒薬の使用

「んで、解毒薬はないからとりあえず薬が抜けるまで耐えろと」

だからとりあえずさつき言った「逃げる、隠れる、抑える」が必要なんだが、さつき言った「逃げられざる、隠れられざる、抑えられざる」があるんだこれが。

「んん、やっぱり勝ち目ないな」

「なら……………」

そう。だがまだ吾輩達には「頼る」がある。

吾輩がブレーカーを戻しに行つて博士と遭遇した時には新人はもう倒れてたから多分寝てるところを捕獲されたか眠らされてるはずだ。

なら新人を呼ぶのは意味がない。

しかし、うちの戦闘役は一人じゃない。

吾輩は思い切り息を吸つてそのまま大声で呼びかける。

「さむらーーーーい!!!どつかで体育座りしてないで壁ぶつた斬つてもいいから研究室

こーーーーい!!!」

「え、ちよ、ラブ、さすがに壁を壊すのもダ——」

幹部が吾輩に向けて静止の手を伸ばすけどさすがに遅い。結構な非常事態っぽいし壁の一枚や二枚は消費しないとダメだと思う。

と、吾輩の言い訳を吹き飛ばすように壁に綺麗な斬り込みが入つて、その一瞬のうちに瓦礫に変わった部分が崩れ落ちる。

「最初から呼んでほしいでござるよ!!」

その先にいたのは涙目の侍だ。

「わり、さすがにきつかったわそれは」

「いきなり暗くなつて変な笑い声とか聞こえるから本気でお化けが出てきたと思つたでござるよーもう、ばかー! あほんだらー!」

「いい加減慣れろつて! 吾輩なんてその段階は二万年前くらいにとつくに乗り越えてるぞ」

「この前と言つてる年数違うでござる!」

「わあ、いろはちゃんだあ♡」

「え、こよちゃん……?」

吾輩との言い合いに夢中のいろはがやべえ博士の言葉に気づいてほっぺをピクピクさせる。

「おいでえ……いろはちゃあん……♡」

「ら、ラブ殿?……ルイ姉……?」

「というわけだ。大ピンチだな」

「ごめんいろは」

ふてぶてしく笑う吾輩と苦笑いしている幹部を両方視認して状況を飲み込んだらし

い。侍は判断が早くて助かるんだこれが。

「というわけで、足止め頼む」

「ええええ!!」

「その隙に、吾輩は逃げる」

「ええええ!!?!」

「さあ、いけ!」

手をブンブンと振って吾輩はいろはに戦闘指示。いけ侍、なんとか博士をくい止めるんだ!

「も、もう……後でちゃんと聞くでござるよっ!!」

ぶつくさ言いながらも刀を抜いて峰を博士の方に向けながら距離を詰める侍。吾輩達はその残滓から目を離して幹部と一緒に走り出す。

「ほら、侍が来たところが開いてる!」

「わかったわかった!」

カキン。

と、音がした。

「え……………」

見れば侍は既に姿はなく、謎の氷の山が博士がいた場所の近くに生成されていて、博士がこちらに向かって飛んできているのが分かった。

「え……………」

もう一度声を出す時には、もう博士は目と鼻の先にいた。

「なっ……………!?!」

咄嗟に躲す吾輩と幹部。

侍が来た穴の前で吾輩らを逃がすまいと捕獲用の凍結薬を揺らす博士を「まじで？」という顔で見ながら状況を整理する。

「お、おい博士、侍はどこだ……………」

「そこで、凍ってるよお……………」

嘘だろ？

異次元の強さの侍をあ時間で凍らせた？

いや、無理だろ。

「いろはちゃんはやさしいなあ」

「……………」

「手加減してるのバレバレだよお……………」

「……………なるほど」

幹部が勝手に納得してる。

「おい、納得するな幹部、吾輩にも教えろ」

「……………つまり、多少抑え気味で仕掛けてきたいろはの攻撃をまず受け止めて電気ネットで拘束して薬で凍結させたんだよ」

さすが鷹の目だな。吾輩には見えなかった侍と博士の攻防をぼんやり視界に入れてたのか。

「……………おい博士、お前ガチパじゃねーか。なんだ電気ネットって」

「研究するんだよお？……………いろはちゃん対策なんて、いくらでもするよねえ……………？」

うわあ、やつべえまじで。

何回やつべえって言ってるんだろ吾輩。

「さあ、やあつとルイルイとラプちゃんの番だよ……………」

ニコリと笑いかける博士。

いよいよ本当に為す術がなくなった吾輩達に歩み寄る。

「あ……………」

そんな時、幹部が声を漏らした。

チラツとそつちの方を見ると目を見開いて口元を笑みに歪めた、明らかに何かを確信している感じの幹部の顔がある。

「ラプ」

「策ありかよ」

「……………うん」



「ラプ」

舞い降りた挽回の策の欠点を未だ頭の中で演算しているところで、口だけはラプを呼んでいた。

見えたか見えてないかのぎりぎりのところだけど、私の目はそれを捉えてくれた。こよりの歩行の揺れから生まれた隙間。

壊れた壁の向こうの部屋にいた、挽回のピース。

「策ありかよ」

「……………うん」

何かを察して任せようとするラブに私は顎を引いた。

「ラブがこよりに突っ込んで」

「……………はあ？」

「私が気を引く」

「おまつ、……………それって吾輩が『ほうら凍れ』ってことかよ」

「そう」

躊躇なく「行け」と伝えようとラブはもちろん凄く嫌そうな顔をしながらこちらに抗議の視線を向けてくる。でもしようがない。

適材適所だ。

こよりの気を強く引けるのが現状多分私しかない。

ラブだと少し、迫力不足。

「……………しようがないな。それでいくか」

「ありがとう」

言うなり、ラブがこより目掛けて突進する。いつもぐうたらな様からはあんまり想像できない速さでこよりに近づいて、目前でジャンプ。頭上から手を伸ばしてダイブする。

こよりは勿論葉をかけるべくフラスコを腕を振る。溢れだした水滴はラブに付着し

て当然すぐにラプの身体に氷が張り巡らされていく。

その瞬間私は大きく翼を広げてこよりを威嚇。強制的に視線をこちらに向けさせる。こよりは再度フラスコを構える。

こよりの頭には今、ラプを囿にしてこちらが本陣として何かを仕掛けるといふ思考がちらついているはずだ。

従つて背後から近づく刺客には気づかず、そのまま背中に激突した刺客の攻撃に不意をとられ、足をとられる。

「キャンっ！」

そう。

研究室の隣にあるこよりの部屋。そこにいたコヨーテ型ロボット。

こよりがラプを攻撃したことでこよりを止めるために体当たりをかましたその存在は可愛く吠えて。

バランスを崩したこよりは倒れ様に自分が持っていたフラスコから滴る液体を存分にその身体で浴びた。

カキン。

そして無音のままに凍る。

「……………ふう……………」

策はハマった。

やっと静止した暴走の研究大好きコヨーテを確認して、私は周りに氷塊しかない研究室と破壊された壁を見ながら後片付けの大変さにくらくらしながら、座り込んでため息をつく。

「ワフ」

私を宥めるように、ロボットちゃんがもう一度鳴いた。

こよりハザード⑤ (エピローグ)

案の定凍っても意思疎通ができる薬を飲んでいたこよりに結構な頻度で意識調査をして、完全に薬が抜けたことを確認した。

解毒薬の在処を聞いて、ラブというはを復活させてからこよりを氷から解放し、念の為すぐ解毒薬を飲ませ、騒動は完全に幕を下ろした。

なんだかんだ最近こよりが作ったコヨーテロボットちゃんが助けになったけど、今後こういうことになれば手に負えなさそうなので、こよりにはしっかり注意してもらおう。

「えぐすぎだろ……作る薬を間違えんなよ」

「えへへ、ごめんなさ〜い」

「ま、何事もなく終わってよかったでござるよ」

「何事もないわけないけどね」

「だいじょぶだ幹部。後片付けは寝てた新人にでもやらせればいいだろ」

本当に案の定、沙花又はこよりに眠らされていた。

私達が頑張っているなか、皆が凍っていく中、一人だけ爆睡を決め込んでいたことになる。

まあ、それなら任せても文句なしか。

「それにしても、どえらいもん作ったな」

ラブが「夢を叶える薬」を見ながら言う。

「あはは……、前に作ったことがあって、それと被っちゃったんだよねえ……ごめんね皆」

「前に……？」

「うん、ラブちゃんに効くかなって」

「へ……う？」

なるほどね。

こよりの言いたいことがなんとなく分かった。

「ふうん、つまりこのお子ちゃまに仕事させようってことか」

「さすがルイルイその通り！」

「ま、確かにラブはそのくらいやらなきや地球征服なんて、できっこないしね」

「はああ!? なんじゃそりゃ！」

もぎやもぎやとラプが騒ぎ出す。

「おいその薬、絶対吾輩に飲ますなよ!？」

「なんでだよ」

「いいじゃーん、ラプちゃん試してみよーよっ」

「やだ!絶対をやだ!」

「どんだけ仕事したくないんだよ。」

「本当に秘密結社なのかな、ここ。」

「んおはよ……」

「お、やつと新人が起きた」

「クロたんごめんねー!!」

「え、なに?なんの話?」

「とりあえず新人、お前ここの掃除な」

「へ?……は、はあああああ!？」

「頑張れ掃除屋、この結社の存続は新人にかかっている」

「え、嫌なんだけど」

「はああ!? やれよお前ー! 爆睡かましてたんだろーが!」

「知らないんだけどー! 総帥がやってよー!」

「吾輩疲れたのー!」

はあ、私も手伝おっかな。

この口論すら永遠に終わらなそうだし。



というわけで、なんとかおしまいです。

完全にココロちゃんのお披露目回と化した本章ですが、まあたまにはこんな無理のあるお話もいいですよ。(いつもガバガバですが)

次章内容は未定ですが、どこかで一話完結でもやろうかなとは思っています。されど未定です。

ではまた!

【一話完結】吾輩とゲーセンの猛者

ゲームセンターっていうのはすなわちデイズニーだ。

そこに一歩踏み込めば世界が変わる。

機械音、声、タップ音、コインの音。

色とりどりのぬいぐるみ、お菓子、フィギュア。

喧しくも愛すべき世界へと変わっていく。

さて、吾輩がなんでこんなことを言うのか、分かる奴はいるだろうか。

「ごめん、同窓会には行けません。わたしは今、ゲームセンターにいます……」

そう。吾輩は今、ゲームセンターにいるのだ！

なにを隠そう吾輩FPS大好き宇宙人。

初めて地球に来たときはその穏やかな感じというか平和ボケしてるところに憧れたわけだが、そんなことより吾輩の視線を搔つ攫ったのがゲームセンターにあったアーケード型FPSだった。

目を刺激する映像美とスピーカーから流れる多種多様な音声。グロイストーリー。

地球換算200円では安すぎるだろうと言いたくなるゲームクオリティ。

何よりそこに立って銃を手にする人達を見て「のんびり日本にもこんな文化があるのか！」と感動した。

それから随分年数は空いたが、h o l o Xを設立してバーチャル東京から少し離れたの山奥で生活するようになった吾輩は、頻繁にゲームセンターで遊ぶようになった。

ちなみに最近の一推しはこれだ。

「今日こそクリアしちゃうぞ〜」

吾輩はお目当てを見つけてお金を入れる。

ゾンビが相手のFPS!

吾輩ホラーにはめっちゃ強いからゾンビに怖がることもないし、逃げ回ることもない。

と言うと緊張感がないかもしれないが、なんとなくプロミたいな気持ちで、凄くゲームの世界に入り込むことができるのだ。

そしてこの退廃的な世界観が結構面白い。

この前見つけて2回くらいプレイしたが、2回目でも惜しいところまでいって終わってしまった。

あのとときの本命はクレーンのフィギュアでそこに相当お金入れちゃったし。

でも今日はいける!

ちなみにスコアとかもあるから、クリアは前提としてそこで争う猛者もいるらしい。
あわよくば吾輩のお名前をそこに刻むのだ！

吾輩は黒く塗られた銃を二丁担いでニヤリと笑った。



「おりや、……おりや、っ……！」

その後、3回くらい簡単なミスをして泣きの4回目。

もう普通にやけくそ気味な吾輩は声を出しながら必死にゾンビくん達を狩っていく。
最初は「全部ヘツシヨだ、二言はない」とか言つてたのに、もう忘れた。

「おー、ちっちゃい子が一人で頑張ってる！」

「あんな怖そうなのよくできるよね、ウチ無理」

「んねー、もう少しでクリアできそうじゃーん」

「あれ、そういえばころねは？」

「ころさんはね、あつちでドンキーコングやってるよ」

なんかギャラリイもいる。

ゲームに集中したくて後ろ見えないから正確な数は分からないが、三人？

「あ、やばっ」

やベミスった。

「ああ、頑張れっ」

「頑張れー！」

「ふあいと〜」

後ろからもギャラリイの応援が聞こえてくる。

「吾輩は……ここぞでっ、……勝っ！」

両手の銃を振り回す。しっかりと何発入れればゾンビがダウンするのかを計算した上で遮二無二に振り回す。

少しずつ、包囲の厳しさが緩和されていく。

そしてついに画面上の全てのゾンビを蹴散らした。

「やった……ふふ、やった……♪」

前来た時に乗り越えられなかった壁を乗り越えた。遅れてきた達成感にほそ〜く息を伸ばす。パチパチと拍手が聞こえる。

あとは、ボスだ。

といってもこのゲームのボスは負けゲーと決まってる。主人公がボスにやられて「次があれば、必ず……！」と言い残してこのゲームはおしまい。

他の上手すぎプレイヤーがそうだったのを何回か見たから間違いない。

なのでもうクリアは確定しているのだ。

一応の目標は達成したことになる。

じゃあなんでボスとわざわざやるのかと言うと、避けられない即死攻撃が来る前にどれだけダメージを稼げるかでスコアに差が出てくるってわけだな。

「よーしっ」

と、言ったところでボス戦までの僅かな間に振り返ると、三人のギャラリーは既にここを去っていた。

その人達かは分からないが、向こうへ歩いていく、ぴよこぴよこ動いてる白と紫の黒のケモミミが筐体の隙間からチラチラ見えた。

お礼を言いそびれた、とゲームの方に視線を戻すとちょうどボスが現れたところだった。

「吾輩の経験値になってもらうぞ……」

さつき即死の攻撃が来るまでとは言ったが、それはボスがそれ以外の攻撃をしないことにも、それでダメージを喰らわないことにもならない。

最終的には負けるが、スコアを稼ぐには他の攻撃を回避しつつづける必要がある。「うりゃっ……!」

吾輩はそれをこなしながらもはや吾輩視点ではそこにいるボスに必死に銃を向ける。どろどろと溶けたようなボスの身体に弾丸が突き刺さる。

いい感じだ。このままダメージ稼げばいける!

「おおお……ドロドロゾンビ……!」

またギャラリーがいるみたいだ。

さっきの三人とは違う、少し訛りのある女子の声。

だがその声は呼吸へと変わってすぐに何処かへ走り去っていった。

「見られるのもなんか変な感じだな……!」

言いながら吾輩はボスから注意を逸らさず銃を向け発砲し続ける。着弾した箇所から順に出てくるダメージ表示と、その隙間から見えるボスの攻撃モーション。

攻撃位置をあらかじめ誘導して、寸前で回避していく。

それで、撃って撃って撃って――

ついにその時はやってきた。

「おお……終わった……!」

ボスの即死攻撃が主人公を捉えて、お決まりの良い台詞を残して倒れる。そして f i

n i s h のテロツプ。

やりきった。吾輩はやりきった。

大きな感動を胸に、目はスクリーン内のスコア表に釘付け。そして吾輩のスコアはぐるぐると加算されていき、3位のところで止まった。

軽いファンファアールが鳴る。

「よしー」

名前は5文字残せるみたいだったので胸を張って「さいきよう」にしておいた。

すつきりとした開放感に伸びをして、ブースから離れる。喉が乾いたので自販機でコーラを買うことにしよう。

そう自販機にテトテトと向かう最中、聞いたことのある声がブースの方から聞こえてきた。

「おかゆ、フブちゃ、ミオちゃん！このボスがドロドロで面白いから一緒にやろー！」

「ころさん探したよ！ボク疲れた〜」

「ごめんごめんおかゆ、だけどこれ面白いんだよ！こおねが保証するよー！」

「あれ、ていうかこれってさつきちっちゃい子が……」

「あ、うん。さつきフブキちゃんと見てたやつだね〜」

「あれ、そうなの？……じゃあ早くやろう？」

「ウチこれ怖そうだからちよつと……」

「じゃ、ボク少し休憩してるから、先フブキちゃんからね〜」

「え、白上から!?!……よーし、じゃあやっていきますか!」

「次ミオちゃんね」

「え……」



「あれラプ、なんでそんな微妙な顔してるの?」

「ん?……ああ」

「確かゲームセンター行ってくつて出てったじゃん。もしかしてお目当てのフィギュア取れなかった?」

「いや、別に」

「へえ、じゃあどうして?」

普通に休憩して最後に一回やって帰ろうと思って戻ったら、吾輩が7位になっていた。どれも5位

んで、「ゲーマーズ」という名前のプレイヤーが1〜4位を独占していた。どれも5位

以下を突き離す圧倒的なスコアで。

3位で入賞！みたいな感じだったから、少し悔しい。

(いつかまた行ったらリベンジだな……)

バーチャル東京にはツワモノがいるのだ。

吾輩も負けてられない。

エピソード

ホロツクスとホロライブ

「ふっふっふっ………」

秘密結社結成から数回しか利用しなかった会議室にて、ラブは意味深に笑う。生まれながらのいたずらっ子なのであろう怪しげな双眸に私はため息を漏らす。

なんか厄介なことをやらかす前兆だ。

「はーっはっはっは!!!」

「ねえ総帥うるさいんだけど」

「黙れ新人」

「また厄介事でござるか？」

「決めつけるな侍」

「じっけ——」

「自粛しろ博士」

「まだ何も言っていないじゃん！」

テンションが高い。それぞれのツツコミに冷静に対処しながらもお約束のオチは外していないのが高得点だ。腕を上げたねラブ。

私がそんなことをぼんやり考えて現実逃避している目の前で、ラブが遂に本題を口にする。あんまり無い胸を張って告げられたそれは、私を幾ばくか驚かせた。

「……ついに、……ついに吾輩達は地球侵略への大きな一步を踏み出すぞ!!」

「……………え、まじ?」



ホロライブとはカバー株式会社が運営するアイドルVirtualuberグループの総称で、地球内の幾つかの国に活動を広げるコンテンツだ。普段はYouTubeを中心に配信活動に勤しんでいて、周年やら誕生日やら、でっかい記念にはでっかい会場で歌やダンスを披露したりする。

一人につき数百万のファンをもつと言われ、たまにコンビなんかで配信を行ったりもするので、そうして一人を知れば他の人も気になっていく方式でファンの輪は広がっていく。

その影響力は絶大。いまやほとんどの人間が画面の奥にいる可愛い女の子や格好良

い男の子に夢中なのだ。

吾輩のお気に入りの人が本場の日本で活動してたりするんだが、声も好きだし歌も格好良いし……。

とまあ、とにかく良い感じのコンテンツなんだよ。

「そんなこと知ってるんですけど」

「おい新人、水を差すな」

「いいじゃーん。それがなんで侵略の一步になるのか分かんないもん沙花又あー」

「はあ………。ここまで言っただまだ分からないんか。所属するんだよ！吾輩達はそのホロライブに！」

「……………え？」

侍の方から良いリアクションが飛んでくる。

博士も耳びよこびよこさせてるぞ。

幹部だけは「やった！やっこのときが来た！」みたいな顔しながら頷いてるな。なんだ。まるでホロライブ加入を知ってたみたいな。

「それ、秘密結社じゃなくない？」

その時、新人の声が突如として吾輩の頬を叩く。

サー、と風が通り抜ける気がした。

たし、かに。

吾輩達が目立ったら、秘密結社じゃない。

ドウシヨウ。

「ま、元々そんな感じだしいいんじゃない？」

「まーねー」

「そうでごさるな」

「そうだねっ」

えー……。

なんかそれで納得されてる。

おい幹部。お前がそれ言っちゃうのどうなの。

「う、まあとにかく、ホロライブに侵攻して吾輩達の影響力を絶大なものとし、折を見て地球侵略を始めるんだ！」

ぎやははは！完璧な計画だな！

まずは代表取締役を捻じ伏せて吾輩達の加入を強引に認めさせることからだ。腕がなる。こういうのやってみたかつたんだ！



「あ、いいですよ」

「え……」



え、交渉は？

吾輩がわざわざ色々考えて最終説得兵器（物理で脅す）まで用意して行ったのにそれだけ？

「なんかオツケーもらった」

「お疲れラブ」

「楽しみでござるなあ〜」

「うっしやー！」

「頑張つて準備しないとね〜♪」

………なんか事が良い方向に進みすぎてる気がするんだが気のせいかな。

いや、気のせいだ！ぎやはは！



拝啓。

お父さん、お母さん、弟妹たち。お元気ですか。

吾輩遂に地球侵略の一步を踏み出すことになりました。地球時間の2021年11月26日よりホロライブに正式加入し、初配信を行います。

ホロライブは地球の中で超有名なコンテンツだから、きつと吾輩もすぐ有名人。地球侵略待ったなしです。

吾輩頑張るぞ。

さて、お話というのはその初配信のことなのです。

本日がその一日前。

終わってません。

準備が。

「終わらない……おわらないよおお……!!!」

「泣いてないで早くそれアップロードしてよラブ！」

「なんでこんなこともやってないんでござるかー!」

「ラプちゃん昨日ゲームしてなかったっけ!」

「ホントこの総帥さあー!」

吾輩の初配信まで、あと18時間。

本当に秘密結社ですか？

「ついにここまで来たんだな……」

吾輩は結社の屋上で風に熱を奪わせながら、感慨深く目を瞑っていた。結社を設立してから色んなことがあったのだからその時間は長い。

幹部を誘って。

博士を誘って。

侍を誘って。

新人を誘って。

博士に実験台にされて。

実験台。

実験台。

「よく生きてたよなあ……」

——吾輩の危機ってほとんど博士のせいじゃねえかよ。

脱線したわ。話戻す。

初めて地球侵略を考えだしたときのことを思い出す。

『わがはいにまかせとけえ！　ぎやはは！』

そこから何年経ったんだろうか。

だが今日で夢は現実になる。

そう。今日でな。

おい、吾輩が何を言っているか分かるか？

そう。今日なんだよ。

配信がさ。

「こらあつラブう!!　サボってんじゃねえぞ！」

「……………ううう…はい」

終わってないんだ。準備がさ。

「こつち差し替え、それとこつちのセトリ調整ね」

「幹部う…もう無理だつてえ…：吾輩達徹夜じゃんかあ」

「泣き言言わない！　トップバッターなんだからちゃんとしなと！」

「そうでござるよラブ殿」

「そうだよラブちゃん」

「はよやれよ総帥さあ」

なんだかんだ言いながらめっちゃ手伝ってくれる部下たちに囲まれて、吾輩はキーボードを叩き、マウスをぐりぐり動かす。

趣味の一環か機材だけは異様に揃ってたから後はそれを配信のために諸々の素材と組み合わせるだけなんだが、これがムズい。

「んがあー！ これ無理だゼツタイ無理だあー！」

徹夜で脳働いてないし。

「逃げようとすな！」

鬼の幹部がついに拘束具のチェーンを鉄骨に繋げる暴挙に出て逃げられない。ご丁寧に博士のアンチマジックフィールドまで活用して瞬間移動もできない。

締め切り直前、新デッドラインぶち切り前の小説家ってこんな心境なんだろうか。

こうやって思考の中で現実逃避だ。

「ラブう……？」

あ、やっぱ。現実逃避してんのバレてら。

「ルイルイ……終わった〜」

「あ、ホント？ ふう……これであとちよつとだね」

「ふぐぬうう……吾輩の方は全然終わらん……」

「……はあ」

悪戦苦闘していると幹部がため息をつきながら笑顔で語りかける。

「あんたならできるよ」

「あれ思うけど、ぶっちゃけトラブってる時に電話かけられて説教されてそれ言われても困るだけだよな!？」

夏の聖戦って訳すためっちゃかっこいいけど、あのアニメの世界十数人が頑張ればパ
スワード解けちゃうのが一番の問題だろ。

それと研〇くん。英語のセンス壊滅的すぎるわ。

なんであの単語の羅列で最後あのアルファベットにしたんだよ。

「いいから早くしろよ」

「はい。すみません」



「終わったあ……あー……」

配信 20分前

吾輩の配信準備は滞りなく幕を下ろした。

「ギリツギリだ……」

休む時間もない。

時空いじって時間引き伸ばすこともできなくないが、それでも中途半端な時間になるしこのまま押し切って配信やるか。

「お前ら、ありがとな」

「「「ホントだよ」」」

吾輩が心から感謝を告げると、四者四様の反応で同じ言葉が返ってくる。

「そーいや、そっちの準備は？」

「ラブが手伝うところもないほどできてるよ」

「同じく。っていつてもこよは凍結中だけどね」

「レイ姉と同じでござる」

「はあ、寝よ……あいや、起きてなきや」

吾輩の配信を観るために目を擦る新人に合掌。新人を含め部下たちに土下座して、吾輩は自分の部屋へと走る。

「カラス！ 来い！」

「アア……」

呑気に寝ているカラスを起こして頭に乗っけ、作業部屋に舞い戻る。

集中を乱すと迷惑だろうし、という理由で作業部屋から散開していったあいつらにもう一度頭を下げて、吾輩は椅子に飛びついた。

そろそろ始まる。

吾輩の野望が。

「ん……？」

待ちきれずに腕をパタパタしていると、背後にいる誰かを知覚する。

「なんだ、幹部か」

「ごめん、始まるまでここにいさせて」

「全然いいぞ」

配信開始まであと5分。

「もうすぐだね」

「おう」

幹部が何を言い出すかは分からなかったが、真面目なやつだからな。配信時の注意とか小言を伝えて配信スタートだろ。

「ありがとね」

「……………ん？」

という吾輩の適當予想を振り切つて、幹部はそう口にした。

こつからじゃ顔は見れない。

「私を結社に入れてくれて、ありがとう」

吾輩の肩に手を添えて感謝する幹部に、吾輩はもう一度この夢を見たときからのことを想起していた。

その、ある時の記憶が強く蘇る。

『なあ、吾輩のどこに来いよ』

『無理だよ。だつて私は——』

『いいからいいから。そんなの関係ないつて。あ、そうだ。お前の経歴はさ——』

『——ブラック企業に入つた、つてことにしまおーぜ』

ニヤツと笑つた吾輩と。

『……………ふ、ふふ……………はははっ！…なにそれ、面白すぎでしょ……………！』

耐えきれずに笑う幹部。

『言い得て妙だろ？』

『はははっ！……………は、わかつたよ。よろしく総帥さん』

『ん……………いやそうじゃん。吾輩総帥じゃん！』

『え、普通そうだろ』

『じゃあお前が幹部ってことになるのか』

『うん』

『うーん………っていつでもお前に総帥さんって呼ばれるのもなんかな。吾輩がお前を幹部って呼ぶのはかつこよくていいけど』

『なんでだよ。じゃあなんて呼べばいいの？』

『うーん………じゃあ、ラプラスで』

『わかった。よろしくラブ』

『おいラスどこいった』

『いいじゃん。これから長い付き合いになるんだし』

『………ん。ま、いつか』

あの時から何年経っただろうか。

真面目に答えると2年近くだろうな。

だけどそれ以上の、凄く濃い時間を送った気がする。

「これからだ幹部」

「……？」

吾輩は想起を終えて、ニヤツと笑って幹部の方に振り向く。

そう。吾輩たちがやばいほど忙しくなるのは、きっとこれからだ。

「感謝できなくなるくらい、これからも迷惑かけてやる」

「……………ふ、ははっ…。今更じゃんそれ」

幹部も笑ってそう返す。

そしてちようど、時間だ。

緊張なんて度外視で、吾輩は一步を踏み出した。



参戦のPVが投稿されてから、その話題は電撃のように迸り、広がっていった。それもそうである。躍進が期待されるv t u b e r会社の大手。その新人として選ばれた者たちなのだから。

ある者はその情報に惹かれ、ある者はその瞳に惹かれ、ある者はその未来に惹かれる。とある秘密結社の面々は膨大な人数より、その一言を紡ぐ前から期待の視線を向けられていた。

少女は自信満々に頬を吊り上げ、目を開く。目の前にはカメラとマイクがある。それだけだ。周りに人はいない。

カメラの先に無数の人々がいるのを、少女は知っていた。少しだけ跳ねている髪をかきあげ、緊張など微塵もないという風に腕を組む。

少女は総帥である。

総帥にしては時折可愛い我儘を部下に言うし、気分屋なところがあるし、破天荒かと思いきや繊細だし、そのくせとびきりの優しさをもっている。

そんな少女が、その結社の総帥である。

その少女、ラプラス・ダークネスは口を開く。

「刮目せよー！」

その言葉。

その、吾輩たちを見逃すなど吠える姿に。

視聴者は思うのだ。

本当にこいつら秘密の存在なのかな、と。

本当に——。